新撰百種第三編

女子の職業

福良虎雄編

女子に職業の尚ぶべきは今更ら言ふを待たず女子にして此心掛なくんば女子たるの資格なしと云ふも不可なし申すも畏けれど英照皇太后陛下御在世の頃青山の御所に養蠶所をしつらい御自ら蠶絲の業を始め給ひたるも皆な此御心より出で給ひたるものにて我日本の女子たるものは此大御心を奉躰し各々其職業を勵まざる可からず貴紳の家に生れたるを頼みて女子の手藝を賤視し或は容色の美麗なるを誇りて粉黛是れ事とするか如きは日本女子の採るべき所にあらず又た之れを今日の實況より考ふるに生存競爭の激甚なる社會にありては女子は單に男子の庇護のみを頼みて生活し得べきにあらねば浮世の浪の立騒かさる上等社會は兎に角、普通の階級にある女子は必ず一種の職業を撰擇し自活の法を講ぜざる可からす今女子が職業のために得る所の利益を數ふれば少女の時にありては兩親を補助し或は同胞に其の學資を供給し自身の衣食身廻り等にも不自由なく病氣若くは災難の時には心置なく療養も出來又た回復の道の付き得る丈豫備費を貯ふるの利益あるべく人に嫁しては良人の手助となりて家政を補ひ寡婦となりては自身の生計を補ひ又其子女を

養育するそを得べし故に女子の職業なるものは妙齢の際にあつては其の墜落を防止し又人に嫁し若くは寡婦となりたる後は其の貞操を保持せしむるの効力あり彼の職業の隆盛なる地方に婦の減少せる實例は此推定の誤らざるを證するに足るべし

今や日本に於ける女子の職業は日一日と發達し其の種類の多き五十餘種に上りたり左れど之を英米兩國に比すれば尚ほ微々たるを免れず米國の如きは採鑛、鑄鐵等非常の勞働を要するもの、外は大抵女子の關係せざるものなく今日にては男子の職業者は女子の職業者に對し四と一との割合を示し又た英國に至ては職業の總數三百四十九種中女子の關係せざるもの僅かに七十餘種に過ぎずと云ふ左れば我國の如きも國運の進歩するに從ひ女子の職業はます〳〵隆盛を見るに至るべし現に昔時を以て今日に比較するに昔時の「女子の仕事」と稱するものは機織、養蠶、裁縫、紡糸、洗濯等にして又た其の「職」と稱せしものは產婆、髪結、巫女、慶庵等に過ぎざりしが今や諸種の新職業起り來りて其數非常に多く現に東京市中にあるもののみを數ふるに

女醫、看護婦、
電信調査所員、小學教師、
音樂師、保姆、
女看守、產婆、
書記、電話交換手、
寫眞製造、
女俳優、

女子の職業

紡績、綿布織、
メリヤス、紙箱製造、
マッチ、巻煙草、
製帽、製靴、
襟飾製造、
製紙、活版、
刺繍、ハンカーチ、
印刷局女工、砲兵工廠女工、
三井製作所女工

羅紗織、麥稈製造、
製紐、製網、
ボタン、製藥、
昆布製造、玩具製造、
團扇、下駄緒、
製本、造花、
編物、染物、
セメント女工、
火藥製造所女工

等にして此中或は女子の職業としては如何かと思はるゝものなきにあらねど兎に角女子の職業の增加せしことを知るに足るべく昔時は內職と稱し私宅に於て營みたるものも今は公然の職業となりて工場にてこれを營み昔時は一身の嗜みとして修めたるものも今は之れを以て生活の資本となすに至りぬ是れ實に國家のため賀すべき現象にして吾人はます〳〵其の隆盛に趨かんことを祈らざるを得ず

日本に於ける女子の職業は斯くの如く多數に渡りたるを以て之れを撰擇するに多少の注意をなさゝる可からず人に能あり不能あり各々其特性に應し最適の職業を撰擇することは頗る肝要なりとす而して女子の職業なる者を、綜括すれば第一人を樂なしむる事、第二人に甘く喰はせしむる事、第三人に着せる事、第四人の清潔秩序を保つ事、第五人を救ゆる事の五項に過ぎず左れば女子は此五項に就きて自身の健康を考へ又た其の境遇を顧みて此ならばと思ふ仕事に從事するにはよろしからん吾人は幸ひに東京市及び其附近に於ける「しょとうやうしょせいざうやまた」諸工場諸製造場又は學校等を巡覽し女子の關係せる職業を精密に調査し其女子に恰好なりと思はるもの二十種を得たれば是れより其の職業の性質、修業の順序、成動の難易、將來の方途等を細述し一つは女子自身が職業を求むるの指南車となさんとす柔婉の德に富み巧妙なる手工を有する日本の女子にして此書を一讀し處世の方針を定めば希くば夫れ誤りなきに庶幾からん歟

近來下女の拂底せるとは著明なる事實なるが其原因は全く女子職業の發達して下女奉公を望むもの尠きが故なりと知られぬ、實にや我國の諸工業は日一日より進歩して女子に新奇なる職業を與へ生存競爭の實勢は女子をして自活の法を講せしむるに至れり左れば昔時は女子の職業とし云へば養蠶、糸繰、裁縫、織機、取上婆、女髪結、女柱庵等に過ざりしが近年に至りては非常に膨脹し其

を撰擇し得べきもの殆んど二十餘類の多きに上りぬ

而しで昔時は內職として賤めたるもの或は一身の嗜みとして修めたるものも今は公然の職業となりて怪しむものなく彼の工女の如きは毫も男子の作業方法と異なることなし斯く職業の發達せる結果は女子をして自活の道を得せしめ隨つて風俗を矯正せしむる力あり現に製造所の盛んなる所には賣淫婦の少きを見ても知るべし因て此に都下に於ける製造所學校等の實況を調査し細大漏らさず之れを網羅し、一は職業を求むる婦女達の栞となし、一は風俗矯正の一助となさんとす

女子の醫者

●●●●●

我國の女醫　西洋にては女子の醫者流行し米國の如きは其數三千餘名にも上りて郡醫區醫等の公職を帶ぶるものさへありと我國にても奈良朝時代には宮中に女醫の如きものありて大寶令には乳博士の名目見えたり左れども是は醫者と云ふよりは寧ろ巫覡等に近かりしものならん明治年間に至りて始めて開業醫の免許を受けたるは埼玉縣の荻野ギンと云へる人なり此人二三年前迄は明治女學校の監督醫を勤め居りしが近頃人に稼して北海道に赴きたりと云ふ初め內務省にて試驗規則を定むるや女醫なるの事は氣付かずして別段の制規をも設けざりしに明治十七年に至りて突然

萩野ギンと云へる名前の願書を東京府廳に出でたるにぞ其筋にては多少の議論ありたれども規則上別に女子の開業を禁ずると云ふ明文もなければ試驗を受けさするも差支なからんとて之れを許可したるにギン子は首尾よく此試驗に合格したれば開業の免狀をも授けられ十八年三月始めて本郷三組町に女醫の門戸を開くに至りぬギン子の開業を見るや醫學を修めつゝありし女生は競ふて願書を差出して試驗を受け十八年の後期には本田センの池澤クノ高橋ミツ等の女醫を出せしが爾來年々の試驗毎に二三名の女子合格者あり現今に至りては女醫として立派に營業し居るもの病院の助手として勤め居るものを併せて三十名ばかりあり其他開業の免狀を有し居れども其業を營まざるもの若くば看護婦となり居るもの或は前期のみの免狀を有し居るもの亦尠なからず

●●●●女醫の現況

目下女醫のある地方は重に東京、大阪、神戸、長崎等にて川越、仙臺、若松、宇都宮等にも營業し居るものあり未だ男醫を壓するほどの勢力なけれども普通田舍の篤志先生よりは多額の收入あり殊に女子は小チンマリとしたる特性あり其交際も男醫の如く廣からざれば優に門戸を張りて獨立の生活をなし得るのみならず醫者の良人を持ちたる人は夫婦共稼にてなか〳〵の好都合なりと云ふ今東京に在る有名なる女醫を擧ぐれば

京橋吉田ケン

日本橋高橋ミツ

本郷駒込伴

本郷湯島岡見ケイ

本郷駒込彌生

同

本郷駒込山

本郷馬宮八重

赤坂大村ノブ

等にて其外東京病院の助手丸茂ムネ子常宮殿下の侍醫たりし本田センの如きものあり田島丸茂の兩女は今尚ほ盛んに從事し居れども本田セン子は某山林學士に嫁し姙娠して御殿を下りたる後は其の業を廢したりと云ふ

●●●●女醫の敎育

最初に免許を受けたる女醫は女子高等師範學校若くは東京女學校の卒業生にて中には產婆より轉じたるものあり此等の女子達が醫者とならんことを思ひ立ちしは何れも男子に倚ちずして獨立の生活を營まんためにて又た婦人小兒等の病人には女醫を用ゆる方都合よからんかとの考へより出でたることなりき然して當初に女子の入學を許したる醫學校は高木兼寬氏の設立したる成醫學校にて本田セン子の如きは此學校の卒業生なり又た樫村清徹氏の設立したる杏雲堂學校にも女子の入校を許し萩野ギン、池澤クノ子等を出だしぬ此兩學校は明治十七年頃に至りて廢校となりたれば忽ち女醫の修業所を失ひて大に困却したるが十七年の十二月頃より本郷湯島の濟生學舍にて女子の入學を許すことゝなりたれば杳愛、成醫の兩學校に離されたる女生は何れも濟

生學舍に集ひて修業をなし高橋ミッ子の如きは同舍出身にて第一に免狀を受けたりと其後日本全國にて正則的に女醫を養成する所は同舍のみとありたれば女醫生の來りて學ぶもの多く年々六七名の卒業生を出さゝることなし現今同舍にて修學しつゝある女生の數は十七八名にて本年四月の學期試驗に及第したるものは後期に一人、前期に一人、臏微鏡に一人、都合三人なりき又た順天堂病院には前期免狀を有する女生の通學を許し臨床講義等を聽聞せしむる由にて現今の通學生は三四名ありと云ふ

●●●●女醫の伎倆　今日の女醫は其伎倆に於て男醫に劣らざるのみならず其學文の點に於ても男醫に優るもの多し女醫中には日本にて開業免狀を受けたる後獨逸亞米利加等に赴きて十分學理實地等を研究し歸國したるものあり即ち高橋ミッ子は伯林大學校にて三年間實地を研究し岡見ケイ子は亞米利加にて同樣の研究を積みたり又た伴ハル子の如きは伴陸軍軍醫の令嬢にて英語獨逸語に熟達し且て帝國大學の醫科に入學せんとて熱心に運動せしことありしと云ふ左れば女醫なりとて容易に侮るべからず況んや開業試驗の成績の如きは女子の方平均に男子に優り居れるに於てをや

●●●●女子の採るべき醫業　一概に醫業と云へば內科も外科も總りて其範圍頗る廣けれども其中女子に相應きものは婦人科、小兒科、產科等に過ぎず西洋にては外科專門の女醫もあり又た有名なる女子の解剖家を出だせしも我國にては女醫の程度未だ斯る點まで發達せず又た我國の女子の性質より考へ見るも外科の如き荒療治は到底男醫には及ばざる故今後女醫の輩出するありとも好んで不適任なる外科を撰ぶものなけん且つ素人の考にては婦人の病氣は婦人の診療を受ける方よろしからんと思ふなれども實際婦人は男子が想像するほど男嫌ひのものにあらず現に今日の婦人患者が女醫の門に來らずして男醫の方に集ふを見ても知るべく產科の如きも女醫よりは男子の產科醫の方繁昌をなし居れり獨り小兒科は女子に最適の醫業にて眼鏡を見て泣き髭を見て怖がる小供も女子の優しき手にかゝれば喜びながら診察を受くるゆへ病性もよく分りて投藥も大ひに效しよしと近頃は女子にして齒科を修ひものあり這は頗る面白き職業にて外間を馳廻る等の面倒もなく居ながら患者を受けらるる女子の齒科醫は全國に三四名あり其一人は京橋區金六町の齒科醫原榮太郎氏方に勤め居れりと云ふ

●●●●女醫の收入　男子は開業免狀さへ得れば田舍の漢法醫なぞの名跡を承け襁きて直ちに先生と呼ばれ多少の收入を得れども女子はなか〳〵左樣の譯に行かず現に開業免狀を有しながらブラッキ居れるもの尠なからず又た女醫の代診には女子を用ゆるよりも男子を用ゆる方病家の信用よろしければ大抵の女醫は男子の代診を用ひ居れり左れば女醫の免狀を受けたる人は先づ一家を搆へて

開業するか但しは病院の助手等を勤むるか二つに一つの法を求めざる可からず左れぞも一家を擁へたりとて直に患者の來るべきにあらず現今流行する高橋ミッ子の如きも明治二十年の十一月に開業せしに二十一年の一月頃迄は一人の患者も見へず漸く一月の下旬に至りて一人の患者を得たるが夫れより一人來り二人見へ現今に至りては毎日平均五十餘名の患者あり一日一人の藥代八錢とするも四圓の收入あり別に診斷料をも收むとすれば六七圓を得べし女子にして一日六七圓の收入あるものは醫業の外なかるべし又た病院の助手は五圓乃至二十圓位の月給を得らると云ふ

●●●●●女醫の患者　女醫の門に來る患者は小兒科七分婦人科產科は三分の割合あり折節は外科眼科等の患者來ることあれぞも其重症なるものは專門の男醫に送りてそれを治療せしむる故女醫の患者は以上の三科に限られぬ婦人科の患者は俗に所謂血の道即ち子宮病者なり高橋女醫の談に依れば同診察所に來る患者は重に中年以上の婦人にして他に嫁して子なきを愛ふるもの或は實際病苦に惱みて已むを得ざるものにあらざれば來らず開業以來殆んぞ十年に渡れぞも未だ若き娘達の內診を行ひたることあらずと尙は山の手に開業し居れるものと下町に開業し居れるものとは自から患者の種類を異にせり例へば日本橋京橋界隈に開業し居れるものは藝者等の來ることあれぞも本鄉邊には左る種類のものを見ずと云ふ

●●●●●女醫の年齡　年功と云ふこと何業にも必要なれぞも分けて醫者には重要なる資格にて醫は三代ならざれば其藥を受けずと古人の說きたるも理なきにあらざるべし今日都下にて開業し居れる女醫は大抵厄年（三十三）以上にて四十前後の人もあり世事にも長け技術にも通じたるもの多し明治十八年の頃再度の女子開業試驗を行ひたる際其出願者は十餘名ありしが何れも三十臺の人々にて中には一旦他の細君となり居たる婦人もありき然るに近頃に至りては十八九の娘盛りにて試驗を受くるものあり其の早熟は喜ぶべき樣なれぞも實際年端も行かざる身にては開業の門戶を張る譯にも行かず已むを得ず免狀の持腐りをなしてウロッキ居る中ツイ誘惑に導かれて折角の志を無にするもの少からざるは誠に慨はしき談なり現今濟生學舍の女生中其の年齡の若きものは十五六歲其の長じたるものは三十二三にて折々は細君となり居れる婦人の學生となるを見受くるとぞ

●●●●●女醫に適當の婦人　某女醫は自家の經歷上より女醫に適する婦人の資格を說きて云ふ「我國の習慣上より見れば亭主持の女醫は家庭の和合上に如何かと思はるゝ點なきにしもあらず醫者の良人と連添ふる婦人は兎に角平人に嫁して其業を繼續する如きは到底六ケ敷からん西洋にては隨分亭主持の女醫あれぞも直ちに此風を我國に移すことは出來ざる可し左れば未婚の婦人は如何と云ふに是れ又た志操の堅固にして誘惑に打勝つ丈の氣力あらざれば其成業は覺束なからん總て女

子の修學を害するものは容貌にて山鳥は其姿の美しさ爲めに身を滅ぼすと同じく女子は容貌の麗しさ爲めに身を誤ること多し昔時何某の尼法師が美しき顔に燒鐵を當てたるも左こそと思はるれ故に女醫とならんとする婦人は最初より男子に賴らずして生活を營まんとする大決心あるもの若くは寡婦等を宜しとなす世間にては女學生の經歷ある婦人の年未だ若くして且人に離れたれども他に嫁するを欲せず家には多少の遺産あり如何にして其品性を全ふし餘生を送らんかと思ふ人わり此人達は醫學を修めて女醫の開業をなせば其目的にも叶ひて安穩に消光ことを得べし娘盛りにて醫學を修め終始一貫其志を成すものは十人中に一人も六ケ敷きほどなりと云々」以て如何なる婦人の女醫に適當なるかを知るべし

●女醫の修業所　目下東京にて醫學を修ひるの學校は醫科大學、慈惠院醫學校及び濟生學舍の三所に過ぎず而して女生をして正則的に醫學を修めしひるものは只だ濟生學舍あるのみ同舍の卒業期は三年にして前の一年半には物理、化學、生理解剖等を敎授し後の一年半には各醫科、病理、診斷、藥物、裁判醫學等を敎授す故に前半を修むれば前期の試驗を受けらるべく夫れより後半を修ひれば後期の試驗を受けらるべし其外各手術の實地演習、顯微鏡の用法等をも敎へ敎授は男女の別なく一樣の課程を修めしひ學費は入舍の際束脩三圓を要し授業料講堂費共毎月一圓五十錢なり實地演習は外に一ケ月一圓三十錢、顯微鏡用法は同じく八十錢を要す而して實地顯微鏡の兩科はその演習に用ゆる器械藥品等を自辨するが故に毎月大抵三圓內外を費やすと云ふ同舍の女生は東京、新潟、長野、岐阜等より出づるもの多く現今は東京本鄉の順天堂病院には前にも記す如く前期の免狀を有するもの若くは兩期の試驗を卒へて尙は實地研究をなさんとする女生の通學を許しわり順天堂に女子入學の道を開きたるものは彼の高橋ミツ子なり同女は既に濟生學舍にて一通りの學科を修め前期試驗に及第せしかども未だ實地研究をなすの場所わらざりしが故に順天堂主佐藤進氏の許に至りて入學の事を賴みたるが一時は拒絕せられたれども尙は押強く懇請せしにぞ佐藤氏も其熱心に感じて遂に入學を許したるが其後ミツ子の事が先例になりて今日の如き有樣となれりと順天堂は束修二圓月謝一圓にて別に卒業の期限等もなく一月通ひて休ひものあれば二三年も通ひ來るものわり其出入は勝手次第なり現今通學しつゝある女學生は三四名にて何れも醫科兩期の卒業生なるが一生懸命に勉強をなし中にも其の學藝に秀てたるものは特別生の名稱を與へ婦人科の助手として使用するに其伎倆頗る見るべきものわり今は先方より退かんとするも病院より之れを引止ひる程とあれりと云ふ

●女學生の學費　普通は入圓以外にて十分なり女子は男子よりも入費少なく殊に近頃の女生間に

は下宿屋の弊風を恐れて座敷借をなすもの多ければ經費は益々小額にて可あるべし左れば一ケ月八圓あれば先づ四圓を以て食費に充て二圓を授業料書籍費に、殘りの二圓を筆紙墨、湯賃、小遣等に充つれば左迄の不自由なかるべし尤も之れは他縣より來りたる女生の經費にて東京に居住する人は授業料書籍費等あれば足れり又た開業女醫の宅に藥局生として女生を使用する所あり此等の處に住込めば監督も行渡りて經費を要することも少なからん又た小額の學費にては十分の勉強をなす能はずと云ふ人あれども夫の高橋女醫の如きは一ケ月僅かに五圓にて修學したれど現今の如き地位を得たり其業の成ると成らざるとは學費の如何に依らず只だ本人の心懸けにあるのみ

●●●●●

女醫の流行兒　現今府下の女醫中にて最も古くより開業し最も能く流行し居れるは日本橋區南大工町の高橋ミツ子なり同女は三河國の產にて九歳の時母に離れ十五六歳にて東京に在る伯父なる人の世話となりしが此際より獨立の志あり男子に賴らず一世を渡らんものと伯父なる人に其事を話したるに伯父は驚きて飛んでもないことお言ひでないよと其の不心得を誡めたれども一旦かうと定めたるミツ子の決心は動かすべくもあらず遂に明治十二年上州前橋に行きて同地有名の產婆志村磯子の門に入りぬ是れはミツ子が立身の端緒にて又た困難に入るの門口なりき同十五年東京に歸り櫻井產婆學校に入校し翌十六年九月內務省の產婆試驗を受けて及第し夫れより大坂に赴きて高橋病院に入り其後又た伊豫に行きて產婆の開業をなしぬ其間別に學資等を供給し呉るゝものなければ所謂自活自勉にて其の困難の事歷はなか〳〵に記しがたし

●●●●●

單衣一枚の女生　ミツ子は產婆を營み居る中にも閑あれば醫書を研究して大に得る所あり一步を進めて女醫とならんとて明治十七年に歸京したりき當時湯島の濟生學舍は醫生の養成を努めて其名遠近に聞えければミツ子は舍主長谷川泰氏の許に至りて入學の事を賴みたるに長谷川氏は「女學生の入學を許さず」とて刎付けたるを尙は根強く賴み行きたれば覺に入學を差許しミツ子は同舍の學生となりぬ是れ實に十七年の十二月なりきミツ子の濟生學舍に在やる學費裕かならざりしゆへ衣食にすら差支ゆる程なれども耐忍強き同女は毫も憂ふるの色なく飾り上にも飾りたき婦女の身にて髮も取上けずお白粉もつけず衣のみ衣のまゝ垢つきたる單衣一枚にも寒暑を過し或時は四十度以上の熱病を强して登校し或時は病眼に繃帶を加へしまゝ徹夜する等孜々として勉學に餘念なかりしにぞ同窓の人々も其熱心に感激しおの〳〵學業を勵みたりとぞ

●●●●●

順天堂の食客　ミツ子か此勉强は首尾よく其功を奏し前期の試驗に及第し夫れより後期の試驗を受けんとせしが後期は實地の課程を試驗するとて實地の研究か必要なればそが準備をなす爲め順天堂の病院に入ぬ斯くて順天堂に入りたる後は一意專心に勉强をなし佐藤氏もミツ子の境遇

を憐みて懇ろに之れを慰諭し手術の如きも手を取んばかり親切に教られたり其一例を掲ぐれば順天堂の病院内に穴と稱する一室あり之は婦人科の治療室にて此室に入るものは佐藤氏と老寄りたる助手、看護婦の三人にて醫局の人にても其室に入ることを許されたれば醫局の人々は彼此不平を唱へたれども佐藤氏の説諭に依りて休みたることあり佐藤氏がミツ子の世話を焼きたることは此れにても知るべし後に至りて順天堂の食客の如くなり夫人にも可愛がられ衣類等を惠まれたりと

●●●●●●　書は醫者夜は下女　夫れより明治十八年に至りて後期試驗に及第し同廿年今の處日本橋區南大工町に開業したり其際には下女等を雇入るゝ費用もなかりし故書は立派なるお醫者様なれども朝は早くより起きて門前の掃除をなし夜は遲くまで眠らず夜半に洗濯をなすなど困難は汝を玉にするの諺に洩れず漸次に信用を博し病客も殖へたるが尋常の人ならんには小成に安んじ又た勉強をなすの念なけれどもミツ子は左にあらず益々奮發し醫學の叢淵ある獨逸に行きて其の奥を極めんとて家事を節して餘財を蓄へ若干の學費を得たりしかば佐藤氏にも相談し明治廿三年の春かよわき女の身を以て萬里の波濤を越へ獨逸に向つて出發したりき是迄男子の醫術を學ばんため獨逸に赴くもの多かりしも女子の醫生にして同地に行きたるものは此ミツ子が始めてなりと

●●●●●●●●●　マルチン病院に入る　斯くてミツ子は彼地に着したる後伯林の大學に入らんとせしに此處は日本と同じく女子の大學に入ることを禁じ且つ醫術の開業さへ許さゞりしかば何條異邦の女子を容るゝべき忽ち拒絶せられて渚離れし捨小舟の取つく島を失ひたる有樣となりしが當時伯林には今の北里博士等も留學中にてミツ子に向ひ此地にての修學は迚も六ヶ敷ければ歸朝することよからんと云ひ或は瑞西には女子の入學を許しあれば其地に赴くべしと勸めたれどもミツ子は聞入れず是非とも伯林にて修學すべしとて單身醫科大學の數授を訪ひて遙々と日本より來りたる志を述べ責めて入學の叶はずば傍聽なりとも許されたしと頼みたるにぞ數授等も其志に感動し公然大學に入ることを許さゞれども他に適當の方法を與ふべしとて遂に伯林にて有名なるドクトルマルチン氏に紹介し氏の設立したる病院に入ることを許されぬ

●●●●　講學の困難　ミツ子は始めて希望の光明を見出し夫れより病院に入りて實地の研究をなすの傍大學に行きて講義を傍聽する等一向勉強をなせしが素より學費等も十分ならず且つ醫書は讀み得るも普通の言語應對等に不熟なりし故其困厄は一方ならざりしも幸ひにマルチン氏が懇情に依りて特別の取扱ひを受けしかば種々の便宜を得たりと其後ミツ子は病を得て旅窓の夢圓ならぬ身となりたれば心ばかりは逸れども身體いたく疲れ久しく留るべくもあらず在留の人々よりも歸朝の

事を勸めなれば恩師ボルチン氏の許を辭し惜き名殘を伯林の學窓に留めて歸朝せしは明治廿五年の頃なりき歸朝の後病も平癒したれば家屋をも新築し益々其業を擴みげるにぞ病家の信用は愈々加はりて今日の如き隆盛を見るに至りたるが本年は恰も開業十年に相當したれば此程自宅に於て盛んなる祝宴を開きたりとミツ子は性快活なれやも絶へて當時の女學生の如き忌味なく且つ謙遜の性深くして其履歴の如きは人に秘して語らず死後は大學にて解剖をなす筈にて既に願濟となりたるが仔細は其節に發表すべしと語り居れりと

●●●●　未來の女醫

前に說きたる如く我國の女醫は其の發達の程度も淺く又た其人數も尠なければ勢力自から振はず且つ社會の習慣上女子にして男子めきたる業をなすものあれば「女の癖に生意氣だ」と蔑し付けるの弊ありて大ひに其發達を妨げたり左れやも文化の度いよ〳〵進むにつれ女子を賤しむの弊風は廢りて女醫の如きも自から進歩を見るに至らん西洋の例を以て我國に當嵌めるは少しく不都合の嫌ひなきにあらざれやも先づ試みに之れを記さんに西洋にても希臘羅馬の昔は言はず近代に至りて女醫の現はれたるは漸く五十年以前則ち千八百四十四年の頃にて英吉利の女子「エリサベス、ブラックベル」と云へるが紐育の大學校に入りてドクトルの學位を得故郷に歸りて開業したるが始めてなりき當時亞米利加各州の大學校にては女子の入學を許さずブラックベルは困難の末漸く紐育の大學に入るを得たるなり然るに近頃文化の進歩につれ女醫も次第に發達し最近の統計に依れば米國に三千人英國に百七十人佛國西に伊太利白耳義和蘭等にも女醫の開業をなすもの多く今の伊太利皇后の侍醫「マリアラルネ」と云ふは有名なる女醫なりとぞ獨り獨逸及び澳太利には今に女子の大學に入ることを許さず又た女醫の開業をも禁じあるが故に一人の開業醫なけれやも熱心なる女生は瑞西に行きて醫學を修めドクトルの學位を得て歸國し陰然病者の診察等をなし居れりと尙は同國の議會にては每年女醫開業の問題現はれざるなく千八百九十二年には五万餘人の署名したる前代未聞の請願書を差出したりとぞ此等の實例に依りて見れば我國にても遠かれ早かれ女醫の發達を見るの時來るべし

●●●●　女子の藥劑師

尙は醫業に關係したるものには女子に適合したるものを求めば產婆あり看護婦あり藥劑師あり、而して產婆看護婦等は既に多數の開業者あれやも藥劑師に至りては一人の開業者を見ず元來女子は思想も緻密にて細微の末迄も氣が付けば調劑の如きは必適の業にて若し醫師にして藥劑師の婦を娶りて藥局を掌らしめば大ひに都合よかるべしと女醫の不適當を說く人にても女子の藥劑師たることを否むものなきのみならず却つて之れを慫慂し居れりとぞ魯西亞にては土耳古戰爭の際女醫を軍醫に使用し其効蹟良好なりし實例ありたれやも我國の如きは男醫にて

澤山にて看護婦すら戰地に派遣せざりし程なれば女子を軍醫に使用する如きことは夢にもなかるべし尚ほ産婆看護婦等は項を分つて之れを記述せん

紡績工女

紡績會社の隆盛　明治年間に興りたる諸工業中最も隆盛なるものは紡績事業にて其會社は全國に亘りて五十餘箇所あり目下企業中のもの亦た尠なからず而して其事業の盛なる地方は大阪、岡山、愛知、東京、廣島、兵庫等にて其他水力水運の便利ある所若くば石炭棉花等に富みたる所には一二會社の成立を見ざるなし就中大阪府下の如きは其會社數十三箇所の多きに及び斯業の盛んなること實に全國に魁たり又た全國に於ける會社の總錘數は六十万錘にて其工女は殆んど五万人に及べり右の中にて二千人以上の工女を使用するものは大阪紡績、攝津紡績、三重紡績等にて一千人以上のものは鐘淵紡績、東京紡績、天滿紡績、浪華紡績、平野紡績等なり全國に於て工女を用ゆることの多き蠶絲事業を除きては他に其比を見ず紡績事業の隆盛なること推して知るべし

紡績事業の嚆矢　抑も本邦に於て綿絲紡績に洋式の器械を用ひしは明治元年鹿兒島に於て六千錘を以て藩主島津公の建設せられたるものを嚆矢となす其後二三年を經るも他に此事業を始ひるものなかりし故島津公は其の摸範を世に示して大ひに奬勵の道を謀らんと考へられしが失れにては鹿兒島は餘り邊陲なれば都會近くに設けんとて明治三年泉州堺に一つの紡績所を設けられたり當時の器械は「ミュール」と稱する舊式のものなりき此鹿兒島及び堺の紡績所は今尚ほ存し盛んに其事業を營み居れり紡績所に女子を使用することも亦た此時よりぞ始まりける

東京紡績事業の開祖　又た東京に於ては慶應の初年鹿島万平と云へる人知人と相談し紡績事業を始めんとて横濱のウユールス商會に器械購入の注文をなせしが當時はスエス地峽の開鑿未だ成らずして喜望峯を迂廻する頃なりしかば注文後三年を經て明治元年に至りて器械漸く横濱に着しぬ然るに創始の困難なるため同志中にも分離するもののありて僅かに三名となりたれば事業益々捗取らず明治三年漸く民部省の保護を得て王子瀧の川村に器械場の敷地を得たれども其の設立に及んで熟練なる技師なきため外國人を雇ひ入れたるが此外人も實際經驗なかりし人物にて器械の据付も思はしからず爲めに器械はありあがら糸を製することも出來ず尚ほ一方にては外國人を解雇するため種々の紛議起りて入費嵩みたるより三人の同志者も退身し爾後は鹿島万平氏一人となりたれども益々奮勵して千百の困難を排し遂に明治五年の冬季に至りて營業を始めたりき是れ七百餘錘の「クングフーム」機なり數年の後兵庫縣下姫路に縣立紡績所の設あり續て大坂府下に澁谷

紡績所起れり明治十三四年に至りて紡績事業は各地に勃興し東京にては明治十九年に東京紡績會社同二十一年に鐘淵紡績會社の設立あり殊に近年事業熱の勃興につれ紡績會社の如きも次第に増加し遂に今日の如き隆盛を見るに至りぬ

紡績會社の工女　女子の耐忍深くして如何に能く勉強するかを知らんとせば紡績の工女を見るに如くはなし朝は鷄の鳴く頃より起き出でゝ夕は蝙蝠の飛交ふ頃迄も勤勞し殊に夜業をなすものは草木も眠る眞夜半に白晝の如く立働きて少しも厭ふの色あく酷暑三伏の夕一滴の涼さへ納るゝの暇なく嚴冬深雪の朝氷るばかりの紡錘を探りて一向其業に務むる甲斐々々しさ男も恥づる勤勉の情況を見れば如何なる人も可憐の心を起さゞるものなからん東京に於て此可憐なる工女を使用するものは鐘ケ淵、深川の兩紡績會社、小名木川棉布會社の三所なり中にも鐘ケ淵の紡績會社は其錘數四万ありて規摸宏大なれば工女の數亦た多く現在の總數一千七百二十九名、其内工場に寄宿するもの一千三百名、通勤のもの四百二十九名あり、東京紡績會社は二万六千錘にして工女の數は一千餘名あり中寄宿者は八百餘名にて他は悉く通勤あり、小名木川綿布會社は綿布の材料として紡績を營み居れば其錘數は僅かに五千錘にて綿布の工女を合せ五百餘名に過ぎず

紡績工女の仕事　紡績の仕事とて悉く女子のみにては出來るものにあらず器械、荷造、綛洒等

の力業に男子を用ゆるは勿論尚ば打綿糸採にも男子を使ひ鐘ケ淵紡績の如きは其數五百餘人ありと云へり偖て之れより男女仕事の區分を說かんに何れの紡績工場にても先づ第一に打綿室とて器械を以て綿花を打つ所及び其の綿を熟す所あり此處には少しく力を要するが故に重に男子を用ゆ次に梳綿室とて此熟綿を器械に懸けて絲瓜の如く引出し簀卷の如くなす處あり此處にも多く男子を見る夫れより粗紡室とて此簀卷を段々と器械に移して太手の毛糸の如くなる迄紡ぎ行く所あり粗紡には十七八才より二十五六才に至る女子を使ひ只だ其綿を運ぶものゝみ男子を用ふ此處は器械の音激くして遠雷を聞くが如く綿屑は雪の如くに散亂し器械より出づる千條の糸は不斷の瀧を見るが如し初めて此室に入る工女にて氣弱きものは心臆して怖がるもの多しとかや

精紡室の女工　粗紡室にて紡ぎ上げたる糸は之れを精紡室と稱する所に送りて一層細かに紡がしむ此室にて毛糸の如き粗糸は始めて光澤ある細糸となる精紡は手先の仕事にて格別の勞力も入らざれば十三四位の小供を使ひ居れり此室にて出來たる糸は管に卷きたる儘揚枠室に送りて綛となす此室は器械の音も靜かにして埃も立たず紡績場中では上等の場所なり此處に働くものは十七八より二十位の女子なり偖綛とありたるものゝ中にて汚たるものあれば之を洒場に送りて洗はしめ清らかなるものは直に之に荷造場に送らしむ荷造場にては器械を以て綛糸を束ねて小包となし

商標を貼りたる後之れを大荷造場に送る此處には大ひなる荷造器械ありて丈夫なる荷物となす紡績の仕事は之れにてお仕舞ひなり荷造場にて綛糸の上包をなし或ひは商標を貼るものは女子にて器械もて綛糸を束ねるものは男子なり荷造場に働く男子はなかなか高賃にて一ケ月三十圓近く儲けるものありと大荷造場に働くものは仲仕連中にて女子の如きは一人も加はり居らず其外紡績會社中には事務員若くば工場の書記に女子を使用する所あり鐘ヶ淵の如きは此種の女子五十餘人ありとぞ

●●●●工女の賃錢　紡績工女の賃錢には日給と賃取との二つあり夫れ〳〵仕事の性質に依りて分れ居れり或は最初より日給にて増金の外賃錢の上らざるものあり或は最初は日給なれども伎倆に從ひ賃取りとなりて働けば働く丈け儲かるものあり即ち粗紡、楊枠、綛包等の仕事は貸取にて打綿、精紡等の仕事は日給なり女工の賃錢は何れの會社も大抵大同小異にて鐘淵紡績會社にては始めて工女となりて通勤するものには日給五錢同じく寄宿するものには日給八錢を給す斯く賃錢に差異あるは寄宿者は食費丈にても毎日六錢を要すれば五錢にては凌ぎ難き故なりと東京紡績會社は左る區別あく新入の工女は通勤と寄宿とを問はず一樣に日給八錢宛を給與す偖て此工女の賃錢を定むるに就ては會社に依りて多少異なり居れり鐘淵紡績は先づ最低の日給にて一ケ月間使用し夫れより日給の者は伎倆に從ひて增金をなし賃取の者には賃取工錢として十錢若くば十二錢を與へ其以上は自身の勉强次第にて幾許にても儲け得らるゝ仕組なれり又た東京紡績會社は最低の日給にて試驗のため一週間見習のため二週間都合三週間使用し然る後其伎倆に應じて賃錢の額を定む勿論伎倆の秀でたるものは三週間を待たず直ちに高額の賃錢を得らるゝものと知るべし

●●●●●●●●高い賃錢と安い賃錢　賃錢は仕事の性質に依りて高下あることは言ふ迄もなく危險なる仕事若くは困難なる仕事は高き賃錢を得るは自然の道理なり紡績の仕事中最も高き賃錢を得るは粗紡にてイキナリ日給九錢を與へらる次は揚枠にて日給七錢を給し最も安きは精紡にて日給五錢なり但し之れは鐘ヶ淵紡績會社の定にして通勤者の日給なるが寄宿者は如何なる事情ありとも八錢より下ることなし扱て此に注意すべきは此賃錢の計算法なり日給のものは直に分れども賃取のものは少しく面倒を見ざる可からず纏て一回幾許一卷幾許と數取りにて算用し得るものは賃取りとなし其他を日給となしあれども粗紡の賃取りに至りては稍々複雜を免れず全然粗紡と云ふは綿の未だ糸とならざるものあれば一々取外して其成績を見ること出來ざれば器械の端にメートルを据え其の度數を計りて成績を檢ぶ即ち糸管の運轉する毎にメートルにて計りたる糸量の多少を知るべし一メートルは運轉するが故にメートルの度數を見れば管に巻きたる糸量を一ハンクと稱し一ハン

クの賃錢は大抵三錢内外にて少しく熟練すれば一日七ハンクより九ハンクを揚げらる又た揚枠の賃錢は一枠五厘若くば六厘にて初進の者にても一日十五枠位を揚げ熟練の者は五十枠位を揚げ得べし精紡は終始日給の定めにて五錢より始りて十五六錢に終る最高十五六錢は少し安き樣なれども精紡は多く小供を用ゆるものにて小供の賃錢とすれば左迄不當にもあらざるべし

●●●●増給と賞與　鐘淵紡績會社にては毎年三四回増給を行ひ一錢乃至二錢を増すを例となす東京紡績會社にては定期の増給なく時々工女の成績を見て賃錢を加ふる由にて勉強なる工女は半季位すれば二十錢内外を得るべしと又た各社とも賞與の制を設けて職工の奬勵をなす鐘淵は一ケ月休みなく勤むる者には二十錢三ケ月には四十錢六ケ月には一圓二十錢を與ふ而して三年の後再び休みなく勤むるものには一ケ月四十錢三ケ月八十錢六ケ月一圓六十錢の割合にて賞金を出す尚ほ三ケ年の全勤者には十五圓五ケ年には二十五圓七ケ年には三十五圓を與ふ東京紡績も略ぼ同樣の奬勵法あり又た時々一圓以上五圓以下の賞を懸けて奬勵を行ふことありと云へり左れば工女は定りたる賃錢の外増金賞與等あれば平均最下等にて一ケ月三圓内外中等以上にて五六圓上等は同じく十圓前後の收得あり現に鐘淵東京の兩紡績の工女にて十圓近くの給料を得るもの二三十名ありと云ふがはわきは女の腕にて月々十圓近くを稼ぎ得るとせば随分面白き職業ならん

●●●●工女の積立金　各紡績會社は増賃賞與の制を設けて工女を奬勵するの外なほ尚ほ工女の受取るべき賃金中より毎月若干ヶ積立てしめ後日の準備をなさしむる等頗る注意をなせり鐘ケ淵紡績會社は此積立の方法を二つに分ち一を工場積立金と稱す工場積立金とは工女の受取るべき賃金中より毎月一定の額を扣除して之れを積立てしめ三ケ年の契約滿期の際（總て工女は三ケ年の約束にて住込むなり）に下渡し若し中途にて退社するときは之れを沒收し別途積立金とは工女の適宜に積立つにものにて別段の制限なく會社よりは相應の利子を附して之れを預り置き本人の入用ある際には何日何時にても下渡す工場積立金は會社にて年一割の利子を附し重利法に依りて計算するが故に利が利を生みて三ケ年の契約滿期の際には隨分高額となるべし即ち毎月二十錢宛を積立つるとせば一年目には元金二圓四十錢と此利子二十四錢を合せたるもの二圓六十錢となり二年目には元金五圓四錢と此利子五十錢四厘を合せたるもの五圓五十四錢四厘となり三年目には元金七圓九十四錢四厘と此利子七十九錢四厘四毛を合せたるもの八圓七十三錢八厘四毛となるの勘定なり又た東京紡績會社も同樣積立金の制を設けたるが其特點とも見做すべきは工女にして二ケ年以上續きて勤めたるものには會社より毎月三十錢宛を與へて之れを積立てしひるの事なり工女の適宜に積立つる事は鐘ケ淵に同じ

工女の貯蓄心　紡績會社の工女に住込む位の婦女なれば無論教育等のあらう筈なく從つて貯蓄心と云ふことも薄かりしが近頃は何れの會社にても切りに貯蓄の事を勸めけるより工女も貯蓄の必要を感じけん昔時は燒芋餡等の買喰ひに費やせし金を今は會社に預けて貯金となし或ひは國元に送りて家計を助くるものあり鐘ケ淵紡績會社の如きは工女の毎月國元へ向け送金するもの尠からず現に一昨年虎列刺病の流行せし際工女の外出を禁じたる爲め其送金を會社に於て取扱ひしに多きものは七八圓少きものは一圓内外を送りたりと又た東京紡績會社にても心掛の善き工女は續々と送金をあし尚ほ三ケ年の滿期後歸國の際には一通の衣類と相應の貯金を携へて歸るものあり現に同會社にて本月中滿期にて歸國したるもの、中此等の工女五人あり即ち西井ミツ（二十）森田アイ（二十）櫛谷マスノ（二十）關岡シカ（十六）山中ハナ（十九）等にて何れも伊勢の産なるが最初入社の際には寢衣さへ携へざりしに三年辛抱したる後四季の衣服を調へ七八十圓の貯金を持ち歸りたりと貯蓄心の厚薄は其出生の土地に依るものと見へ廣島伊勢等の者は一生懸命に働きて一圓貯蓄をあすことを樂ひものゝ如く廣島出の工女の如きは「稼に來たからは稼がなけりやならぬ」との意氣込にて非常に勉強する由

工女の寄宿舍　何れの紡績會社にても工女の取扱に就ては出來得る丈の注意をなし殊に寄宿の工女には特別の保護を與へり寄宿舍の規則は會社に依りて多少違ひ居れども大躰に至りては略ぼ同樣なりとす鐘ケ淵紡績會社の寄宿舍は二棟あり一棟は日本造の二階建にて一棟は西洋風のペンキ塗なり其部屋は兩方にて四十一あり一部室に二名の取締を置く取締は工場にて什長若くは伍長等の役廻りをなすものの之れを勤め手當として毎月二十五錢乃至七十五錢を與へられ尚ほ盆歲暮には祝儀として衣類等を贈らる東京紡績會社の寄宿舍は日本造りの二階建一棟にて鐘淵に比すれば摸樣稍々小なれども諸事の整頓に至りては互ひに優劣なし此寄宿舍には取締の外修養係なるものを設けて勝手を知らざる新入の工女をしてマゴつかざる樣に注意をあさしむ其他の點に於ても兩寄宿の違ひを求めば鐘淵の方は會社の構内に在りて工場迄廊下傳ひとなり居れば雨天の日にても濕地を履むことなく東京の方は構外に在りて工場迄一二丁距り居れば雨天には下駄傘の必要ある位に過ぎず

寄宿舍の賄料　は一日六錢にて一食二錢あり賄は總て辨當を以て渡し通勤のものにても二錢を拂へば自由に辨當を得らるべし市中の辨當屋の普通の工場などへ入れる辨當は最下等にて一日九錢位なるに如何に麁末なるものにもせよ六錢にては到底引合ふべく思はれざれども其不足は會社より補ふ由にて斯くは安價に定めたるありと又た事情を知らざる人より見れば六錢位にては稼

なものは喰はずまじと考ふべけれども實際は左にあら𢌞先づ朝は香の物にて折々味噌汁あり晝は野菜の煮〆晩は魚類を用ゆ記者の鐘淵に行きたる際には丁度晝餐の時なりし故件の辨當を襲はれしに飯は少し糊かりしも菜は魚の煮付にて魚の出汁を用ひおかず〳〵甘く煮付けありし事務員の談にては飯は最初お櫃に入れて勝手次第に盛はせしも其の爲め時間を費やすが故に工女の方より箱辨當の請求をなし現時の如く改めたるなりと三食の中にて最も御馳走あるは晩方なり之れは偏く御馳走を行渡しめて不平ながらしめんとの主意にて仕事の振廻に依りては晝間に食事をなさゞるものあり即ち夜業の者は夜の十二時に食事をあし晝間はなさゞる如き事あれども晩方には夜業のものも晝業のものも打揃ふて食事をあす故なりと又た休日大祭日等には特別の御馳走をなし餘等を振舞ふことなりと乃此等の賄は何れも會社内なる炊事場にて調へるものにて鐘淵の如きは數臺の大釜ありて數十名の賄方は襷掛けにて働き居れる樣宛がら兵營の炊事場を見るが如し

●工女の衣服　工場内には埃の立つ爲めに髪も衣服も真白となれば東京紡績會社の如きは寄宿者に工場衣なるものを作りて之れを着用せしめ居れり工場衣は白金巾にて作りたる筒袖にて裾には袴樣のものあり其形恰も看護婦の衣服の如し鐘淵紡績會社も工場衣の定めあれども之れを着用し居るものは至つて尠なし同社の工場衣は絣本綿の首縞にて今回買入れたるものは一反九十

七錢なるが其の代價は四ケ月の月賦にて工女より支辨せしむる由なり寄宿舍に用ゆる夜具、枕の類は會社より貸與し下駄、草履、傘等も會社より支給す風呂は終日終夜沸き居れば休の時は何時入るとも差支なし左れば寄宿の工女は毎月賄料として一圓八十錢を支拂ふの外はホンノお白粉代小遣等あればよろしき譯にて前に記したる如く三年間に七八十圓の貯蓄をなし得も故なきにもあらざるべし

●工女の教育　貴顯紳士方の小間使に住込む女子は一通の教育もありて行儀作法をも心得居れば別段教育をなすの必要なけれど山出しのお轉或は子守なぞは家に在りても碌々教育も受けさる憫ひべき女子なれば主人に於ても一層慈悲を加へ自分の姓名位は書けて衣類の綻位は繕ふ丈の教育をなすは主人の義務と云ふも不可なく現に信州地方にては子守學校なるものを設けて子守の教前に燻りて糖袋一つさへ得縫はざるもの世間に多きは實に慨しき談なり左れば鐘淵及び東京の兩紡績會社にては成るべく斯る弊あからしめんとて社内に簡易なる小學校の如きものを設け寄宿工女の教育をなせり是れ誠に賞すべき美事にて工業社會の一進歩と謂ふべし

●工女の學校　鐘淵紡績會社にては別に學校として建築したる建物あけれども食堂には腰掛机

等の備はり居れば之れを利用して教授上に於ても仕事の餘暇を計りて教授をなし居れども即ち夜業をなすものは朝の八時より同十時迄の間教授して晝業をなすもの故夜の七時より同十時迄の間に於て修學せり此學校の程度は先づ尋常小學を高等小學とを折衷せしものにて課程は讀書、算術、作文、習字、英語、裁縫等あり學期は四年にて毎年三回の試驗を行ひ最後の試驗を昇級試驗となし優等者には優等賞其他の及第者には及第賞を授く一般の及第者に賞與をなすは市中の小學校には見ざる所なれども紡績會社にては工女の就學するもの兎角少きが故に優等者を賞するの傍ら一般の就學を奬勵せんため斯の如く定めたるなりと教師は女子高等師範學校の卒業生一人なれども四年生の生徒は數師の代理となりて下級の者を教へ居れり近頃は東京裁縫學校の校長渡邊某氏を聘して裁縫の教授を托したりと會社にては十六歳未滿の工女は成るべく就學せしむる趣意にて盛んに勸誘し居れども何樣終日或は終夜の勞働に疲れたる後なれば教場へ出ることもオックウに覺へけん名簿に上りたる生徒の總數は二三百名なれども毎日缺かさず出席するものは一年生に十五六人、二年生に二十二三人、三年生に十七八人、四年生は四五名あり尚は事務員等は切りに入學を勸誘するが故に近頃は生徒の數も殖えて益々盛大に趨き居れりと

●●●●女工の教課書

此學校に用ゆる教課書也大抵市中の小學校に用ゆるものと同一にて四年生の生

徒はナショナルリーダー等を讀みて器械の原語等を指支なく綴るものあり又た裁縫科は別に設けありて此處には生徒の數も多く二十歳以上のものも加はりぬ左れば最初は「い」の字すら知らざりし文盲のものも一二年すれば國許へ往復等の手紙位は譯なしに認め得られ又針持つ術さへ知らざりし無藝のものも就學中には自分の衣類位は縫はるゝ樣になる由にて親許にても工女より寄越したる手紙を見て會社の世話の行届きたることを感じ態々禮狀を寄越すもののありと學校に用ゆる教科書用具等は工女の自辨なるが筆紙墨の類は工場内なる東京紡績の學校も大差なければ此に略す

●●●●十一時間の勞働

紡績の仕事は終日終夜休みなく晝の仕事をなすものは朝の六時半より出でゝ晩の六時半に歸り又た夜の仕事をなすものは晩の六時半より出でゝ朝の六時半に歸る尤も其間に休憩の時間もあれば正味の勞働は十一時間ばかりなれども纖弱ある女子の身にて斯る長時間の勞働は隨分苦しかるべく殊に仕事の繁多なる時には早出居殘りなどありて午後の六時半に歸るべき晝業者は引續きて夜の十二時迄勞働し同じく夜業の者は晝の十二時迄勤むることあり其際は特別に居殘賃として八錢を給するが故に工女は少しでも多く賃錢を得んとするの慾望より身躰の衛生などには頓着せず斯く無暗に勞働をあすものなりと是は女子の發育上にも關係することなれば何

とか健康を害せざるの程度にて働かしたきものなり此程神戸に開かれたる大日本衛生會にても亦た此邊に注意し大坂に於ける工場の勞働時間を取調べたることあれば其の矯正の方法も近きに現はれんか

●●●●

工女の休日　工女の仕事の全く休みとある日は天長節、紀元節、神武天皇祭、孝明天皇祭及び歲暮年首の休暇（十二月廿七日より一月三日迄）會社の起業日等にて尚は一週間毎に器械の掃除をなす爲め休業することあり此時晝業の者は夜業の者と交代す即ち前夜々業を勤めたるもの朝の十時迄居殘りて器械の掃除をなし其夜は晝業者に讓りて翌朝より出で又た晝業者は其日一日を休みて晩の六時半より仕事を見る此居殘をあすものには半額の賃錢を給し尚は朝辨當も半額（一錢）にて支給す是れ晝業者は一晝夜（前晩の六時半より其の日の六時半に至る）の丸儲をなせども夜業者は居殘り時間丈の損あれば其を埋合はさん爲めに特別の手當をなすなりと

●●●●●

手と眼との働き　時間は前に記す如く永けれども其勞働の大部分は器械が爲し呉るゝが故に工女は手と眼とを働かすに過ぎず只だ終日立スクミとなりて働くこと如何にも辛勞ならんと察せらる工場内は蒸濕管の通ひ居るが故に殆んど冬を知らず寒中にても袷一枚にて凄がるれど其代りに夏は非常に暑くして如何なる人にても顏に汗腐の吹出さゝるものなく殊に夜業をなすものは電燈の光に打たれて顏色蒼白く變ずる由紡績工女の望人比較に少なきは全く夜業を厭ふより出でしものにて夜業さへなくば澤山の望人あるべしと云ふ此に又た感ずべきは紡績工女の精勤なり工女は何れも增貸若くば賞與を得んことを競ひて我先きに勤勉ひるものは珍らしからず甚だしきは三年の間全く休みなく勤むるものさへありき東京堺ろ全國の紡績會社中にて最も古き工女は現今東京紡績會社に勤むる小島テイ、近藤ヤスの兩女にて何れも明治五年鹿島紡績所創立の際より從事し今日に至る迄繼續し居れるものなるが現今は見廻役を勤めて月給十圓を支給せられ會社構内の長家に住みて立派に其身人をも養ひ居れりと其他三年若くば五年間勤續し居れるものは尠なからず此等の工女は社會にても特遇し一目其人を見分け安き樣になし東京紡績會社は三年勤めたるものには工場衣の袖に黑の二本筋の入りたるものを與へ鐘淵紡績會社も亦た三年の者には紫章の綬、五年の者には黃章の綬を與へて之を識別し仕長伍長等の役廻を勤めしめ居れりと

●●●

工女の愚　工女が第一の慰みは休日の外出あり何れの會社にても休日の外は外出を禁じあれば此日は四方に出歩きて思ひ〳〵に命の洗濯をなしぬ工女が會社にて泊る事は嚴重に取締り万止むを得ざる時は泊先の証明を要すれば出切雀となりて歸らざるもの尠なけれども只だ市中より來り

たる寄宿工女は休日を幸ひに自分の宅に行きたる儘、二日も三日も歸り來らざるものありと又に懲みと云ふべきは飲食物にて休日の翌朝なぞは此處彼處に竹の皮のガサ〳〵と音するばかり堀るを常とす此は前日外出の際土産にとて携へ歸りたる團子の殘餘なりと又た鐘淵東京の兩會社とも毎年春時に起業祭を行ひけるが此時は工女に休暇を與へて思ふ樣に遊ばさする由尚は東京紡績にては折々手品師落語家等を招きて手品茶番等を工女に見物せしめけるが鐘ケ淵も昔時は同樣の事をなせしも今日は外出を許すが故に之れを廢したりと因に記す鐘ケ淵の社内には兵營の酒保の如き賣店ありてパン、反物、小間物等を賣捌けるが昨年下半季の上高は三千餘圓あり内五六百圓はパン代なりといふ

●●●●

工女の健康　工女は前にも記す如く勉強をなせども割合に健康を害せざるものと見え病人は非常に少なく病の少しく重くして病室に居るものは平均四五名に過ぎず茲に最も不思議なるは紡績の工女となれば月經の非常に少くなることにて一週間見えしものは三日となり三日のものは一日となり遂には全く見えずあり男子同樣とおるもの多き由畢竟三年間も休みなく勤むるものは此故なりと云へり各會社とも病氣の事に就ては大〳〵注意を怠らず嘱托醫師は不斷會社に詰切り居りて何日何時急病の起るとも其手當に差支なからしめ又た頭痛、感冒の如き輕症にても診察を求

ひれば直ちに藥を與へ重症のものは病室に送りて治療せしむ病室には數名の看護婦ありて丁寧に看護をなせば毫も不自由なることなし工女の病氣中は半額の賃錢（四錢）を與へ飲食に差支ゆるものには一日に玉子三個牛乳二合宛を給す又た器械にて負傷し病室に入りたるものには全癒に至る迄全額の賃錢を與へ尚は退室の際には相應の恤金を與ふ牛乳玉子の事は餘り渡り過ぎたる樣に考へたれば骨て病氣に罹りたる工女に向ひて「眞個に玉子や牛乳を呉ますか」と尋ねたるに「ハイ左樣です」と答へたり會社が病人に對する取扱の如何は是にて知べし

●●●●

病人の取扱　工女の藥價は最高三錢にて病氣の永延きたる爲め藥價の嵩む時には全癒の後月賦にて支拂はしむ又た醫師の診察にて到底全癒の見込なきもの若くは其仕事に耐えざるものは旅費食費、藥價等悉く會社にて負擔したる上尚は歸國の旅費を給して親元へ引取らしむる由にて一人の病人を歸さんには會社は少くとも二十圓位の損失ありと云ふ入室の病人にて稍々重症に變じたる時は主任醫師は其旨を事務所に通じ事務所より電報にて國元へ報知し尚ほ病の危篤に瀕したる際には再び其旨を國元に報ず斯くて愈々病沒する時は引受人の宅にて葬式を行ひ其遺骨は親元に送る（東京紡績は寄宿舍にて葬式をなす）葬式の際には工女は勿論技術長を始め事務員等も會葬し尚ほ幾分の醵金をなし親元へ送りて其不幸を慰むる由死者の病症は多く肋膜炎なりと云へり又

た負傷の爲め死亡せしものには會社より特別の恤金を與ふるは勿論葬式も一層丁寧なりと鐘ケ淵の如きは職工中に救濟會なるものを組織し貧傷者等を救濟せるが昨年下半季間の醵金高は二百三十一圓八十五錢にて前期繰越高を合すれば五百四圓五十七錢一厘あり其救濟の爲め支出せし金高は二百二十一圓九十錢にて救濟を受けたるもの五十名あり中二十二名は男工にて其他は女工なりと云ふ

工女の出生地　東京及び鐘淵紡績會社に寄宿する工女の出生地は廣島、和歌山、福井、新潟三重、靜岡、熊本等にて東京紡績には三重の產多く鐘ケ淵には廣島の產殊んど七分を占め居れり尤も府下の女子にて奇宿工女となるものあれども其數は至つて尠なし地方より募集し來る工女には會社より旅費を貸與し入社の後二ケ年間月賦にて少許宛辨償せしめけるが三年辛抱して歸國の際には會社より更らに旅費の半額を給する故に三年無事に勤めたる工女は旅費の半額を辨償せしと同一の都合なるべし工女の望人の多きと少きとは世の景氣不景氣につるゝものにて景氣の好き時には望人少く景氣の惡き時には望人多し殊に近頃は各地方に紡績織物等の製造場興りたれば出稼工女の拂底を告げ鐘ケ淵紡績の如きは兵庫の分工場より來りたる見習工女四百餘名あるため辛ふして器械を運轉し居れりと又た鐘ケ淵にては日淸戰爭中には工女の兄弟にて從軍したるものも

り其が爲め國元え引戻さるゝもの多かりしが之れとは少し原因を異にすれども同しく戰爭の際廣島地方の如きは大本營の設立されて料理屋宿屋等の繁昌したれば同地より來りたる一寸遊皮の剝けたる工女は親元よりの勸告に依りて續々歸國したりと尙は市中より來る通勤の工女にても花の時なぞには掛茶屋の女中なぞに雇はれて缺勤するもの多かりしとぞ

通勤の工女　東京紡績會社は深川高橋際に在るか故に本所深川より來るもの多く中には京橋日本橋より來るものありて總數三百餘名あり鐘淵紡績會社は向島の行當りにあれば淺草・千住箕輪等より來るもの多く又た隅田、葛西、堀切等より來るものもありて總數四百餘名あり通勤工女も寄宿工女も其取扱は殆んど同一にて只だ寄宿工女には旅費支給の特點あるのみ又た鐘ケ淵にては淺草千住等の向地より來る工女の便利を謀らんため橋場今戸等の渡場と特約を結びて工女は無賃にて渡らしめ居れり若し又た風雨にて渡の止りたる時吾妻橋より迂廻し來らば一二時間遲刻することあれども其際は特別を以て平常の如く賃金を與ふると云ふ工女の年齡は大抵十五六歲より二十五六歲迄にて通勤の工女中には既に人の細君となり居れるもの或は男子の職工と夫婦（決して野合にあらず）となりて共稼をなすもの又は家族一同會社に來りて生計を營み居れるものもあり

入社の手續に就ては會社に依りて多少の差違ありて東京紡績にては誰人にても工女となりたることを望めば直接會社へ申込むをよろしく亦た深川高橋際の申込所へ頼ひもよろし新入の工女は醫師の診斷を受けたる後其體格に依りて組紡なり揚枠なりの仕事を定められ其日より日給八錢を與へらる鐘ケ淵紡績會社には工女の引受人なるものを定めありて工女の事は萬事此引受人に於て引受け居れば工女の望人は先づ引受人迄申込ひをよろしくす現今の引受人は鶴岡源七、小山市太郎の兩人なるが何れも隅田村内には多少の名望あり且つ會社も十分に信任を措きたる人物なり引受所は會社の近傍に在りて工女の書看板を軒場に掲げあれば一目にして知らるべし世話料は最初に二十錢を出さしめ夫れより毎月二錢宛を取立つるなり其代引受人は工女の一身を擔保し若し逃走等をなす時は會社に向ひ旅費食費等の辨償をなすの義務あるのみならず工女より會社に向ひてなす懇合向は無手數料にて一切引受人よりなす故に毎月二錢にては隨分割安あるべし尚ほ各會社とも工女の飲乏に困り居れば此頃申込まんには幾百人にても喜んで迎ふべしと

看護婦

看護婦の流行

女子の職業中醫者に亞ぎて收入の多きものは看護婦とす我國にては昔時より

看病人と稱し病家等へ雇はれ行く下女同樣のものあり又た病院の出來せし當初には看病として此等の婦人を雇入れたることありしも今日の如く學術的に看護法を修めたる婦人とてはなく亦た世間にても看護婦の必要を悟らさりしに近年衛生事業の發達し病院の整理等行渡りたるに連れ專門の看護婦を要すること多く亦た普通の病家にても病人の看護は看護婦に限ることを知る樣になりたれば其の需用は大いに開けて東京のみにても其數二千餘人あり大坂、京都、名古屋、岡山、金澤、廣島等の各地に散在するものを合すれば四五千人もありて頗る流行を極め其の勢力は女醫遙に婆等を壓し日一日と盛大に赴けり

看護婦養成の嚆矢

東京にて始めて看護婦を養成したるは明治十六年頃芝愛宕下の慈惠病院を以て嚆矢となす當時同院長高木兼寛氏米國宣教師リード氏と芝に看護婦養成所を慈惠病院内に設けて看護婦の養成に着手し日給八十圓を出たし英國セントトーマス病院の看護婦長ウエッチ孃を聘し教授の事を托したり此時生徒となりて來りたるものは櫻井女學校（基督主義の學校にて當時麹町下二番町に在りき）の卒業生にて二十名ばかりありしが何樣我國にては始ての事なれば生徒は勿論教授と雖みたる大學の人々すらウエッチ孃が如何なることを敎ゆるやら知ずマー看護の事なれば病人の取扱とか藥の飲せ方とか實際に必要なるものを敎ゆるならんと思ひ居たるにウエ

ツヂ嬢は左るごとをなさず生徒に向ひて解剖生理等の初歩を教へたるより人々は案に相違し斯る教授向なれば態々高給を擲ちて外國の婦人を招くにも及ばず日本人にて澤山なりとて遂にツエッチ嬢を辭りたればツ嬢は僅かに一ケ年間ばかりにて英國に歸りたりき是れ實に今日の慈惠病院看護婦學校の始となすツエッチ嬢か教授を廢したる後看護婦學校にては醫科大學の助手等にて教授を引受くることになり今日に至る迄永續しけるが此に又た醫科大學にては明治二十年の頃三宅教授が病院管理法を研究して獨逸より歸朝するや看護婦養成の必要を認め大學第一病院内に其の養成所を設立し内科助手一名、外科助手一名を以て教師となし尚ほ生徒の取締として鈴木マサと云へる婦人を頼みたり此マサ子は横濱フエリス女學校の卒業生にて曾て某陸軍大佐の細君となり英語等にも熟達せる故彼のウエッチ嬢の通辯として雇はれたるが常に其の左右に在りたるより畧ぼ看護法の事にも通し居たれば更らに取締として雇入れたるなりマサ子は二十五年頃迄大學病院にて勤め居たるか事故ありて退職し現今は日本看護婦會なるものを組織し其の會長となり居れり市中●●●

者の容態を見て此は病少しく六ケ敷ければ上等の看護婦を用ゆべし此れは輕症なれば下等にて事足れりと夫れ〳〵見込を定めて學校巻くは看護婦會に懸合ひ之れを招くを例となせり左れば上等の者は上等にて用ひられ下等の者は下等にてことなしと云ふ

●●●●●●看護婦の區別　病院に使用する看護婦には部屋持と附添人の二種あり部屋持とは病院内にて一室を與へられ常に此處に詰切り居れるものにて伎倆に長し經驗に富みなるもの多し附添人とは單に患者に附添ひ居るに過ぎされば初歩の者を以て之れに充て二三年の經驗を積みたる後に部屋持の看護婦とおす大學病院の部屋持中には明治元年ミルレル、フーマン氏か獨逸より來りて病院を開きたる時より從事し現今は五十才以上の老女となり居れるものもありと目下大學病院に在る看護婦は第一第二兩院を合せ三百餘名、赤十字社は總數百八十餘名、慈惠病院は百餘名にて其他此處彼處の私立病院等に從事するもの尠なからず兎に角府下に於て看護婦として生活を營み居れるものは二千人に下らざるべしと云ふ

●●●●●●病院外の看護婦　看護婦と云へば病院内の附物にて普通の病家にては招き得ざる樣に考ふる人あれども決して左にあらず大學及び赤十字社の看護婦にても其手續を履めば自宅に招き得られ又た近頃各所に起りたる私立看護婦會の如きは輕便なる方法を以て普通の病家の依頼に應ずる趣意なれば病院に入ずとも適當の看護婦を得るに難からず今市中に於て學校を起し多數の看護婦を養成し又た一箇の門戸を開きて病家の依頼に應ずるものを掲ぐれば

神田區錦町　鈴木マサ子
芝區櫻川町　宝トモオ
本鄉區元町　秋間タメ
日本橋區濱町　大井田リヨウ

等にて鈴木マサ子は曾て醫科大學御雇看護婦取締を勤めしとの●●●●●●地方行の看護婦　日本看護婦會其他勢力ある同會は獨り市中病家の依頼に應ずるのみならず地方にても依頼者あれば直に之れに應じ適當の者を派出せしめ居れり殊に近年は大磯、須磨の如き風景の好き土地に病院若くは療養所を設立されたるため看護婦を需め來るもの多く又た病氣療養のため地方の海水浴温泉等へ出懸くる人々にて看護婦を携帯し行くものあり旁々地方行の需用大ひに開けたりと

●●●●●●看病婦を招く手續　は本項に直接に關係なけれども參考の爲めに之れを記るさんに先づ普通の病家にて看病婦を招かんとすれば各所の看護婦會若くは同派出所に行きて相談するか、或は電報（急病の時）書等にて其旨を申込めば看護婦會若くば派出所は其望に從ひて適宜の看護婦を派出

せしむ尤も醫師の紹介に依るものは此手續をなすに及ばず偖て看護婦の日當は

一等　一日　金七十錢
三等　一日　金三十錢

にて傳染病の看護には

一等　一日　金一圓　二等　一日　金七十五錢
三等　一日　金五十錢

の定めなるが食料及び往復の入費は病家の負擔となせり若し病家にて看護婦が其職務を怠り或は病人の機嫌に觸る如きとあれば何時にても交迭え得らるべく又た解雇せんとする時或は看護中地方浴場等へ伴ひ行かんとする時には前以て看護婦會へ通知せば宜敷き手續にて萬事輕便を旨となし看護婦を招きたる爲め別に病家に面倒を懸くる如きとなし此は神田錦町なる日本看護婦會の規則なるが其他の看護婦會も大同小異にて特記すべき點なし何の看護婦會にても貧困者は無料にて應ずる由にて日本看護婦會々長鈴木マサ子の如きは曾て市内の各警察署に向ひ公費にて看護を要すべき病人あれば自身は勿論門下の看護婦を無料にて派出せしむべき事を出願したりと

●●●●日本看護婦會●●●●の組織

私立看護婦會中にて其最も古くして基礎の確立せるものを求めば神田錦町の日本看護婦會とす此會は夙きにも逃べし如く明治二十四年中鈴木マサ子の創立せし者にて最初は慈善看護會と稱し本郷森川町にありしが當時は世間に於て看護婦の必要を知らざるのみならず醫者仲間にても看護婦には別段學問を修めしむるに及ばず在來のものにて澤山なりとの考へを抱き居たる折なればマサ子が大學を退きて看護婦會を組織するや種々の惡聲を放ちて聞くに忍びざる噂をおしたれどもマサ子は之を顧みず今にも看護婦の必要を知りて我を罵りたる人は却つて我を譽むるに至らん「石の上にも三年」との俚言もあれば出來る丈は辛抱せんとて惡聲非難の間に立ちて只管辛抱をなし居たるにマサ子の豫想に誤まらず段々世間にても看護婦の必要を感ずる樣にあり看護婦會はます〳〵大盛に赴きて明治二十六年中には本郷の森川町より神田の猿樂町に移りたるが其處も手狹を告げたれば昨年の春今の所に家屋を新築して移轉をなし現今は市内各所に支部若しくは派出所を設け尚は横濱にも支部を置き一時は芝浦に養生園なるものを設けて輕快に向ひたる患者の療養所となし適當なる看護婦を派出して病床の世話をなさしめたるが取締に相應き人なきために今は中絶し居れり又た神田なる本會に屬する會員は目下六十餘名あり其他支部派出所に居るものは勘からず尚は本會にて養成中のものも二三十名ありと

●●●●派出看護婦の養成法　同じく看護婦なれども病院内に使用するものと普通の病家に使用するも

のとは少しく養成の方法を異にせり病院内には器械も不足なく醫師の廻診等も時を誤らざるも普通の病家にては器械は勿論醫師の來診も時計を以て計る如き譯には行かず折りには早き時もあるべく又た折りには遲き時もあるべし左れば看護婦は何時醫者が來るとも差支なき丈の準備をなさゞるべからず又た器械の如きも病家に有合せたるものを用ひ成るべく面倒を懸けざる樣に注意をなさゞる可からず然るに病院内に居たる看護婦にて俄かに病家に行きたる時には彼も不足此れも不足と萬事に不自由を覺え從つて家人に色々の注文をなすより看護婦と云へば面倒なものとの考へを起し遂に面白からぬ結果を見ることあり左れば私立の看護婦會にてはなる可く斯る弊害なからんことを勉め病家をして看護婦を見ること親戚若くば知人の思ひあらしめ氣安く病人の看婦を托せしむる樣に養成し居れりと只だ外科の看護（療治の手傳）のみは器械の不備なるため私立の看護會にては間に合はざることあり左れども追々發達するに從ひて如何なる荒療治の手傳にも應ずるを得るに至るならん

●●●●●
看護婦の役目　女醫と云ひ學校教師と云ひ男子のなすべき職業にて女子ならでは叶はざる道理なけれども子供を育て病人の看病をなす如きは女子の天職と云ふも不可なく何れの國何れの時代にても此の事ばかりは違ひたるを聞かず左れば我國にても普通の婦人は一通り看護の方法を心得たれども之れを今日の看護婦に較ぶれば天淵の差異ありて同一の話にあらず先づ昔時の看病人と云へば枕元にありて藥を薦むるとか或は病人の起臥を助くるに過ぎざりしが近頃の看護婦はなかなか左樣な單純なるものにあらず其役目の大概を記るせば器械の整理創洗ひ繃帶の卷解衣物の着脫せ電氣を懸ける事藥を點す事呼吸躰温熱尿等の表を作る事なぞ殆んど醫者の助手とも言ふべく看護婦にて其伎倆に熟したるものは下手な助手を使ふよりは餘程都合よき由にて某醫士の談に依れば自殺負傷等の事變ありて急速に出張すべき場合に熟練ある看護婦を連れ行けば器械の使用等も能く心得醫者の語るを待たず順序よく器械を取揃へ呉るゝが故に療治も早く方付きて非常に便利なりと

●●●●●
看護婦の品位　看病人と云へば慾張りたる老婆連の如く思ひたる昔時はいざ知らず今は貴婦人にして看護會を組織するものあり畏れ多きことながら我が　皇后陛下には夙に御心を注がせ給ひて赤十字社へ行啓あらせられしことさへありければ世間にても追々看護婦を敬するに至り從つて看護婦の品位を高むるを得たり左れば赤十字社の看護婦の如きは宮中にも出入して看護の御用を承はりけるが現に昨年皇太子殿下の御病氣の際同社の看護婦數名は高輪御殿に侍候して御看護をなし奉りたりと云ふ看護婦のためには實に名譽と申すべし又た昔時は貴

顯華族の邸にて看護婦を招きたる際には小間使同樣に取扱ひ其名も呼捨となし來りたるが近頃は斯ることのなきのみならず看護婦を見ること殆んど醫者と同樣にて其名も樣付にて呼ぶ樣になりたる由

●●●●
看護婦の熟練　病人に藥を進め或は起臥を助くるが如きことにても其伎倆の熟練あるものと不熟練なるものとに依りて病人に與ふる利害尠なからざるが其一例を擧ぐれば素人の看病人は藥物の道理等を知らざるが故に藥を多く用ゆれば多く利くならんとて二日分を一日分に用ゆる如き亂暴をなし或は病人の氣に觸はらざる樣にとて雇物に觸る如き思をなし病人の注文とし云へば病人の害になるも否とを問はず之れを與ゆると云ふ樣なことをおしければ折角醫者の丹精にて療くしたる病人も看病人の爲めに滅茶々々にせらるゝことあり左れども黒人の看護婦は決して左樣なることをなさず且つ其の食物の良否等も心得居れば如何に病人が催促すればとて病氣に觸る如き食物を與ゆることなく又た病人の注文なくとも病氣の鹽梅に依りて適當の食物を進むることあれば病人の爲めに少からざる利益あるべし

●●●●
病人の取扱　又た起臥のことに就て考ふるも頭も上らぬ大病人を取扱ふに體を動かさしめなば病人の苦痛を增さしむれども熟練かゝる看護婦は拳を病人に苦痛を感せしめずして其の起臥を助ぐる如き事なし此病人の起臥に就て面白き談は彼の鈴木マサ子が良人鈴木歩兵大佐が病氣に罹りたる時附添人として仙臺の衞戍病院に入りたるに病人の大佐を取扱ふものは何れも荒くれ男にて松の如き手にて大佐の起臥を助けゝれば傍に居るマサ子は膽も潰ぶるゝ心地して幾度か手に汗を握りたるが不幸にして大佐は異世の人となりたれどマサ子は深く此事を感じ婦人の優しき手にて病人の取扱をなせば如何に嬉しく思はれんとて夫れより看護婦の事を思ひ立ち遂に今日の如き地位を作るを得たりと

●●●●
看護婦の技倆　看護婦は屢々病人に接し居るが故に病症に依りて吐血するが如きことあるも其血の色に依りて病の變じたると否とを知れば血が出たとて狼狽騷ぐ如きことなし又た危險なる病氣にても看護婦の力に依りては隨分平癒の功を奏せしむる由にて現に昨年廣島に於て赤十字社幹事清水俊氏が虎列剌病に罹りたる時同社の看護婦は積年の恩誼に報ゆるは此時なりとて身を擲ちて看護に力を盡くせしにぞ一時は危篤に瀕したる清水氏の病氣も次第に快復に向ひて既に絕えんとする玉の緒を繼き留めしかば清水氏は深く看護婦の厚情を喜び益々其必要を感じたりと

●●●●
看護婦の秘密　看護婦も醫者と同じく病人の枕元に近づきて其人の秘密を知ることあれども看

看護の義務として之れを漏らすを得ざるのみならず醫者の指揮なき以上は何事をも手出し得ざる規則なり無教育なる看護婦は左る事に頓着せず無暗に病家の秘密を饒舌散し或は病家に勸めて醫者を取代へしむる如き弊ありて大ひに看護婦の品位を汚がしたれども近頃は教育ある看護婦の澤山に出來たれば斯る弊風も自ら廢りて看護婦の義務を破る如きものは甚だ尠なしとぞ

●●●●●●赤十字社の看護婦　赤十字社の病院に入りて第一に感心するものは只だ看護婦の規律整然として天下の摸範たるを示すにありき此病院の看護婦は躰格の丈夫なるものを選びたれば綺羅のうす衣に得耐へざる如きものなければ分けて赤十字社の看護婦は撰りたる一粒種なれば肌豐にして顏色麗はしく其擧動も亦た快活にして因循の風なく左ればとて決して御轉婆にはあらず畢竟赤十字社病院に斯る看護婦を出だせしは其病院の組織の他と異なりて重きを看護婦の養成に置きたるの結果と申すべし

●●●●●●看護婦養成の狀況　赤十字社の病院は普通の病院の如く傷病者を治療せん爲めに設立せしものにあらず本來の目的は戰時若くは天災の際使用すべき救護員を養成するに在ることは西洋各國に於ても同一なるが我日本赤十字社の病院も此目的に依りて明治十九年始めて麹町區飯田町なる今の本社構內に設立されしものにて當時は規摸狹小なりし故今日の如く正則的に看護婦を養成する能はず且つ世間にても看護婦の必要を知らされは其志願者は僅々五名に過ぎざりき夫れより明治廿六年の四月に至りて始めて看護婦養成の方法を規定し志願者を募集したるに十名の生徒を得たれば之れに正則的看護法を教授したるが此生徒は三年の歳月を費やし明治二十六年十月に至りて卒業したり是れ赤十字社病院に於て正則的看護婦を出したる嚆矢なりき此間明治二十二年中に今の澁谷の地に病院新築の工を起し飯田町の病院を撤して之れを看護婦生徒の教場及び寄宿舍に改築し同二十四年五月中に病院の全部落成したれば此に移轉したり爾來每年二回宛志願者を募集し本年四月には第十二回の募集を行ひたり

●●●●●●看護婦の養成法　赤十字社病院にて看護婦を養成するや看護に必要なる普通學科の外其精神を涵養せんため軍人に下賜ひたる詔勅或は世界に於ける赤十字條約等の趣意を口授し自ら其職分の貴きを知らしめ造次顚沛にも赤十字の主義を忘れしめざることを期しぬ同社の看護婦の品格日から高尙なるを覺ゆるは此精神的修養のあるが故ならん又同社の看護婦は戰時若くば天災の際使用すべきものなれば其學科の程度も普通の病院若くば私立看護婦學校等に比すれば頗る高尙にして複雜なり則ち普通の看護婦は學科としては解剖生理の大躰繃帶及び器械學の一斑消毒法の大意普通看護法等一般の傷病者を取扱ふに必要なるものを授くれば可なれども赤十字社の看護婦は

尚は其上に戰時に必要ある傷病者の取扱法を教へ又参考として陸軍々人準拠及び徽章等の事を授けり今試みに其課程を記るせば

學科教授

解剖學大意　生理學大意　繃帶并器械學大意　看護法
治療介輔法　消毒并同材料製造法　救急法　傷病者運搬法

課外教授

軍人勅諭　陸軍々人等級及徽章　赤十字條約
右の中救急法傷病者運搬法等は軍に戰時に必要なるものにて陸軍々人の等級及び徽章等を教ゆるは戰時陸軍に從ひて業務を執る時の必得の爲めなりと

●●●●●
看護婦養成の順序

赤十字社病院にて看護婦を養成する先づ第一に志願者の躰格、履歴、學力等を調査し所定の資格に適合すれば生徒候補者となし二ヶ月間病室に勤務せしめ其の性質品行等を檢分し之れなれば差支なしと見込みたる時は更りに學術の試驗を行ひ其優等者より擇びて生徒となす若し候補中に不都合のありたる時又は學術の試驗に二度引續きて落第したる時は病院より斷りて出さしむ偖て生徒となりたるものは病院内の寄宿舍に入らしめ學科及び實地の修業をなさしむ修業の年期は三ヶ年半にして之れを前後の二學年に區分し前の一ヶ年半には專ら學業を修めしめ傍ら病室に就て實地勤務を練習せしめ後の二ヶ年は實務に服し前學年に修得したる學科の應用に熟練せしむ又た前學年は之れを三期に別ち六ヶ月を以て一學期となし第一期には解剖生理の大意繃帶及び器械學の大意第二期には看護法治療介輔法消毒法消毒材料製造法第三期には救急法傷病者運搬法等を教授す一學期（六ヶ月）毎に試驗を行ひて其成蹟を檢べ前學年（一ヶ年半）の仕舞には全科試驗を行ふ是れ醫者の方にて言へば前期試驗と同樣のものなり此試驗に及第したるものは二ヶ年間實務に服せしめ其修業を了りたる時は赤十字社病院長養成所委員長教員等の連署したる立派なる卒業證書を與へ赤十字社看護婦名簿に登錄せしむ是れ醫者の兩期試驗に卒業し開業醫となつて醫籍に登錄せられたるが如し以上は赤十字社に於て看護婦を養成するの順序なり如何に其規則正しくして丁寧なるかを知るに足らん

●●●●●
看護婦の寄宿舍

寄宿舍は病院の右方に在り廻廊を經て病院に連る構造は和洋折衷の木造二階建にて長方形をなし桁行は二十八間餘奥行は七間餘なり部屋は二階に十二室下に十二室併せて二十四室あり一室は八疊或は十疊にて別に押入の設あり一室毎に一個の電燈を吊す一室の人員は三名乃至四名なり掃除も能く行屆きて室内の配置も亂雜ならず中には美しき草花なんぞを花瓶に挿

けたるものを見受けぬ現今此寄宿舍に居る生徒は百餘名なり

●寄宿生の心得　寄宿生中には生徒候補者もあれば生徒もあり又た生徒中には前學年（學科修業生）の者もあれば後學年（實地練習生）の者もあり其區別に從ひて其心得方も多少異なれども先づ其の普通に亘りたるものを記せば寄宿生は夏期（五月一日より十月三十日迄）は午前五時に起きて午後九時に寢ね冬期は（十一月一日より四月三十日迄）は午前六時に起きて午後十時に臥す起寢後室内の掃除をなし夫れより食事を終へ午前七八時となれば夫れ〳〵分擔の業務に就く則ち病室の受持は病室に行きて病人の看護をなし外科の受持は外科室に行きて器械の整理をなす尤とも病室勤務のものは當番と明番を拵らへ置きて晝夜交代をなす故に夜番に當りたるものは此の規則を適用しがたし學科の教授は午後一時より始まりて午後三時に終はる此の教授終はれば生徒は寄宿舍に歸りて演習をなし或ひは病室勤勤に當りたるものは病室に赴むくなり休日は日曜日大祭祝日暑中休暇年始年末休暇等なるが是れとて全然其の業を休む能はず各自順番を以て休暇を受く故に日曜日を休日と定めあるも其日に勤務したるものは翌月曜日に休むことを得るなり外出は休日の外は許さず外出せしものは必ず點燈頃までに歸らねばならぬ規則にて若し時刻の後れたる時は保證人の證明を要するなり

●看護婦の學資　赤十字社の看護婦は何れも社費生にて生徒には毎月五圓同候補生には同く四圓を支給し一切の費用を支辨せしむ尤も教科用の書籍器械物品及び制服帽子等は社より支給するが故に生徒及び候補生は食費筆紙墨小遣等を支辨すれば足れり食費は一日八錢にて一ヶ月二圓四十錢なり風呂は寄宿舍内に設けありて毎日入浴を許しあれば湯錢を要することなく又た女子に缺くべからざる紅お白粉等も看護婦には用ゆることを禁じあれば化粧代等を要することなし左れば看護婦の費用は三圓内外あれば十分なるべく社より支給さるゝ手當金にて不足を感ずる如きことはなからん此學資金は首尾よく卒業すれば償還するに及ばざれども修業中品行不正怠惰等の廉にて退學を命ぜらる時は悉く償還せざる可からず尤も病氣若くは事情已むを得ずして退學するものは審議の上全く學資の償還を免除し或は年賦にて償還せしむることありと

●看護婦の給料　赤十字社の看護婦生徒にて卒業の上尚ほ引續いて同病院に勤務せんことを望む時は其の技倆に應じ之れを三等に區別し夫れ〳〵所定の給料を支給す其の給料表は左の如し

一等看護婦	〔上給七圓五十錢 〔下給七　圓
二等看護婦	〔上給五圓五十錢 〔下給五　圓
三等看護婦	〔上給六圓五十錢 〔下給六　圓

尚ほ此看護婦には勲等として金盃或は二圓乃至五圓の金額を給與す又た此看護婦にして病

院より外勤（外勤の事は後に記すべし）を命ぜらるゝ時は本人の仮備と病の種類に應じ左の給料を受くるを得べし

一等給料（普通患者　一日金七拾五錢
（傳染病患者　一日金一圓

二等給料（普通患者　一日金五拾錢
（傳染病患者　一日金七拾五錢

外勤看護婦の往復費用食費等は一切病家に於て支辨すれば看護婦は此給料の全部を收得する都合なり左れども看護婦は病家より直接に金錢物品等を貰受けらるゝ規定なれば病家より病院に納めたるものを受取ることゝなるべし

●●●●看護婦の義務　赤十字社にて看護婦を養成するは戰時若くは天災の際使用せん爲なれば卒業後直ちに其社の關係を離るゝ樣にては其の養成の甲斐あらされば看護婦に向つて一種の義務を負はしめ何時にても役に立樣に定め置けり則ち看護婦は身の上に如何なる事故ありとも國家有事の際若くば天災の起りたる時には本社の召集に應じ看護の事務に從はざる可からず又た生徒卒業後は毎年一回東京在住の者は本社に地方に在るものは其地方部に召集し點呼を行ふことあれば其際には必ず出頭して點呼を受けざる可からず此等の件は普通の病院私立看護婦學校等には見ざる規定にて赤十字社のみに限られぬ左れば同社の看護婦たらんことを望む人は豫め此義務を果し得るや否を考ふること何よりも肝要ならん

●●●●外勤看護婦　赤十字社病院にては看護婦に餘裕ありたる時は病家の依頼に應じ院外に派出せしむる事あり病家にて看護婦を招かんとする時は主任醫若くは同社正社員以上の紹介を以て申込むべく又た地方患者にて看護婦の派出を望む時は其地赤十字社委員の紹介を得たる上尚ほ往復共確實の人を附て保護せしむるの規則なり外勤の看護婦に就ては種々の弊害ありて往々病家に迷惑を蒙らしむることある由を聞きしが赤十字社にては斯樣ある事なからしめんため外勤看護婦の心得方を示し嚴重に之れを實行せしむ今その心得方の一節を記るさんに

一專ら行狀を愼み貞操を重んじ粗暴不遜の擧動を戒め殊に家族傍人に對し聊かも高慢ケ間敷き言語動作をなす可からず

一病者に對しては懇切親密を旨として隔意なからしめ其信用を得んことを要す

一言語動作は靜肅を要すと雖も嚴肅に過ぐる時は却て病者をして忌避の念を生ぜしむることあり

一作業は輕快活潑にして聊かも厭忌怠慢の狀を現はす可からず

一一般に清潔を旨とし病室内を亂雜不潔ならしむ可からず又た數々洙浴して自ら頭髮身肢を清潔にし衣服を整へ常に容姿を正ふすべし

其の行狀に於て斯くの如く注意したれば其他に於て注意の行渡りたることは言ふ迄もなし斯くなればこそ宮中へも出入し又た皇太子殿下の御側近く奉侍することをも得たりしなれ

●看護婦の名譽　赤十字社の看護婦中には隨分名譽ある女子を出せしが林英子の如きは正しく其一人あり前年李鴻章の馬關に來りて兇漢の爲に傷けらるゝや英子は撰ばれて其看護を命せられしかば日本の看護婦が伎倆を現はすは此時ありとて心を凝めて其職務を行ひたるにより李氏の傷漸も意外に早く全癒し談判も首尾よく整ひて歸國の途に就きたり斯くて英子は本年の春看護の用を帶びて上海に渡りたるに折柄李氏は遣魯大使として出張の途次同地に立寄りたれば英子は通辨を携えて其旅館に赴きたるに來訪の車馬は門前に集ひて護衛の兵士は嚴重に警戒をなし婦女子等の容易に入るべくも見えざりしが折よく李經芳に出逢ひたれば案内を賴みて李鴻章の居間に通りたるに李氏は大ひに喜びてよくこそ尋ねられたりとて當時の事など物語りつゝ斯傷の癒えて今は其の痕さへ消えたるは一重に佐藤名醫と御身の賜ぞかしとて從者の面々來訪者にも英子を紹介し自身の寫眞は魯國へ行きたる後彼地にて撮影し送るべしとて從者に命じ饗應を調えしめ懇ろに歡待せしかば英子も李氏が前途の健康を祝して立歸りたりと英子の如きは獨り赤十字社の名譽たるに止まずら實に日本國の名譽と稱すべし

●看護婦の募集期　赤十字社の看護婦は毎年六月十二月の兩度に募集し假試驗を行ひて及第者を生徒候補者となし毎年四月十月の二回更らに本試驗を行ひ高點者より採用して生徒となす赤十字社にて養成する看護婦は一回十五名を以て限となし其以上は採用せざる故假令本試驗に及第するとも此人員に超過したる時は生徒となるを得ず矢張り生徒候補者として勵むるなり其代りに次回にては別に試驗をなさず直ちに生徒に採用せらるゝ圖書の差出期日は別に定り居らざれば何時差出すとも差支なし病院にては此願書に順序を付けて仕舞ひ置き募集期限の來る時は其順序に從ひて呼出す故に四月頃願書を差出し置けば六月には採用せらるゝ都合となるべし

●看護婦志望者の資格　赤十字社の看護婦たらんと欲するものは先づ其社に定めたる資格に適合するを要す今其の資格を數ふれば第一は年齡なり是れは二十才以上三十才以下にて修學年間家事に係累あるものを要す第二は躰格なり是れは身の丈四尺六寸以上にして普通健康躰のものに限る第三は性質なり是れは温順にして然かも壯快なるものを要す第四は素性なり元賤業等を營みたるものは採用せず第五は品行なり是れは無論方正のものを撰擇す第六は學力にして高等小學校卒業以上の資格あれば十分なりとす偖て以上の六資格即ち年齡躰格性質素性品行學力等の備はれば看護婦志望者たるを得れども尙は此資格の相違なきを證するため二人の證人なからざる可からず此

證人は赤十字社にて確實と認めたるものにて席下に現住せるものに限る思れ採用の上若し實際より僅還せしめん爲めなりと

鉄くる所あれば其實を證人に負はしめ又た修學中不都合の事あれば本人を放逐し其學費等を證人

●●●

位の割合とならん看護婦の配置に就ては患者の病症及び病室の間數等に依りて多少の相違あり從つて患者何人に就き看護婦何人と確定する如きは正確の數を得る能はず此に記す所のものも亦た其大概に過ぎざるなり

●●●

の二を還納するの義務あり此義務を終らざれば病院を離れて勝手に營業することを得ず若し中途にして病院の關係を離れんとする時は本人又は保證人より一時に其學資を償還せらむ看護婦にして此義務を終へたる後尚は勤續を望むものは其伎倆に依りて相當の手當を支給す內勤看護婦の給料に附ては他の病院にては差支なく談じたれども慈惠病院は何か意味ありと見へ事務員が「左樣なことは外へ漏されないとの」一語にて刎ね付けたり外勤の給料は本人の伎倆に依りて三等に區分し尚は傳染病と普通病との差別に依りて高下あれども最高一週間九圓にて最低四圓二十錢なり故に此中間を取りて一週間六圓位の給金を得ることせば一ケ月に二十五六圓の收入あり此內制規に依り十分の二即ち五圓內外を病院へ還納することせば三年半位にて悉皆の學費（二百八圓）を還納するを得ん若し又た本人の望に依りて每月十分の二以上を還納する時は其年限を縮むるを得へし目下全病院に居る看護婦は生徒二十七名卒業生四十六名併せて七十三名なり又た卒業後院長の緣故（慈惠病院の院長高木兼寬氏は東京病院の院長を勤む）に依りて近傍の東京病院に勤務するもの多しと云へり尚は同病院にては此頃看護婦の募集中にて三十名を限り入學を許す由なれば志願の人達は六月三十日迄に願書差出すべしとの事なり

●●●

るは明治八年の頃にて實に官設諸工場中にて女工を使用したる嚆矢あるが當時は其の事業の狹少なると女工の經驗無かりしゆゑ其人員も僅少なりしが年を追ふて次第に增加し現今にては其數七百餘名の多きに上り「印刷局の女工」とし云へば誰れ知らぬものなく有望なる女子職業の一つにぞ數へられける

●●●●印刷局の組織　は三部に分れ一を印刷部と呼び一を活版部と稱し又た其一を抄紙部と云ふ印刷及び活版の兩部は神田橋内に抄紙部は王子村に設けらる印刷部は銅版電氣版等を用ひ紙幣公債切手印紙の如き貴重物を製造する所にして活版部は活字を使用し官報を始め諸官省の布達、議案、爲替證書等を印刷する所なり而して抄紙部は其名の如く印刷及活版に使用する原紙を抄造する所にして彼の紙幣の原紙の如きも同部にて抄造す此三部中に於て最も多く女工を用ふるは印刷部にして抄紙部之に亞く即ち印刷部には女工取締十二名女工三百六十三名抄紙部には女工取締十一名女工二百四十八名活版部には女工取締五名女工九十三名を使用す

●●●●印刷部の狀況　印刷局中に於て其事業の複雜なるものを求むれば印刷部に過ぐるものなし印刷部は亦た三課に分れ一を刷版課と呼び一を整理課と云ふ刷版課にては原版の彫刻より印刷に至る迄の業務を總轄し調査課にては刷版課より廻はりたる製品を調査し之れを封緘するに至る迄の業務を掌る整理課は所謂庶務課にて別段工女には因緣なき所なり偖て印刷部に使用する工女の人員は刷版課に工女取締二名工女五十二名調査課に女工取締十名女工三百十四名あり又た刷版課に屬する仕事を分類せば彫刻、石版、電氣版、凹版、凸版、乾濕等なり調査課に屬するものを分類せば裁斷、目通、打拔、ゴム、員數調、封緘等あり是れより其順序を追ひ工女が如何なる仕事をなすやを說明せん

●●●●刷版課の仕事　刷版課の第一は彫刻室にて緻密なる器械を用ひ諸種の模形を彫刻せり次は石版室にて石版を用ひて印刷をおせり其次は電氣室にして此處にて電氣版を作る此電氣版は紙幣、切手、印紙等の原版となるものにて最初に一枚の原版を彫刻し置けば夫れより電氣の仕掛にて幾枚にても殖し得られ紙幣にても亦た切手類にても其原形の改正せられざる以上は別に原版を彫刻するの必要なく此電氣版にて無限に增版せらるべしと電氣室を出づれば凸版室にて此處には數臺の印刷器械ありて盛んに紙幣、公債、切手、印紙、端書等を刷出せり端書類は此室にて刷上れども紙幣の如きは緻密なる印刷を要するが故に之れを凹版室と稱する所に送る刷版課にて始めて女工を見るは凹版室にて此處には二十餘名ありて印刷物の持運び等をなせり此室を出て二階に上れば正面には乾濕室とし印刷物に染みたるイン

キ、肉等を乾かす所なり十餘名の女工は種々の印刷物を携へ來りて一々それを乾かしぬ乾濕室の隣は凹版室にて即ち紙幣切手類の刷上をなす所あるが凹版室にて模樣のみ寫りたる紙幣、公債類は番號を除くの外此室にて完全のものとなり此室に働く所の女工は二十餘名にて其仕事は凹版室と大差なし是れにて刷版課の案内を終へたれば調査課に移らん

●●●●●●
調査課の仕事　は頗る複雜にして容易に呑込みがたし此課は上階下階の二つに分れ階下を第一室と稱し階上を第二室と呼ぶ第一室に入れば先ば最初は原紙の調査所にて王子の抄紙部より來りたる原紙の員數を調査す此處に使用する女工は九人なり原紙調査の事は刷版課に屬すべき筈なれども都合ありて調査課に加へあれりと次は裁斷室にて此處には刷版課より廻りたる印刷物を大版の儘にて整理し端書の如きは十五枚連續したるものを四百枚重ねて一時に裁斷す端書類を裁斷するものは男子にて女工は手傳として之れを助くるに過ぎず此處に働く所の女工は二十餘名あり此室を出づれば切手印紙類の目通及び打貫をなす所にて六七十名の女工は雪の如き白衣を着けて熱心に働くを見る目通とは裁斷及び打貫に便なるため印刷物の長短を揃ふる仕事にて切手印紙類は大版の儘（二百枚連續）五六枚取揃へ紙捻にて其端を綴り置くなり又た打貫とは目通にて揃へたる印紙切手類を器械に掛けて其端にプッ〳〵と穴をあける仕事あるが之れには器械を用ひ足を以て

動かすか故に女工中にて最も骨の折れるものなりと切手印紙類の打貫に從事する工女は廿七八名にして目通を爲すものは四十餘名なりと

●●●●●
ゴム室の女工　目通及び打貫の所を過ぎ行けば切手印紙類の裏にゴムを塗り或は紙幣の兩面に藥物を塗る所あり室内には細繩を縱橫に張廻して切手類を懸渡し幾多の女工は其下に集て夫れ仕事をなし一人の女工がゴムを塗れば他の女工は手早く之れを乾かし其の順序の整ひたること手を措くの暇さへなしゴムを塗ることは何んでもなき樣に思はるれどもなか〳〵六ヶ敷き仕事にて濃く塗る時は原紙を損じ左ればとて薄く塗れば物の用に立たず濃くもなく又薄くもなく丁度能きほどに塗るは一に女工の手加減にあれば熟練なるものにあらねば容易に出來がたし左れば印刷部にても印紙切手類に穴を明ける仕事と紙幣公債等に番號を押す仕事と此ゴムを塗る仕事は分業法に依りて夫れ〳〵專門の仕事となし業務の繁閑に依りて他に振換る如きことなしと又たゴムを乾かすとも一時は器械を用ひたれども其効用薄かりし故に矢張り迂遠ながらも一つ〳〵繩に懸けて乾かすとなし今の如く行ひ居れるなりとゴムの乾きたる品は之れを取外し皺みたるものを板に挾みて重りを掛け置けば皺は自ら伸びて原の如く美しき紙となるなりとゴム室には一の器械を用ひず人の手のみにて仕事をなし器械らしきものはゴムを乾かすために据付られたる曖爐あるの

み此業に働く女工の數は二十餘名にて此中ゴムを塗るもの七八名あり其他は原紙を持運び或は之れを乾かすものなり

紙幣截斷室の女工　ゴム室を出で、二階に上れば左方には紙幣を大阪の儘取揃ゆる所及び之れを截斷する所あり我々の使用する紙幣は最初より一枚々々作る者にあらず五圓の兌換券なれば六枚連續し十圓なれば四枚連續じ居れるものを刷出し之れを截斷して現行の如き小形となすあり紙幣は端書又は切手類と異なりて一枚にて十圓ともなり又た百圓ともなるものなれば其の取り扱ひも一層丁寧にして截斷にも餘程の注意をおせり即ち端書類の截斷器械は蒸氣力にて運轉し一時に裁切れども紙幣を切斷するには人力を以て器械を動かし徐々と裁ち行くなり紙幣は大阪のも、五百枚を一束となし器械に嵌めて切斷す故に若し其の標尺を誤り一列にても裁ち損ねたる時は忽ち何万圓の額面は損紙に歸し反古となるべし次は紙幣の目通しなり之れも切斷同樣の注意をなし端書切手類は大抵眼分量にて定れども紙幣は一々物尺を當て其長短を量りたる後長きものは長きものと揃へ短かきものは短かきものと揃へて之れを一束となし切斷方に送るなり原紙には左迄の長短なけれども藥物を塗り或は印刷になす中に是非紙幅に伸縮を生ずる故に斯くは丁寧に揃ゆるなりと若し此揃方を誤りて髮の毛ほどの違ひあれば切斷の節忽ち幾千枚の裁損ひを生ずべし左れ

ば目通と截斷とは離る可からざる關係ありて何れも注意すべき仕事なりとす紙幣の斷截方は男工の專務にて紙幣の目通は二十名ばかりの女工之れを勤め居れり

印載室の女工　紙幣の切斷室を離れて右方に行けば紙幣の員數を調ぶる所紙幣の番號を押す所の仕事となす印刷局に女工使用の途を開きたるは此印載係にして當時は今日の如く同局にて紙幣を製造せず日耳曼亞米利加等の會社に嘱托して製造せしめ日本にては只だ大藏卿の印章割印番號等を押すに過ぎざりしが當時の印刷局長故得能了介氏は歐米の造幣事業を視察し女工を用ゆるの利益あるを認めしかば明治七年中斷然女工を使用するに決し一夜の間に男工と女工とを交代せしめ昨夕迄男工の爲し居たる仕事を今朝は早や女工の手に移したるが裁縫や糸繰こそ心得居れ女の手にて紙幣を取扱ふ如きは我國未曾有のことなれば誰れとて勝手を知りたるものなく互ひに顏を見合せて呆然たるばかりなりしがやう〳〵技手の敎ゆるに從ひて其順序手續を覺え遂に今日となりては女工にあらねば其仕事の運ばれざる有樣となれるは女子の頭に數學と云へる考へのなきことにて讀書の出來るものにても算盤を彈くことを知らざるものは尙ほ少なく印載係の工女にて紙幣公債等に押

す西洋數字の番號さへ知らざるもの多かりしに今係の人々大ひに困却し遂に厚紙の札を作りて西洋數字の 1.2.3 を記るし其下に日本字の一二三を記し毎日晝食の際之れを敎へ退出の際には此札を携へて歸宅せしめ翌日出勤せし時之れを演習せしむるに或は三字を覺へ來るものあり或は二字を覺へ來らざるものありて其係の面倒は一通ならざりしが之れも間もなく習得し差支なきに至りたゝ此際の工女にて今尙は殘り居れるものは僅かに二三人に過ぎず之云ふ其後募集の女工は夫れ〳〵學問の資格をも定めたれば斯る面倒を見ることなく日一日と進歩し今は紙幣公債等に記しせる英字英文等をも自由に讀み得るもの多しと云ふ偖て印紙係の仕事は既に出來上りたる紙幣公債等に番號を押すことなるが紙幣の表面には四ヶ所の番號あれども其中印紙係にて押す所は一ヶ所に過ぎざるが其の何れを押すやは事秘密に渡るを以て公にする能はず此番號は一々器械を以て之れを押す此仕事は彼の打貫に續きて力の入るものにて最初は腕及び肩の痛むことあれども二三ヶ月も經れば平氣にて從事せらるゝと云ふ素より終日立づくみの仕事なれば骨折りのはなも察せられぬ紙幣に番號を押すと云へば容易き樣に思はるれども馴れざる間は番號を歪めて押し或は肉の付樣の鮮ならざる事あり故に初めて印紙をなす女工には傳習のため損紙を宛がひいよ〳〵其誤らざるを確めたる後にて本業に從事せしむる由此室にて働く女工は四十名ばかりあり中印紙器械に憑りたるもの十二三名を見受けたり其他は檢查及び封緘の女工なりとす

檢查係の女工　印紙係にて捺印を終へたる紙幣は再び檢查係に渡し精密に檢查せしむ檢查係には二十五六名の女工あり檢查の方法は頗る鄭重にして初心なる女工より順次熟練なる女工の手に渡し其間五度の手數を經るを例となす紙幣の摸樣記號等は頗る緻密なるが故に之れを檢查するには眼力の十分あるものを要し所謂秋毫の末を見分るの明なかる可らず故に素人眼にては完全に見ゆるものも一たび檢查係の眼に觸れれば意外の所に缺點あるを見出され損紙となるもの多しと云ふ現に記者の參觀したる際檢查係の机上に十圓の兌換券四五枚取除けありたれば不審に思ひ係の役人に向ひて其譯を尋ねたるに損紙なりと答へたり左れども記者の眼には完全のものと見えたれば更らに何處に缺點のあるやを問ひ役人の說明を聞きたる後一は記號の隅少しく摸樣に懸り居たると一つは裏面の摸樣表面に透き居たると一つは裏面の印章必ばも缺け居たると一つは摸樣の少しく浸居たるとを發見し始めて其損紙たる譯を知りたり若し役人の說明なかりせば正當の紙幣として渡さるゝも一つの疑もおく之れを受取りしならん其の檢查の緻密なること推して知るべし偖て檢查を終へたる紙幣は之れを封緘係に送る封緘部には三四名の女工あり檢查係より取受り

たる紙幣を取揃へ五百枚宛を束ねて帯紙をなし更らに之れを紙包となす此上包の正面には紙幣の額面總高番號等を記し其下に印刷部長の印を押し倘は其封目々々には調査課長の印を押すなり斯くなすは萬一此紙幣中一枚にても過不足あれば部長及び課長に於て其責に任ずることを示したるものなれども幸ひ印刷局にては今日迄政府若くは銀行等に納めたる紙幣中にて過不足等のありたることはなしと云ふ

●切手端書類の取扱　紙幣の封緘所を出づれば端書の検査室にして此處には數十臺の机を列べて端書を堆く積み上げ女工は机に凭りて端書の員數刷損ひ等を調べけるが其速かなること宛ながら雪片の飛舞するごとく瞬間に數百枚を數へ端書の検査室を出づれば切手印紙類の検査室にて此處には六十名近くの女工ありて印刷部にて最く多も女工を使用するは此室なり切手印紙類は端書の如く其形大ならざれば其取扱も面倒にて且つ一枚の損紙ある爲めに全部を棄つる譯に行かざれば損紙は一々取外して他の完全あるものを其穴へ埋ひる等到底女子ならでは出來がたき仕事多し左れども手に入れば譯もなく出來るものと見え熟練なるものは十分間に十五六枚を調べ得ると云ふ次は切手印紙端書等の封緘室なり此處には四十名ばかりの女工ありて上包を張るもの帯封をなすもの封皮に印を押すもの其仕事は千種萬別にて一々記るしがたし切手端書類の封じ方は紙幣も同

樣なれども只だ部長の封印なき丈が紙幣と異なり居れり此處にて封じたる物品は其儘注文の諸官省に送る即ち切手端書類は遞信省に印紙類は大藏省に納む而して諸官省にては此封印を信用し一々調査することなく安心して受授の手續をあすと云ふ右にて署ぼ紙幣切手類の製造より封緘に至る迄の順序を説明したれば之より印刷局に於ける女工の取扱ひ　印刷局には是迄記るし來りたる印刷部の外活版部抄紙部等あれば先例に依りて●女工の取扱ひ

一々其仕事の區分を説明する筈なれども斯くては只だ仕事の話のみにて空しく紙數を費やすを以て茲に話頭を轉じ女工取扱ひに關する事を記るし夫れより活版部及び抄紙部に移らん印刷局は前にも言ふ通り大藏省の管轄に屬し營利主義の事業にあらねば職工を使役するにも能く其道を盡し勉勵の衆に超ゆるものは之れを優賞し病氣に悪りたる者天災に逢ひたるものは之れを救恤するは勿論尚は友徳規則なるものを設けて職工同志親睦を盡し互ひに相誡めて品行を矯正する等他の工場等には見ざる良法ありて職工をして樂んで其業に從はしひる仕組となしあれば同局の職工となりたるものは男女を問はず倦怠の心を起すなく一意其業を精勵して永く其位地に安んじ朝に入りてタに去る如きもの尠なしと云ふ職工取扱ひに關する規則は一つに故得能く局長の制定せしものにて職工を保護し且つ之れを奬勵する點に於ては實に工業社會の模範と

もなすべきはで整頓し居れるが惜哉會計法の爲めに制せられ局長と雖も褒賞の如き性質の金員を支出すること出來ざれば悉く之れを實行する能はず只だ其精神を酌みて條項を改竄し之れを運用し居れりと云ふ職工の取扱ひは男女を通じ同一にて只だ等級賃錢等に高低の差違あるに過ぎず因て先づ其等級の事より記るさんに印刷局の職工は男女を問はず之れを等内工、等外工、試驗工、幼年試驗工の四種に區分し等内女工は一等より三等に至り等外女工は一等より四等に至る幼年試驗女工は亦た之れを一級二級の兩種に分てり今其の等級及び賃錢額を掲げんに

幼年試驗女工	七錢	試驗女工二級	十錢
同　一級	十二錢	等外四等女工	十三錢
等外二等女工	二十錢	等外一等女工	二十五錢
二等女工	三十五錢	一等女工	三等女工　三十錢
			四十錢

尙は此上に伍長取締なるものあり伍長は三等以上の女工中より拔擢し普通日給の外別に給料を與ず取締は一等女工若くは之れに匹敵ずる女工中より撰拔して之を任じけるが右取締りは印刷局の雇員として待遇せられ十圓以上二十圓以下の月給を給與せらる現今取締にて最高額の月給を得るものは一ケ月十八圓にて印刷部に一人あり其他は十五圓十二圓十圓等なり

●●●●●

就業と休暇　職工の就業時間は一日十一時間にして朝七時より始まり夕五時に至りて終る尤も一二の兩月及び十一十二の兩月は十時間なり此七時と云ふは起業の時にて職工は出入毎に檢査を受くるが故に少くとも三十分前には出勤せざる可からず又た五時と云ふも止業の時にて夫れより室内の檢査等もあれば之れ又た三十分ばかり後れて退出することゝなるべし就業中は晝食時間の外別に休憩なし晝食の時間は正午より同三十分に至るの間となす女工には夜業を命せざるの規則なれども仕事の繁忙なる時には已むを得ず居殘を命ずることあり左れども三時間を超ることなく大抵七八時頃には退出せしむ又た居殘りを命じたる時は一時間毎に日給の十分の一を給與さるゝなり職工の休暇日は毎日曜日、大祭、祝日等にて尙ほ外に十二月二十八日より翌一月四日に至る年末年首の休暇あり年末年首の休暇には日給を給與せざれども日曜日、大祭、祝日等には半額を給與さるゝなり定りたる休暇日に不時に出勤する時は無論日給を全給さる又た父母夫の忌中には特に休暇を賜ひ且つ日給の全額を與へらる本人病氣若くは事故ありて出勤せざる時は日給を得る能はされども執務上負傷したるものは療養中日給半額及び療養料を給與さる又は就業中家族に急病ありたる時若くば自身病氣に罹りたる時は止業時間を待たず早引を許さる午前中に早引をなすものは日給を半減せらるれども執務上負傷の爲め退出するものは全額を支給さる尙ほ此外大水、

火事、地震等に逢ひたる時は三日以内を限りて休暇を許さる尤も休暇中は日給を與へられず昔時は病氣に罹りたる時も療養中九十日を限り日給の半額を支給すべき制なりしも近頃は之れを廢し療養中は公の救恤を得ざることゝなれり左れども尚ほ別に補助の法則ありて安心に療養し得らるゝなり即ち印刷局の部内に補助會あるものありて役員以上は各々月給の十分の一を積立て役員又は職工中に病氣負傷等の如き不時の災厄に罹りたるものある時は官の補助あると否とを問はず其情狀に依りて補助金を支出し之れを慰恤す此補助金は積りて既に四千餘圓に上りたりと

●●●

分をなし一面に青石を敷詰めて一たび水を撒く時は如何なる汚物にても流れ去るの構造とあし手を洗ふ水も鐵管の仕掛にて斷えず清水を噴出すれば幾十人の手を洗ふとも決して不潔とあることなく工場の便所としては頗る完全なるものと思はるゝ而して休憩所は毎土曜日毎に大掃除を行ふ定めなれば場内には一つの飯粒さへも見出さず便所は毎日二回宛掃除をなし石灰を散布すれば臭氣も自から薄らぎて惡疫媒介の原素となる如きことなし又た各自の衛生に至りては擔當の醫員あり時々休憩所に來りて辨當の菜には斯る物を用ゆべし衣類は斯るものを衣るべしなど平易ある衛生上の談話をなし若し又た就業中下痢をなし或は頭痛を催ほす如き微恙の事ある時にても一々本人を診察して夫れ〳〵の處置をなし成るべく病疫を未發に防ぐことを勉むるが故に開局以來今日迄工場内にては傳染病等に罹りたるものなしと云ふ

●●●●　病者の取扱ひ　職工にして若し病氣に罹りたる時は構内に在る診斷所の診察を受け原價にて藥劑を與ふるは勿論尚は引籠療養中にても同樣診斷所の藥を得らるゝなり印刷局の女工に特有なる病氣は未だ發見せされど重に呼吸器病、腸胃病等多きものゝ如く又た鬪査課に勤むる女工は眼力を使用するか故に近視眼となるもの多し病者の年齢は十六七より十八九に至る所謂成年期に多く夫あるものは夫あるものより多しと云ふ初め此診察所の開かれたる際には職工の作病なぞをなすものあらんとて主任の醫師は作病を看破する方法あらんことを研究し置きたるが實際其任に當るに及んでは一人の作病者をも見出さず却つて職工の精勵なるに感じたりと

●●●●　死者の吊祭　役員若くは職工にして負傷或は病氣の爲め死亡する時は死亡手當を官給するの外尚は役員より積立てたる補助金を支出し遺族を慰恤し葬式の際には課長を始め職工の末に至る迄成るべく繰合せて會葬するを例となす尚は此に感ずべきの美事は死者の吊祭にして春秋二季に開局以來死亡せし人々の靈を祭ることとなり即ち春は青山の墓地にて神式を以て祭り秋は駒込の吉祥寺にて佛式を以て吊ふ此際には死者の遺族を招きて茶菓を饗し局長を始め役員職工等悉く參拜燒香す死者の靈牌は常に之れを吉祥寺に安置し遺族同僚等は何時にても參詣し得らるゝことゝなしあるが尚は近々奉納金の手續をなし永代の回向を賴む筈なりと而して此靈牌に記されたる人々は今日迄故得能局長を始め五百餘人ありしと云へり又た此費用は豫て補助金中より支出さるゝものにて一文も官給を仰がざる由此吊祭の事も故得能局長の始められたる事にて工場を以て一家となし役員職工を以て家族となしたる同局長の遺志明かに見え工業社會の一美談となすを得べし

●●●●　女工の風儀　三人寄れば姦しと云へる女子を多人數使用することなれば少しく工場の取締りを

怠れば忽ち喧騒を免かれざれども印刷局にては其取締りの能く行届きて男女工の別なく工事の外は私の談話を禁じあれば何れも専心に其業に従事し又た観覧人の来ることあるも之れに眼を注ぐ如きことなし此等は故得能局長の制定したる規則なれども二十年来馴れ来りたれば之れを規則と思ふものなく知らず〳〵其の規に叶ふを得又た新らしく来りたるものは自ら此風に化せられて漸となるあり又た男女の區別に就ては厳然たる取締をなし刷版課の如きは男女工を雑用すれども矢張り其中に區別ありて男女互ひに顔を見合せつゝ仕事をなす如きことなし況して調査課の如き女工を多く使用する所にては男子は只だ監督技手位を見受くるに過ぎず男女工は工場若くは廊下等にて相會する事ありとも談話する事は勿論歸宅の際門外に出ずる時も連立ちて歩ひことを許さゞるなり出入口も男女に依りて區別をなしあれば出入毎に男女顔を見合せ若くは擦合ふごときことなし殊に注意のとゞきたるは女工は便所に行くにも一人にては行かしめず伍長若くは他の工女附添ひ行くなりと尚ほ女工は工場内にて斯くの如く取締らるゝのみならず自宅に在りても不都合のありたる時は直ちに免職さるゝなり或る女工の如きは正月遊びに懇意なる男工を招き歌がたを取りたるに忽ち風紀を紊すものなりと認められ男女工共に免職せられたることありとこは少しく苛酷なる傾きあれども此位にせざれば風紀の維持は六ヶ敷かるべし左れば印刷局に出入する

女工は其風儀を静淑にして毫も猥がましきことなく開局以来今日に至る迄絶えて醜聞を出したることなしと又た職工同志の結婚に就ては餘程のありたるや否をも確かめ正當の結婚あらば相更らず職工として勤務を許せども若し野合等に出つることあれば容赦なく之れを免職するなりと職工同志の結婚は印刷局として餘り喜ばざる方なれば之れを行ふもの甚だ僅少にてヨシ結婚するものありとも男女の何れかゝ退職し夫婦相連れて出勤する如きものなしと

●女工の服裝●　今その一般を説明すればすべて筒袖に袴を着け居れるが普通の女工は白地の金巾にて取締は黒羅紗なり尚ほ等級を示す爲めに左の襟に紺地に白筋の入りたる徽章を着け一等女工には其筋八ツなり以下漸次一筋宛減し居れり又た伍長は別に動章様の物を襟に飾り居れり又た幼年女工は同様赤地に白筋の入りたる徽章を掛らるゝ物にて夏衣は三領冬衣は二領宛與へらるゝ印刷部には此被服を洗濯し若くは補綴する爲めに裁縫室なるものを設けて二名の女工を使用せり女工の髪は總て束髪なるがこは紙幣の如き貴重品を隠掩するを防ぎ萬一の際検査に便なる爲なりと

●取締の嚴重●　印刷局は紙幣の如き貴重品を製造するを以て其取締の嚴重なるは言ふ迄もなく物

品の授受職工の出入にも注意をなし一紙半錢にても門外に持出すを得ざる仕組なり、先づ原料製品等の授受法より說明せんに各室毎に主任ありて物品を受授する際には雙方の主任立會の上之れを行ひ受取りたる主任は之れを取締に渡し取締は又た之れを部下の女工に分配す女工は一人々々に手帳を携へ居りて其受取高に出來高とを記載するなり扨て製品の全く出來したる時は又た以上の順序を重ねて之れを受持の部課に送る毎日就業の終りたる際には課長は部室に就て其日の受渡高と出來高とを檢じ之れを本帳に記載し夫れより役員職工等の退散を許すなり故に本帳を檢すれば原紙幾枚を授受し幾枚を印刷し又た幾枚を製了せしやは一見して知るを得べく若し又た切手一枚にても見出さゝる時は之れを發見する迄は徹夜しても取調べ愈々紛失せしに定まれば課長を始め部下一同夫れ〳〵懲罰に處せらるゝ定めにて曾て二錢の郵便封皮の紛失せし爲め調査課長は五圓の罰俸に處せられたりと

●●●●●●●●

女工の檢身　又た職工の出入に就ては男子は勿論女子にても出入毎に檢身をなす女子の檢身室は出入口の內に在り女工は此處にて一々衣類を脫し傍に設けたる湯屋の棚の如きものに納めたる後湯巻のまゝにて一間ばかりの階子を上り行き其上に衣桁の如きものありて役服を懸けあるを着し夫れより工場に入込むを例となす又た歸宅の際にも同樣二階にて役服を脫し件の階子を降りて自服を脫し歸るものなり此檢身室は厚壁作にて窓は高き所に在れば何れの方よりも窺ふこと能はず又た此處に立會ふものは女工取締のみにて男子は一人も入れしめず即ち女工取締は階子の下に居りて上より降來る女工の擧動に注意し若し怪しき節あれば之れを取調ぶるなり今日の世界には女子に衣類を脫すことは如何がはしく思はるれども二十年來の習慣とて俄かに廢し難く女工も亦た之れを儀式の如く心得て忌み嫌ふものなければ今も尙は行ひ居れりと此檢査法も今日にては左迄必要なけれども何樣人の眼の眩れ安き紙幣等を取扱ふことなれば不正の念慮を斷しめ假令貴重品を盜み得るとも斯る檢査を受くること故到底駄目なりとの觀念を起さしめんとするに過ざされば職工敎育の進むにつれ往々〳〵廢せらるべしと印刷局の檢身法は此の如くなれども大坂造幣局の如きは一層嚴重にて女工は出入毎に衣服を脫して入らしめ先づ最初には髮をさばかしめ然る後水を以て口を濯がしむ斯くなすは口中若くは髮の中に金貨等を隱掩せんことゝを防ぐ爲めなりと尙は甚だしきは同局の便所にして此便所は水を以て洗ひ去るの仕掛となしあれり是れ又た金貨等を呑むことあるも發見し易き故ありと必竟斯業に嚴重ある檢査をあすは一つには女工をして不正の念慮を斷しめ一つには社會の安心を買はん爲めなりとぞ又た印刷局にては自宅より携へ來りたる衣服裝帶等は一々檢査をなし女工自身にて休憩所等へ携へ行くことを禁せり茲に衣服と稱するは多

時は役服許にては寒冷を覺ゆるが故に自宅より衣服を携へ來りて役服と共に局内に置くものを指せしなり印刷局にては萬事に就て斯る注意をおすが故に開局以來切手一枚も門外へ持出されたることゝおもし

●●●●●

活版部の狀況　活版部にて女工のなす仕事は活版及び製本の二種にて女工の總人數は九十餘名に過ぎず活版部の第一は活版室にて此處に働く所の女工は十餘名あり其重なる仕事は鑄造活字の鑄傷を直すに在りて左迄面倒なるものにあらず次には活字の解版、文撰、植字等をなす解版とは前日使用したる活版を解きて之れを活字棚に收むるの仕事、文撰とは原稿に依りて活字棚の活字を拾ひ行く仕事、植字とは文選の拾ひたるものを組みて活版とおすの仕事なり始より女工を使用せし際には解版の仕事にのみ止りしが今日に至りては大ひに進歩し文撰植字等も女工の手のみにて出來る事となりたれども左れども活版部にては夜業の爲めに多數の女工を使用する能はず現今は只だ晝間の仕事にのみ使用し居れり活版室の次は印刷室にて此處に働く所の女工は十餘名あり印刷室にて女工のなす仕事は印刷物の員數等を調査するのみにて畧ぼ印刷部に於ける調査課の仕事に同じ活版室の次は製本室なり此室は殆んど女工專務の室と稱するも不可あく男子は只だ監督の技手位あるに過ぎず製本の仕事は千種萬別にて一々記し難けれども先づ洋本あれば最初一枚の原

紙に筋をつけ之れを折疊みて或は入ページとなし或は十六ページとおし偖て悉く疊み上げたる後其ページを逐ふて之れを重ね其の脊にゴムを附けて針線にて之れを綴るなり右は只た假綴の例あるが尙は本綴には糸を用ひ表紙の附方等も面倒なるが何れ仔細は「製本の女工」を記す時に述ぶべし製本室にて一番骨の折れるものは本を綴る仕事にて器械に據りて絶へず足を動かし居れば隨分辛勞の事なるべし次に面倒なるはページを揃ゆる仕事なり若し一ッ揃へ損へる時は印刷物の全部は滅茶々々となるが故に餘程注意せざる可からず又た次に注意すべき仕事は甲乙兩部の揃ひて一部となる印刷物を取揃ゆる仕事にて甲は甲にて幾千枚も重なり乙は乙にて幾千枚も重なりたるを一枚づゝ取除て甲と乙とを合すことなれば若し誤りて甲若くは乙を二枚づゝも重ねたる時は最初より重ね直して其の何れにて誤りたるやを檢べざる可からず印刷物の枚數を調らぶる仕事假綴の脊にゴムを附ける仕事なぞは誰女にても出來るゝとにて左迄の熟練を要せさるべし原紙を折疊ひ仕事にて熟練なるものは一日に廿六ページ折にて三千五百枚乃至四千枚を折るを得べく本綴即ち糸にて綴る仕事は熟練なるものにて一日千五百部を綴り得べく又た張合即ち甲乙兩部を組合せて一部となす仕事は熟練なるものにて一日平均二萬五千乃至三萬を組合せ得べしと云ふ此製本室に働く所の女工は總數七十餘名あり活版部に志願する女工は製本活版共本人の望みに從へども

印刷局の都合に依りて活版志願の者を製本部へ廻はすことあるべしと女工の取扱其他に就ては先きに記したる印刷部と大差なく賃銭も又た同様なるが活版部にては未だ一等女工二等女工等を見ず三等女工（一日賃金三拾銭）以下のものなりと

●抄紙部の設立　飛鳥山の麓王子停車場の畔に數棟の工場建築列びて烟突の烟不斷の雲を靉かす所あり其入口にあるは印刷局の抄紙部なり抄紙部は明治八年の頃創立せしものにて紙幣公債の如き貴重品の原紙を製造する場所なり最初我國にて紙幣を製造せし際には越前産の紙を用ひ普通の錫版にて印刷せしが製造の粗惡なるより價造の行はれ易く當局者も大ひに痛心し何とか良法もがなとて遂に紙幣に一々印紙を張ることに決し其印紙を外國へ注文せしが其注文品の到着せる頃には廟議又た變じて紙幣は全然外國にて製造せしむることゝなり折角の印紙は何の役にも立たざりし奇談さへありき其後此外國製紙幣も危險ありとの説出で時の紙幣局長たりし故得能良介氏は熱心に内國の製造を主張し貴重品の用紙は日本技術の精髄を集めて萬國に超越するものを造るべしとて遂に明治八年の頃水力の便を謀りて今の地を卜し試驗の爲め製紙工場を設立したるき是れが抄紙部の起原なりける

●紙幣用紙の發明　斯くて得能一局長は内外各國より製紙に關する諸種の材料を蒐集し一人の外國人をも雇はず日本の抄紙工を集めて諸種の試驗をなさしめ幾多の困難をあしたる末明治十年に至りて一種の紙を發明したるが其紙質と云ひ光澤と云ひ日本には曾て見ざりし良品なりしにも之れにて始めて紙幣を作り其後尚ほ種々の工風を積みて今日の如き良好なる紙幣用紙を得るに至りたるなりと抄紙部にて發明したる一種の紙は明治十二年の頃巴里萬國博覽會に出品して賞狀を得たるより偏く外人の間に知られ年々彼國より注文し來るもの尠なからず外國にては重に美術品に用ひ巴里のある劇場にては此紙に筋書を刷りたるに頗ぶる紳士貴女間に持囃され大ひに其聲價を高めたることありと尚ほ抄紙部にては職工の伎倆を奮はしむため餘業として壁紙色紙等を製造せしめたるが是れ又た内外人の賞賛を博し室内の裝飾等に用ひられたるが現今は本業の繁多なるために壁紙色紙等の製造を廢し貴重品の用紙の外は官報用紙電報用紙端書用紙等を製造し居れり

●紙幣用紙の抄造　何れの國を問はず紙幣用紙の抄造は秘密を主とし西洋の如き何事にても器械を用ゆる國柄にても此紙幣用紙のみは今に手抄となしある由にて器械を用ゆるものは米國のみなりと左れば抄紙部にても紙幣抄造所は別に工場を分ち役員と雖も猥りに出入することを能はず尤も紙幣の抄造中にても原料たる三椏を解きて之れを綿の如くなし抄簀に懸くる一段となす迄は秘密

にあらねば局長の許可を得たる後誰人にても観覧し得べし此抄造所の仕事は重に女工の分擔するものにて目下殆んど二百名近さの人員あり之と端書用紙電報用紙等は藁を原料となし器械にて抄造すれば器械方の外は別段人工を要する所なし

●●●●抄紙部の女工　抄紙部には普通女工の外臨時女工習見女工等あり普通女工は印刷局に於ける一般女工の給料を給すれども他の兩女工は賞取の方法を用ひ自分の腕次第にて儲け得らるゝ仕組となりぬ是れ印刷部及び活版部に見ざる事にて抄紙部のみの特別なりとす臨時女工にて本女工に撰抜されたるもの若くは見習女工にて本女工に昇進したるものは普通の給料を支給さる本女工は常に白色筒袖の役服を着すれども他の兩女工は就業中も自服を着用し居れば一見して其區別を知るを得べし臨時女工は其名の示す如く事務の繁多なる際一時雇用するものにて其人員は定かならず多くは近邊の農家より來るものなりとぞ抄紙部中にて尤も多く臨時女工を見受くるは精撰係にて即ち三椏の皮を剝ぐ所なるが此處には殆んど百餘名の女工ありて其中役服を着したるもの十餘名に過ぎず他は何れも臨時若くは見習の女工なり尚は紙幣の抄造所にも臨時女工を使用する所あれども觀覽を禁じあるが故に如何なる仕事をなし居るや明かならず

●●●●極の皮を剝ぐ仕事　抄紙部の工場に入りて第一に見る所は精撰係にて此處に働く所の女工は百餘名なり何れも臨時若くは見習女工にて只だ檢査係に十餘名の本女工あるのみ其重ある仕事は水に浸したる極の皮を檢べて若し黒き外皮の殘りたるものあれば之れを創去る事にてかく創去りたる皮は之れを一束となし檢査係の女工に渡し更らに之れを檢査せしむ尚は別に水桶の中より極を取出し之れを束ね居るものあり之れは全く水仕事なれば冬時なぞは隨分難義ならんと思はる此室は土庭作りにて水さへ四方にこぼれ居れば女工は何れも下駄を穿ちたる儘仕事をなし居れり極の皮には狹さものあれば廣きものあり塵の多さものあれば又た少きものあり仕事の難易一定せざれば賃錢にも區別を設けて仕事の易きものを上等となし仕事の六ヶ敷きものを下等となし其中間に在るものを中等となせり而て上等は一貫目四錢中等は同く四錢四厘下等は同く五錢五厘の定めあるが平均一日に三貫目を選り分け得べしと

●●●●紙料を精撰する仕事　此工場を離れて他の一工場に入れば夥多の女工立列びて場内の竿に掛けたる縮緬のものを檢へ丁寧に其塵を除くものを見る之れは先の精撰係にて撰びたる極を藥品にて煮たる上之れを洗ひ器械にて綿の如くに裂きたる後水力にて晒し之れを絞上たるものにて宛ながら縮の反物を見るが如し尚は此工場にて精撰し其塵を除きたる上再び之れを解て藥品を配合し紙抄場に送る紙抄場にては更らに抄上、壓搾、乾濕、鉋出等の手數を經始めて光澤玲瓏たる紙幣等

の原紙を得るなりと此處に働く所の女工八十名ばかりあり賃金は一貫に就き二錢五厘より七錢五厘にて馴れたるものは高賃の分にて一日二三貫を揚げ得べしと云ふ

●●●

本女工なりと云ふ

●●●●簿記方の仕事　印刷局の簿記方には印刷、活版、抄紙共こと〳〵く女子を用ひ居れり印刷局の簿記はあか〳〵緻密にして一日々々其損益を見るの仕組となしあれば其面倒なること言はん方なし其の代りに此簿記を見れば其日の製品高は勿論此製品に對し費やしたる原料、薬品、賃銭、石炭、雑品等の額をも知るを得べし今其の記職方を略記せば先づ職工の勤怠簿を見て其日の賃金高を計算し次に原料の渡帳を見て其分配額を計算し尚は其次に工場の帳面を見て製品高を調べる順序なりとす左れども製品は製品、原料は原料と夫れ〳〵一定の帳面あるにあらず種々の帳面中より摘出して是れを綜合して計算をなすものにて抄紙部の如きは其の帳面數二十餘通ありと印刷局に於て簿記方を勤むる女工は總計二十名ばかりあり何れも其伎に馴れて算盤を弾くにも又た讀合をなすにも男子恥かしき程なりき記者が參觀したる印刷局中にて第一に感じたるものは何物なりやと問ふものあれば躊躇なく此簿記方なりと答へん女子を簿記方に使用することも故得能局長の創意に係るものにて現今勤つゝある簿記方も初めより簿記の心掛ありたるものにあらず印刷局にて養成し今日の如くなりたるものなるが養成中に根氣の盡き或は他の事情ありて中途より廃したるものも尠からずと云ふ本邦にて女子を簿記方に使用したるは此印刷局が嚆矢あるが追

々商工業の發達につれ他の銀行工場等にても女子を簿記方に使用するに至らん現に大阪の三井銀行にては中川上氏の發案にて金銭の出入方に女子を使用したるが其成績見るべきものありと云へば近々簿記方にも使用さるゝことは決して空望にあらざるべし

●●●●女工の保護　抄紙部に通勤する女工は王子を中心となし東は千住より西は板橋に及び南は小石川白山の邊より北は豊島村に至り近きも十町にあまり遠くは二里に越へたれば朝夕の往來にも危険の虞なきにしもあらざれども印刷局にては憲兵屯所警視廳等と打合せて道筋の保護を依頼しあれば女工が出勤と退出の時間前後には特に最寄りの屯所若くは交番所より憲兵巡査等出でゝ見張りをなし殊に物騒なりと知られたる場所には警戒を施したるにぞ今日まで未だ奇禍に罹りたるものを聞かずと云ふ此保護法も故得能局長の始められたるものにて抄紙部の創立せられたる當時西ケ原より通ひ來たる女工が歸り途にて追剣に出逢ひ衣類を剝取れたることあり其際局長は抄紙部に宿直し居たるが此報を聞より大に驚きて急ぎ車を命じて西ケ原に向たり折しも冬の夜にて雪さへいたく降積みたれば車の輪も雪に埋もれて一歩も進み得ざりしを勵まし〳〵進みて右の追剣の場所に着し女工が救はれたる家を尋ねて其の事情を聞きたる上又も車を飛ばして板橋の警察署に赴き署長に面會し職工と云へば我子も同しきに斯る目に逢ひたりとあつては我心も安からず

君等の盛力にて今夜中に女工を惱ましたる曲者を捕縛せられたしと頼みたれば署長も大ひに驚き
て直ちに巡査を派出せしめ徹夜にて曲者の踪跡を尋ねたるに翌日に至りて之れを捕縛するを得た
り局長は、いたく災難の女工を憐みて新調の衣類を與へ猶ほ幾分か見舞金をも恤みたるが尚ほ又
た斯ることありては不都合なりとて警視廳等とも相談し遂に前に記したる如き保護法を行ひ爾來
二十餘年間一日も怠なく繼續し今日にては如何なる深夜にても安心して往來し得べしとぞ是れ
皆な敌得能局長の厚情より出でしことなりと

●●●●女工の積立金　印刷局にては役員職工の區別なく毎月給料賃銀の幾分を割さて積立しひる制規
なるが女工は男工に比すれば貯蓄の念も深く抄紙部の一部のみにても女工の積立金一萬圓以上あ
り久しく勤めたる女工は一人にて四五百圓を貯蓄し居れる者ありと云ふ抄紙部の女工は近在の農
家等より來るもの多く已れが得たる賃銀にて家計を助くるに及ばざるものなり又其生活の程度も
東京の中央に比すれば簡易なるが故に斯くは多數の金額を貯蓄し得るありと女工は此貯蓄金を以
て家計を補充し嫁入支度を調へる等無益に消費せず抄紙部の如きは農家に育ちし女子の多き事と
て田地を購入するの風行はれ最初は微々たる小百姓なりしも此貯蓄金を以て田地を購ひ今は公民
の資格を得有福に暮らし居るもの尠なからずと其外印刷局の女工となりて一家の困厄を救ひ父

母の心を安んぜしめたる美談もあり其中にて近頃得たる最も新らしきものを左に記さん

●●●●女工の美談　王子抄紙部の女工中に長塚クラと云へるあり姉の某女と共に抄紙部に在勤し多年
の功に依りて取締迄昇進したるが此長塚姉妹の家は王子村に在りて見る蔭もなき迄に零落した
りしを姉妹心を戮せ抄紙部の女工となり勉勵數年の後には家運を挽回し兩親をも安樂に奉養する
に至りたるがクラ女は斯る事情のありたるため嫁入時を過し早や三十路にも近かんとせしに幸
ひ日本橋區傳馬町邊の商家に良緣ありとて媒介するもののありたれば姉にも相談したるに姉は大に
喜びて御身の支度は我れより貢べくしとておのが貯蓄し置きたる五百圓ばかりの金子を出し支度
萬端を調へやりたるにクラ女は黃道吉日を撰びて目出度く傳馬町へ嫁入りたるは四五年前のこ
となりき此商家と云へるは昔時は一廉の大家なりしも不幸にして家族死絶へ番頭たりし人故主の
遺言に依りて暖簾を繼ぎ居たるが何樣不幸の重りし跡とてクラ女の嫁入りたる時にはしたゝか負
債もありて家政頗る困難し居たるがクラ女は夫を扶て家政を整理し身を粉に碎きて働きたるにや
負債も次第に償却し了りて商運いよいよ榮えければ今は數人の雇人をも召使ひていと有福なる
身分となりけるクラ女は我身の今日ある事は抄紙部の賜なりとて朝暮懐忘る事なく何時かは抄
紙部を尋て昔時の禮をも云ばやと思ひしかども家事の暇なき爲に得果さゝりしが去年の春頃少し

の暇を得たれば青山なる故得能局長の墓にも參詣し夫れより王子に廻はりて抄紙部に出で中村部長に逢ひたるに部長もクラ女の出世を聞きて大ひに感心し其心の優れたることを褒たるにクラ女は只だ故局長の御敎訓通りに行ひ居れるものにて何事も局長樣のお蔭なりとし少しも誇る色なく種々の談話をなしたる末いぶせけれども東京へお出の時には必ず我家へ立寄下されたしと述て立歸りたりき其後中村局長は東京に出でたる序に傳馬町に立寄たるに聞きしに優る有福の家にて商賣もなか〳〵繁昌し居れるがクラ女は部長の來訪と聞きて奥より駈出で能こそ入らせ給ひたれとて一間へ通し夫にも紹介せたる後夫婦諸共に待遇しければ部長も昔を忘れぬクラ女が厚意を喜びて今昔の談に時を移したりと尙はクラ女の姉は今に抄紙部に勤務し專ら父母の奉養を勤め居れりと人情紙より薄き世の中に斯る美談語るも聞くも香ばしき心地ぞせる

●●●●

女工の敎育　抑も故得能局長が女工を使用せしは單に經濟上より思ひ立ちたるにあらず女子が從來の境遇を憐み男子の職業中より相當の職業を撰んで此れを修めしめんとの趣意なりしが當時女工を官業に使用するは破天荒の事なれば大藏省邊にては隨分之れを非難するものありしかども得能氏は毅然として所說を變せず續々女工を使用し遂ひに今日の盛大を見るに至れり得能氏が當時女工使用の利益を說きたる要點ありと云ふを聞くに第一女子は其腑力男子に及ばざれども其資性柔和緻密にして疎惰の弊なき事第二女子は感覺鋭敏にして堪能の見込ある事、第三女子の仕事は靜肅に行はれ易き事、第四女子の賃銀は低廉にして怠惰の狀なき事等なりき左れば最初は女工とし云へば貧家の婦人にあらねばあさゝるもの〳〵如く思ひたる人々も後には其誤りを悟りけん抄紙部の如きは近在の農家にて相應の資産を有したる人の娘を持ちたるが宅にありて遊ばすよりは抄紙部へ預ける方が身の爲めよろしとて續々子女を頼み來るものあり一波動きて萬波之れに從ふの道理にて夫れより次第に他に及ぼし競ふて女工たらんことを望み父母も亦た安心して之れを寄越すに至りぬ此父兄の安心と云へる事は女工を使用する人には心掛けざる可からざる事にて故得能局長も常に局員に向ひて「女工は父兄の安心する樣に世話をせねばならぬ父兄が安心すれば世話が行屆いたことが知れる」と語りたりとなん誠に女工使用者に對する格言と謂ふべし

●●●●

女工の募集　印刷局の女工たらんと望む人は自分の志望する所の部內に行きて申込むべし即ち活版、印刷なれば神田橋內の工場、抄紙なれば王子村の工場に行くべし偖て口頭にて志願の由を述ぶれば先づ身體の檢査をなし此檢査に及第せば簡易なる學術の檢査をなす學術檢査に及第せば始めて試驗女工となる此際保證人の連署したる證書を入れしむ保證人は府下に在住するものにて身元確かなるものを要しけるが成るべく印刷局の役員に頼む方便利なるべし年齡は十三才以上な

れば宜敷く又た學術檢査も小學校卒業位の程度なれば指支なし婦人の事なれば最初より工場の玄關へ押懸けて我身の上を談ずることは隨分辛らからんと思はるれば斯る人は先づ役員若くは職工に就て豫め其事を賴み置きたる後出頭すれば宜敷からん近頃は何れの部にても女工の拂底を嘗げ居れば志願の人々は一日も速かに申込むべし

卷烟草の內職

●●●●●●●　烟草を卷く仕事　現今東京市中にて卷烟草を製造する所は岩谷商會を始め二十餘軒あり其の最近の製造高は、殆んど七億萬本に近く內職として此烟草を卷くことは女子の專業に歸し貧民が生計を補ふのみならず山の手邊にては官吏の細君達が良人の留守仕事に之れを營ひの風流行し立派なる內職の一とはなりぬ左れば岩谷商會の如きは山の手の各區即ち麻布、赤坂、麹町、四ツ谷、牛込、小石川等に事務所を設けて原料と製品の受授を便にし事務員は勤るず內職者の宅を廻りて原品を渡し製品を携へ歸るの仕組となせり故に內職者は一步も外へ踏出すことなく座おがら仕事をなすを得べく身分ある人の細君達が此仕事をなすも斯る便利あるが故ならん偖て此仕事は至つて簡易にして別段に器械も入らず只だ眞鍮製の卷管一本あれば十分あり又た仕事中にお客の來ることあるも其儘箱の中へ仕舞置けば仕事をなし居たる跡も見へず又た其人の歸りたる後箱を開けば直樣仕事に取懸り得べし初めて仕事に取懸りたる時は烟草の分量等をも手加減に定めがたく卷方も緩くなり又た硬くありて思ふ樣に行かず且つ手を省きても宜敷き所に馬鹿念を入るゝなどの事あるより一日の上り高百本內外に過ぎざるも半ケ月ばかりを經れば三百本位を卷かれる樣になり段々進みて三百本より四百本とあり極熟練したる者は一日にて千本を卷き得べしと又た初心の內は烟草の取扱にも馴れざれば兎角粉を出し七百本に卷くべき原料を五百本しか卷けざる事あり其の粉子となりたる分は製造者の損あれども稽古中は之れを忍びて別に苦情等は言はずと云ふ

●●●●●●●　卷烟草の賃錢　は其因草の種類に依りて多少の差違あれども大抵左の如し

の谷町四谷の鮫ヶ橋なぞに住む人は勞働者の家族多ければ其の要求

錢を受取るの習慣となれり左れども巻烟草の内職をなすものには此種の人は至て小なしとぞ各烟草製造者より内職者に向つて拂渡す賃錢は毎月餘程の多額に上りけるが岩谷商會のみにても此頃拂出す賃錢は毎月二百五十圓ありと梅雨の時は煙草屋の正月と云ふべき折りにて一年中最閑の時なるに尚ほ此賃錢を拂出し居れば其多時繁忙の際には隨分多額の支拂をなすならん

仕事の分類　巻煙草の仕事は頗る輕便にて紙を張る事と口紙を入れる事と煙草を込める事の外に出でず右の内にて稍々面倒なるは煙草を込める事にて此れは十五六才以上ならでは六ヶ敷からん紙を張る事と口紙を入れる事は十二三才の小供にても少し熟錬すれば指支なし現に岩谷商會の煙草を巻き居る人にて母子三人にて毎月八圓位の賃錢を得るものありと巻煙草の仕事は年中斷ゆる時なく只だ梅雨中は煙草の濕るために休業することあれども是れも成るべく繼續し内職者の手を明させざる樣に注意し岩谷商會の如きは明治十一年創立以來梅雨のために休業せしは最長二週間にて他は二三日間に過ぎざりしと梅雨にても晴天の打續きたる年は休業するの必要なし此記事を讀んで巻煙草の内職をなさんと思ふ人は岩谷なり千葉なり最寄の事務所に申込めば宜敷く事務所にて其の經驗ありや否を問ひ若し初心あれば事務所より近所に居る熟練者を紹介し若くは教師を差遣して教ゆるの手續ありと云ふ

巻烟草の元祖　府下にて初めて巻烟草の製造を創めたるは麹町區隼町の土田某にて實に明治十年の頃なりき翌十一年には岩谷商會の製造所出來し其後諸方にて巻烟草の製造を起せしものあるも多くは失敗に歸し其事業を全ふするもの尠なかりしが一昨年日清戰爭以來は巻烟草の需用頓に增加したるため再び製造所の勃興を見今日にては二十餘軒の多きに上れり左れども此内にて規則的に工場の手續を踐みて其筋の認可を得たるものは五六に過ぎず他は多く自宅にて製造し其内職者の要求に應じ持出す所の高も少なし今府下にて有名なる製造所を擧ぐれば銀座の岩谷、千葉の兩家、四谷の木村、堀留町の若松、小石川の今村等なるが中にも岩谷は地方賣を以て知られ千葉は府下向を以て評判よく今村は陸軍の御用を以て有名なる等夫れ〳〵特色ありといふ

**●●●

し

	一等	二等	三等
一號	十八錢	同	同
二號	同	同	同
五號	十四錢	十三錢	十二錢
四號	十三錢	十二錢	十一錢
五號	十二錢	十錢	九錢

右は巻煙草の原料となるべきもの〻賃金なるが尚ほ刻煙草となるべきもの〻賃金はなか〳〵高額にして左表に示すが如し

	一等	二等	三等
小高	二十四錢	二十二錢	二十錢
福高	二十六錢	二十四錢	二十二錢
大高	三十錢	二十八錢	二十六錢
金高	三十四錢	三十二錢	三十錢

又た砂掃の賃錢は一貫目三錢より六錢位迄にて葉捲へをなす人自身にて砂掃をなせば右の表に示す如き賃錢を得れども砂掃をおしたる煙草を揃ゆるのみには砂掃賃だけを扣除せざる可からず假

令ば一號の葉捲賃は十八錢なれども若し砂掃を他に頼む時は三錢丈を扣除したるもの即ち十五錢丈を受取る都合となるべし此仕事をなす人は重に日本橋芝京橋等にて山の手には尠なし尤も精撰を要すべき高賃の仕事は熟練者ならでは出來ざれば内職者には渡さず工場に通勤する女工に任せり現今岩谷商會の工場に通勤する此種の女工は百餘名あり何も三十路餘にて働き人の女房らしきもの多し尚此仕事は煙草を巻くよりは六敷きものにて先最初は砂掃をなし三ヶ月ばかりを經て葉捲に移る順序なるが夫れより三等女工となり三等女工に進み遂に一等女工となる其間少くとも二ヶ年を費すべし砂掃葉捲の内職をなす人には巻煙草と同じく矢張り原葉の受授を周旋するものあれば自宅に居坐りたる儘にて仕事をなすを得べし

尚ほ此外巻煙草の包を捲へ又た印紙を貼る等の仕事部類にはあらず此等の仕事は小供にて一日の賃錢は四錢より十一錢迄なるが岩谷商會の工場にては七八才の小供さへ見受けたりき煙草を巻く仕事も工場へ通勤するものは百目に就き二厘高の賃錢を支拂ふ由にて岩谷商會には通勤の工女百餘名ありとぞ

メリヤス工女

●●●●●●●●メリヤスの製造　我々が使用するメリヤス製のシャツ、ズボン手袋、靴下等が如何なる方法に依りて製造せらるゝやを語るは頗る趣味ある談にして又た日本に於て製造せらるゝメリヤスが如何なる點にまで發達せるやを知るは工業者のために有益なりと信ず抑も我國にて蒸汽力を假りてメリヤス製造の業を創めたるは明治十八九年の頃本所業平橋際に起りたるメリヤス製造所を嚆矢とおし之れに次ぐものは明治廿四年頃王子村に起りたる日本メリヤス會社なりとす日本メリヤス會社は精良なるメリヤスを製し舶來品を圍絶せんとするの目的を以て起りたるものなれやも最初は事業兎角思はしからず社運殆んど旦夕に迫りたることさへありしに明治廿七年來は一陽來復し製品の賣行非常に宜しく需用却つて供給に超ゆるの好況を呈し今は器械の欠乏と工場の狹隘を告ぐるに至りたれば更らに資本を增加して新規の器械を購入し工場をも擴張することゝなりぬ是れ一に世間の好景氣に連れ需用の度の增したるに依るべく又た一には製品の進歩して內外の好評を博したるが故なるべく其原因は樣々あれやも技師職工等の伎倆進歩し舶來品に劣らざるものを作り出すに至りたることと與つて力ありと言ふべし而してメリヤスの製造は多く女子に依りて助けらるれば其職工の伎倆と稱するものは全く女工の伎倆と云ふも不可なからん偖て今日製造する所のメリヤスは重に絹製にて內外商館の注文に依りて製造するものなるが各商館は更らに之れ

を亞米利加、英吉利、獨逸等に向けて輸出する由左れはメリヤスの輸價は自ら外國にも知られけん昨年補鹽斯德に在る米國の一商館はメリヤス會社に向けて見本を注文し來りたるを以て會社は見本に添へて五六百圓の品を送りたるに商館の氣に叶ひけん忽ち再注文を受けたるが本年も引續きて輸送する筈なりと又た先頃濠洲より來りたる外商はメリヤス會社の品を見て非常に賞贊し見本として數種の品を携へ歸りたりと尙ほ內地に於ける需用も著しく增加し昔時はシャツ、ズボン等の外に使用せざりしものゝ今は日本風の襦袢に作り或は衣類となしけるが大學病院などにては嬰兒の衣類病人の寢衣などには裏毛メリヤスヲ用ゆるが第一ありとの說をなす人あり世間にても段々此說を實行し此頃にては反物の儘賣れ行くに至りたりと

●●●●●●●●メリヤス女工の仕事　は種々あれやも之れを大別すれば原料の糸を取る事メリヤスを織る事同しく仕上くる事の三種に過ぎず而して糸取及び織方の仕事は重に蒸氣力を用ゆるか故に人工を要すること少なく仕上の仕事には單簡なる器械を用ゆるか故に人工を要すること多し今日本メリヤス會社の工場に就て此仕事の區分を說明せんに先づ最初の糸取は器械の力を假りて綛の糸を管に卷き直す仕事にて工女は只だ切れたる糸を繋ぐ迄なれば子供にて宜敷くメリヤス會社にては此仕事のため十二三才の子供五十餘名を使用せり次の織方には平織、丸口織、平口織、靴下織、手袋

織等の區別あれども其最も多く織出すものは平口織にてメリヤス會社には此仕事の工女八十餘名あり平口器械は普通のメリヤスを織出すものにて織るに從ひ自ら上部の方へ卷上る搆造あり工女は絶ゑず織出る所のメリヤスに注意し若し器械の針の折れたる時は之れを補綴するなりメリヤスは器械縫と同じく一たび綻ふれば何處迄も綻ぶものなればたる時は之れを補綴するなりメリヤスは器械縫と同じく一たび綻ふれば何處迄も綻ぶものなれば工女は織地の損せざる樣に注意すること肝要なりと平織器械はシャツズボン下靴下なぞを形の儘に織出ものなるか之は普通の機の如く横へ〳〵と織出るものなりき其他の器械は大抵大同小異あれば此に畧す

●●●

る所は本所區にして二葉町表町邊には數軒の工場あり各十數臺の器械を据え多數の職工を使用し居れるが其器械は重に平口織若くは靴下織にて之れを運轉するものは男子なれども原料糸を取扱ひ或は織方の手傳をなすものは悉く女子なりき此等の工場は多くメリヤス問屋の下織をなすものにて中にはメリヤス問屋より器械を貸付けて織らしむるものありと尚ほ此工場の外一臺若くは二臺の器械を据え内職として之れを營むものは數ふるに遑あらず内職者は何れも横山町邊のメリヤス問屋と連絡を通じ原料を受取り來りて之れを織上げ其の手間賃を受取るの習慣となれりとメリヤスの内職はなか〳〵面白ろきものにて一臺の平口器械あれば三人位は樂に生活し得べしと此器械の代價は舶來なれば二百圓ばかりなれども近頃は大坂にて製造せられたるものにて五十圓位のものもありと云ふ

●●●

ヤス會社の如きは工場にて裁縫の間に合はざる爲製品の七分通は東京に持出して裁縫せしめ又堀川日リヤス工場の如きも年々二萬ダース以上の製品を下職の裁縫方に頼み居れりと云へりメリヤス裁縫の下職者は本所邊に多く就中龜澤町の吉川と云るは堀川工場の製品を引受けて頗る手廣くなし居れるが尚ほ日本メリヤス會社も同職の横網町に出張所を建築中にて成功の上は製品の販賣を兼ね內職者の便利をも謀る筈ありと

●●●●●●●●●●

メリヤス裁縫の附屬業　メリヤスの裁縫方には其附屬業とも稱すべきボタンの穴を明くる仕事あり之れは裁縫方に於て引受くるものにて其賃錢は一ダースに就き四五錢なりとすシャツの穴は一枚に就き三ケ所あれば一ダースを仕上ぐるには三十六ケ所の穴を明くる都合となるべし此仕事は器械の力を假らず全く人口のみなれば一日精々二ダース位しか出來ずヨシ二ダース出來るとするも其賃錢は僅々十錢位に過ぎざれば大人の仕事としては引合ふものにあらず故に何れの內職者にても家內に子供あれば其子供を用ひ子供のなきものは近所の小娘などを頼みて用を達し居れりと尤もボタンの穴を明ける器械にして近頃西洋より渡りたるものあれども代價の高きために未だ行渡り居らず只だ日本メリヤス會社に一二臺を据付けあり此器械は一日に千個の穴を明け得るの豫定なれども工女の取扱に馴れざるため此頃は一日十ダース（三百六十個）の穴位しか仕上げ得ず

ず之を今此器械を內職者の宅に据付ければ一日十ダースとするも四五十錢の賃錢を得らるべく斯くの如くなれば靴下職、裁縫等にも劣らざる仕事となるべし此器械は舶來のみにて一臺二百圓なるが若し日本にて製作するとせば半額にて出來上るべし織方器械と云ひ靴下器械と云ひ何れも我國にて製作せらるれば此ボタン器械も遠からざる間に弘まるに至らん尚ほ此の外糸繰及び仕上の兩內職あり糸繰は原料の糸を枠に取直す仕事にて其賃錢は木綿糸一枠五厘瓦斯糸同七厘毛糸同一錢の定めなり仕上とは其名の示す如く靴下若くはシャツ等を熨して商標等を押す仕事なるが之は一般に男子の職業となり居れば此に解說を畧す

●●●●●●●●●●

問屋と內職者の關係　メリヤス問屋中には舶來品を取扱ふものと和製を取扱ふものと分れ居るのみならず尚ほシャツ、ヅボン下を取扱ふものと靴下を取扱ふものと分れ居れば內職者は自分のなさんとする仕事に從ひて其問屋を撰ばざる可からず今市中に於ける重なるメリヤス問屋を揭ぐれば

日本橋本町　堀川商店
日本橋橘町　鈴木商店
日本橋橫山町　田村商店
神田連雀町　岡本商店
日本橋橫山町　清水商店
京橋南傳馬町　吉田商店
日本橋橫山町　高見澤商店
本鄉春木町　万木商店

等にて其中靴下專門の商處は高見澤のみあれども尙ほ他の商店中にもシャツ、ヅボン下と共に靴下の取扱をなすものあり又たメリヤスの問屋にして工場を兼有するものは

本所表町　吉田工場
下谷竹町　田村工場
本所中之鄕　堀川工場
小石川久方町　高見澤工場

等なるが尙ほ此外横山町の清水商店、橘町の篠原商店の如きも工場類似のものを有し盛んに製造し居りと又た工場のみを有し問屋の注文を引受けて製造し居れるものは所々にあれども就中靴下製造を以て有名なるものは目黒村の齋藤工場なりと云へりメリヤスの事業は近年著しく發達し日本メリヤス會社は工場擴張の計畫をなし堀川工場の如きは晝夜兼業をなすも尙ほ製品の間に合はざる有樣なるが人力を以て器械を運轉する工場も亦た繁昌し僅々五十餘臺に過ぎざりし瑞西器械（人の手にて廻はすメリヤスの器械なり）は一昨年來非常に增加し今日にては百五六十臺の多きに及びぬ今其の盛況を証するため市中に於けるメリヤス營業者を數ふれば

日本橋區	五十二人	淺草區	十三人
神田區	六人	下谷區	四人
本鄕區	三人	芝區	四人
京橋區	二人	深川區	三人
		四谷區	一人

即ち合計二百十五人なるが此外部を合すれば餘程の多數となるべく且つ此統計は昨年末の調なれば今日にては多少の增加をなし居れり右の中にて日本橋、京橋等に居るものは重に問屋なれども其他には製造者も雜り居れり就中本所の如きは悉く製造者ばかりと云ふも不可なし

メリヤス事業の前途　何事にても先の見えたる仕事は張合のなきものにて前途の望あればこそ勤勉の心も起るなれメリヤスの前途多望なることは既に說きたれども尙ほ其の事實を証せんため に其の實況の一般を語らん抑も東京に於てメリヤス製造業の起りたるは明治三四年の頃にて今の衛生メリヤスの本舖田村喜三郎氏の始めたるなり當時の器械は不完全にして殆んど玩具に類似したるが明治七八年の頃に至りて綿織器械の輸入されしより此に其面目を一新し製品の需用日を逐ふて進みたりなれども尙ほ其の大部は輸入メリヤスを仰ぎて西南戰爭の際あやには多く船次の入品と競爭する能はざりしが明治十八九年の頃本所業平橋際に睦合社のメリヤス製造所起り尙ほ二十四年頃王子村に日本メリヤス會社の起りたるより大ひに外品と競爭するを得今日にては殆んと外品を驅逐し其の內地に在るものは一分位に過ぎず他は悉く和製の領分となしぬ又た日清戰爭の際陸海軍にて使用したるメリヤスは悉く東京にて製造したるものを用ひたりと全國にて

リヤス事業の盛んあるは大阪にして重に下等物を製造せり東京は大坂に比すれば製造高は尠なけれども重に上等物を製造する故に價格に於ては大ひに優る所あり尚ほ名古屋にても近頃メリヤス會社を起したるものありと此等の製造所中蒸氣力を用ゆるものは東京にては日本メリヤス堀川工場の一箇所大坂にては石井工場一ケ所なるか其他は何れも瑞西器械を用ひ人力を以て運轉し居れりと左れども事業の進歩するに從ひ蒸氣力の工場勃興すへけれは此事業の前途はます〳〵多望なるべし

●●●

工にて多數の仕事をなし得るに至りたる原因は言ふ迄もなく器械發明の賜にして就中米人グート氏が發明せし製綱器械は大に斯業の面目を一新し以て今日の進歩を來したるあり而してグート氏は是が爲めに非常の利益を得て製綱大王の名を博するに至りたりと此グード器械は從來の器械の如く麻糸を延長したる儘綯り行くにあらず從つて綯れば從つて卷付くの仕組なるを以て其の製造上の手數を省くのみならず製綱に特有なりし綱長き工場をして不要に歸せしめ大ひに就業上に便益を與へたりと此器械は幾千尺の太綱にても連續せるまゝ造り出さるゝものにして製綱會社にて此器械に依り曾て石油開墾用の爲めに三千尺の綱を造りたることありと右は只だ綱を製するの器械なれども此外綱の下 捕 として麻糸をつなぎ若くは綯る所の仕事ありて是にも同じく器械を使用せり而て製綱の仕中事にて女子の關係し居るものは此麻糸をつなぎ若くは綯る所の仕事なるを以て是れより其の器械の効用と女工の 働 方とを示さん

●●●●●●麻糸の紡綱　製綱の原料たる麻糸が如何にして綯るとかを說明する前に當り て小しく此麻糸の事を辨明し置くの必要あり製綱會社にて使用する麻糸は多くマニラの輸入麻にして間々日本產の大麻を用ゆることなり輸入麻は其光澤に於て又た彈力に於て日本產に優るのみならず其長さの點に於ても日本產に越へ其最も長きものは一丈に餘るものありと世界中にて最も好良なる麻を產するは比律賓群島にて同地の最良品には殆んどテグスを欺くばかりのものありと彼の文久年間英國の軍艦が鹿兒島を侵し狼狽の餘り網具等を打捨てたる儘遁げ歸りたるとあり土地の漁師等は其の網具を拾ひ上げて光澤の美麗なるに驚き西洋人はエライものぢやテグスで綱を拵へるなぞゝ騒ぎたるが是れぞマニラの上等品にて作りたる綱にて當時は海外の事情をも知らざりし故斯くは騒ぎたるなりと日本の麻は野州を以て本場となし年々多少の產額あれども未だ製綱の原料となすほどに至らず又た日本麻の中には製綱器械に上る能はざるものありと云ふ西洋麻の特色は種々あれども其質のサラ〳〵として紛糾の憂なきこと正しく其一なるべし

●●●●●●麻を繫ぐ器械　製綱場にて女工の第一になす仕事は麻を繫ぐ器械を取扱ふことなり器械の取扱ひと云へば大層なれども器械は蒸氣力を以て自ら廻轉するか故に女工は只だ器械の介添をなすに過ぎず亂れに亂れたる物の儘に引かるゝ麻糸も此器械にかけられては櫛の齒にて解たる如く白髮よりも細くなりて幾百尺となく繫り行く樣宛ながら灑の白糸の流るゝ如く麻糸なりと思はれざるはぜなり是れ西洋麻は其の質のサラ〳〵となり居る故に斯くの如く解け易きものなりと次にハベンドゝネヒンークチルと云ふ器械あり是れは麻糸と綯る器械にして繫ぎ器械にかけたる麻糸を此器械に移せは 自ら はぜ け 自ら綯れ行くものにて女工は只だ器械の運轉を注意し縫れんと

する麻あれば之れを解く迄あり此器械には猶逸式と亜米利加式とある由なれども素人眼には其の區別を見出しがたし此器械一臺に付女工一人の割合にて其の働き上ぐる所の麻糸は一時間に二百ポンドなりと云ふ次にハンドスヒーフヂルと云ふ器械あり之れは同く麻糸を綯る器械なれどもヘンプトに比すれは人工を要すること多く即ちヘンプトにては自らはぜけて自ら綯れ行けども此器械にては麻糸を綯りて之れをはつらかすには人工を要するなり女工は器械を離れたる所に腰打掛て器械の運轉するに從ひ腰に纏ひたる麻糸をはつらかし行くこと猶ほ風の止るにつれて其の糸を出す如くなせば器械は之れに比すれは面倒なれども原料の麻に依りてはハンプトに上らざるさへ此の器械を用ゆるなりと總して製綱場に從事する女工の仕事は其の器械の搆造より就業の模様迄器械紡績に異ならねども紡績の如く綿屑の飛散せる丈か此仕事の長所とも稱すべし

●●●●製綱女工の賃錢　製綱會社にては女工を器械と人工の二種に區別し麻を繋く器械及ヘンドスヒンークネルに從事するものを器械女工と稱しハンドスヒンークネルに從事するものを人工と呼なり是れハンドは器械よりも寧ろ人工を勞すること多き故なるべし目下製綱會社に就業する女工は器械卅二人手工廿二人にて多くは附近の女子なれども中には廣島地方より來り居るものなりと女工の賃錢は器械と人工に依り差異あり器械の女工は只だ器械の介添をなす迄にて別に熟練を要せされども人工は之れに反し其の成品の良否は一つに女工の巧拙に依るものにて今日にても未だ思はぬの熟練者なしといへり左れば賃錢の如きも人工は器械よりも高く即ち器械は日給十錢より十五錢迄の間にあれども人工は十八錢迄なりと云ふ尤も此十八錢と云ふは最高の給料にあらず今日の女工は何れも修練中なれば他日其伎の熟するを待つて相當の賃錢を與ふる豫定なりと製綱會社の仕事は晝夜兼業にて目下は午前午後とも七時を以て交代期となせり休暇は一日と二十六日の兩日なり賞與は毎期決算の際行ふ者にて皆勤若くは精勤の者には相應の金額を贈るの定めなり尚ほ會社の搆内には寄宿舍の設ありて遠來女工の便利を謀れり寄宿舍の細則は他の工場にて見る所に異らねば之れを畧す

毛糸編物

●●●●美術的編物　西洋より輸入されたる物品にして日本人の手に渡りたる後日本的意匠を加へ却つて原品に優るものを作ることあり毛糸編物の如きは正しく其一なり毛糸細工は云ふ迄もなく西洋より來りたるものにて今より十五六年前ボツ〳〵橫濱邊に流行し基督教の女學校等にて之れを教

授したることあり當時彼地より渡りたるもの度脈留、手袋、靴下類にて且つ其色合も黒又は白の外は樺色或は肉色位に止りしかば之れを摸擬したる和製も此糸を用ひて二三の種類を作るに過ぎざりき然るに明治二十二三年の頃我國にて毛糸の染法を發明し如何なる色合にても自由に染めらるゝに至りたれば此色糸を使用し輸入品に見ざる新案を工風し頭巾にまれ涎掛にまれ全く日本的のものを作りたるが是れとて初めは巧みならざりしも日を追ふて進歩し今日にては彼の錦織若くは繻珍の如く毛糸細工の地に種々の書摸様を編出し或は毛糸を以て花鳥類を形の盛に編むに至り又此編方は涎掛、巾着、袋物類に應用するものにて其單純なるものは國旗或は花等に過ぎざれども其複雑なるものに至りては數十種の色糸を用ひ或は蓬萊の鶴龜を模し或は落花流水の閑情を寫し其の意匠の斬新なる頗る見るべきものあり此等の細工物中には既に農商務省の意匠登錄を受けたるものあり此毛糸細工が其美しくして巧みなることは素人の眼にも爭ふべからず又た毛糸問屋にても此種の細工物を專ら美術編物と稱し居れり

●編物の傳授　毛糸の編物は箸の如き一本の棒を用ひて其手の動かし方と目の出し方に依り或は涎掛ともなり頭巾ともなり種々のものを作り出すものにて文字にては到底其の仕方を說明し難ければ只だ其の大要を記るさんに毛糸の器械に三種あり一を引懸棒と云ひ即ち牛骨にて製したる箸

の如きもの一を四本棒と呼び蝙蝠傘の骨を切りたる如きもの他の一は模形なり偖て引懸棒にて出來る細工は帽子、頭巾、涎掛、巾着、肘突等にて四本棒のものは「シャツ」手袋、靴下類なり模形とは寸法の定りたるものを編む時に用ゆるものにてランプ臺花臺等のスクを作る時なぞに必要なりと云ふ又た毛糸の編方には種々あれども之れを大別すれば帽子編、長編の二種となる此二ツの用ゆると云ふ如き定りなし最初編方を學ぶものは帽子編より始めて長編に入るなり此二ツの編方さへ心得居れば如何なる六ケ敷き仕事にても出來ざるものなしと雖も此外笹編蕗編なぞ云ふ編方あれども此は其形に依りて稱へたるものにて根元は帽子編或は長編より出で少しく工風を廻らしたるものなりと

●毛糸編物の內職　技藝としての毛糸編物は斯の如く進み居れども職業としてはメリヤスの盛なるに如かず且つ毛糸細工には別に器械を要せざる故工場の設けなく全く內職の一部となれり毛糸の內職もメリヤスの內職と同じく毛糸問屋より原料を受け來りて製品となし其手間賃を受くるものなるが東京市中にて毛糸の專門問屋と稱するものなく何れも、メリヤスの問屋を兼ね居れるが其中にて重に毛糸を取扱ふ店は日本橋區葺屋町の石井商店同區田所町の金子商店等にて尙は横山

町邊に二三軒の問屋あると云へり此等の問屋は直接原料を內職者に渡さず矢張り下職あるものあり て問屋の注文を受負ひ其者より更らに內職者の手に配付するなり目下市中にて糸毛編物の內職 をなすものは石井商店の分のみにても五百餘軒ありと云へば其他各問屋の分を尋ぬれば三四千軒 にも上るべし毛糸の編物は冬時に必要なる物なれば夏季は全く不捌にて秋風の立初る九月頃より ボツ〳〵と賣行を例とせり尤も北海道靑森邊には夏季にても相應の賣行ありと云へば毛糸の內職 も冬季には頗る繁昌なれ共夏季は休業同樣となる事あり從て賃金の如きも不同にて夏季は冬季の 半額位に低減せらるゝことありと云へども石井商店の如きは諸方よりの注文多き故年中休業する が如きことなしと毛糸編物の賃金は一ダース幾許にて計算するものと百日幾許にて計算するもの とあり初心の者は兎角原料を濫費する嫌れある故ダース計算を用ひ熟練なるものは細工に念を入 るゝ故目方計算を用ゆるなりと又た毛糸細工は千種万別ありて頭巾のみにても殆んど十種に近く 涎掛の如きも二十餘種あり左れば其の賃金の定めも頭巾なれば幾許涎掛なれば幾許と數ふる能は ず只だ其大體を掲ぐれば靴下は一ダース七八錢より十錢位にて手袋は一ダース八九錢なり其他頭 巾涎掛等は其細工に依りて賃銀の高下あれども其最も高きものは一ダース二圓位のものなりと靴 下手袋類は一日大抵一ダース位を仕上げ得れども上等の仕事は極めて熟練なるものにて一ダース

に四日位を費すへしと

●●●●●●●●毛糸編物の傳習所　毛糸細工は一種の技藝なれ さゝる可からず尙ほ其技に達せんには四五年の星霜を要すべし今日上等の細工をなし一ダース二 圓位の賃錢を得るものは皆四五年を毛糸のみに送りたる老功者なりと尤も毛糸編物中にても簡易 なるものは見覺へに覺ゆれども這は只だ覺ゆると云ふ迄にて實際の役には立たず又た斯る方法に て學びたる人は所謂杓子定規なれば新なる細工の出づる時は如何ともなしがたし左れば實際毛糸 編物を學びて其技に達せんとする人は熟練者に付きて傳習を受くるの必要あるべし偖て市中にて 毛糸編物を敎ゆる場所は諸處にあれども學校の組織となり居れるものは一ッ橋通の共立女子職 業學校のみなりき此學校の事は後に詳記する筈なれど先づ其中にて編物に關係ある概要を掲れば 職業學校にて敎ゆる編物は單に毛糸のみに限らず絹糸木綿糸を以て靴下、帽子、肩掛、襯衣類を 編ひの方法を敎へ旁ら子供及び婦人の帽子に裝飾を施すの業をも修めしむるなり而して其卒業の 期限は年長者なれば二ケ年年少者なれば三ケ年かゝりとす編物の一日や二日にて覺えられさること は之れにても知るへし尙ほ此職業學校の外高等女學校或は高等小學校にて餘課として敎授する所 あり又た普通の家にて「毛糸編物敎授」「毛糸編物見習所」なと稱する看板を掲けたるものを見受け

ぬ學校には一定の授業料あり普通の家はまち〳〵にて定りなけれども大概は先づ一ケ月三十錢より五十錢迄なりと普通の傳習所中には下職を兼ぬ居れるものあれば内職をなさんとする人は其家に就きて傳習を受くれば種々の便宜あるべしと

●●●●●●●●毛糸細工の應用　は頗る廣くシャツ、手袋、肩掛類の用あり頭巾、涎掛、巾着類の用あり左れば一般の娘達にて此技の一通りを心得居れば他日人の妻となり又た母となりたる時の用意となるべく上流社會の婦人達にて此技を覺え居れば消閑の助けとなるのみならず大いに世益となるとあるべし且つ之れを仕事の性質より考ふるも器械の不用なる點と云ひ原料の美しき點と云ひ上流社會の遊仕事として作られたるもの〻如し又た婦人の小さき胸にて新らしき意匠を考案し美しき指先にてさま〴〵の形狀を編み行くは又となき娯みにて彼の花を挿み畫を描くにも優りたる趣味あるべく坊くして作りたる品物を知巳の人々に贈與し或は慈善會に出品して孤獨に恤みなば其の樂み如何ばかりぞや況して良人の爲めに手袋を編み愛兒のために頭巾を作る如きは貴賤上下の差別なく婦人唯一の樂みなること言ふ迄もなし左れば毛糸編物は内職として之れを營まざるとも尚は婦人必須の仕事として之れを學ぶの必要あり今日此仕事の各地に流行する所以又た此理由に外ならずと云ふ

ハンケチの刺縫

●●●●●●●●ハンケチの輸出　我々が日常使用する木綿のハンケチは悉く輸入品にて和製にては却つて高價となる由なるが之れに反し絹製のハンケチ即ち羽二重物は日本にて製造し外國に輸出するもの多く市中にて專ら此羽二重物を取扱ふ店は金六町の菅川商店三十間堀の堀越商會等なるが横濱にもハンケチ專門の取引店ありと云ふ此絹製ハンケチは羽二重を裁ちて其四邊を綴りたるものにて一時は羽二重地に色糸を用ひ花鳥などの摸樣を刺縫したるもの流行したれども此頃は全く廢りて只だ白糸にて四邊を綴りたるものゝみとなれりと此ハンケチは重に外國に輸出さるゝものなれば貿易上の變動に依て其影響を受ること尠なからず貿易の景氣好き時には盛なれども景氣の惡しき時には火の消えたる如き有樣となりて内職者は勿論問屋も休業となることありと何樣原料の高き品物なれば賣れ行のあき時に積み置く譯に行かず從つて内職者に渡す原料の拂底するに至るなりさへ拂へず遂に破產等をなすなりと

●●●●●●●●ハンカチの内職　ハンケチの刺縫も毛糸に續きたる上品の職業にて器械は木製の縫枠一個あれ

ば十分なり此仕事は一寸と見れば出來易さ樣なれども熟練に至るにはなか〳〵困難なり初めは針の縫目の揃はず此處彼處引つりて甚だ見惰けれども追々馴るゝに從ひて縫目も美くしく揃ひてミシン縫の如くなるなりと左れば最初より問屋の品を扱ふ事は困難にて先づ木綿地に就て五六度も試驗をなし愈々大丈夫と思ひたる後絹地に取掛るべし尤も裁縫の上手なる人は左る事をなさずとも直ちに絹地に取掛ることを得べし此內職も矢張り下職ありて問屋の品を受負ひ夫れより內職者に配付するものなるが此下職者は各所到る所にあれども最も盛んなる所は下谷なりと云ふ下職者の宅には枠等も備へ付けあれば內職者は先づ下職者に就て傳授を受くること得策なるべしハンケチの下職者はなか〳〵必配なるものにて其品物を汚したる時は勿論刺縫方の惡しき時にても夫れ〳〵問屋より賃金を取らるゝものにて多く取扱ひつゝある品物の中には是非汚れものゝ出づべく又た刺縫の惡しきものありて飛んだ迷惑を蒙ることありと現に記者の知人にて某ハンケチ問屋の下職をなし居たるものありしに內職者の仕事の惡かりしため製品は忽ちべケとなりて問屋より仕賠償金を出だすか然らざれば原料を買受くべしと談ぜられたるが內職者には既に賃錢を渡し了りて品物の惡しかりとて今更ら取返す譯に行かず詰り賃錢の自腹を切りたる上尙ほ問屋へ償金を出だし夫がために前日儲け置たる金員をも失ひ是非なく困却をなしたる由知人自身が物語りたり

●●●●●ハンケチの問屋　本邦にて絹製のハンケチを創めたる地は橫濱にして其事業の盛なる亦た此地に越ゑたるなし目下橫濱に於けるハンケチの問屋は二十餘軒あり而してハンケチ營業者は一個の組合を組織し其組合員は二百餘名の多きに上りぬ東京にて問屋と稱すべきものは先きに記したる菅川、堀越の兩商店に過ぎず而して其下職者は菅川商店に二十餘軒堀越商店に十餘軒あり其他全國に於て此事業を營み居れるものおし橫濱は土地狹隘なるを以て製品は之れを附近の田舍に持出して製造せしめけるが就中小田原地方の如きは其製品を受負ふもの多く小田原市中は殆んど戶毎に此內職を營み居れりと言ふも不可なき盛況なりとハンケチ製造の盛んなるは時季三月頃より十月頃迄にて其最も盛んなる時には一日の製造高殆んど十萬枚に及びけるが其賦合は東京三萬枚橫濱五萬枚小田原一萬枚位なりとハンケチの輸出は貿易の變動に依りて消長あれども年々歲々增加の方にて昨年の如きは百萬ダース以上を輸出したるが輸出羽二重の三分迄は此ハンケチに依りて占められたりとハンケチの輸出先は重に米國なれども本年は同國の景況面白からず從つて其賣行惡しき故之れを倫敦、里昂等に向けて輸出し居れりと

●●●●●ハンケチの賃錢　ハンケチには附緣、折返しの二種あり附緣とは他の切を以て四邊を綴りたる

ものにて折返しとは原地の四邊を折りて之を綴りたるものなりハンケチの種類は以上の二つに過ぎざれども其品には長短廣狹の差別ありて一定せず左れどもその大概を記せば一尺以上二尺以下にて就中賣れ行のよろしきは尺三寸、尺五寸位のものなりと又た其直段も品に依りて高下あるの外尚ほ其地合に依りて高下あり假令は二尺四方にて一枚二圓のものあれば同じ幅にて一圓位のものもあるなり而してその最高は一枚二圓にて其の最低は一枚十錢なりと云ふ左れば其賃錢の如きも區々にして定かならざれども先づ大概は一枚一錢五厘より三錢五厘位なり尤も附緣は少しく面倒なれば二三厘方高賃なりと初心の人は一日普通の品にて五枚（此賃銀は七八錢なり）位を仕上ぐれども熟練なるものは上等の品にて五枚位を仕上げ得べし一日に上等の品を五枚仕上ぐるとせば先づ十七八錢の賃錢を得る都合となるべし左ればハンケチの刺縫も女子の職業としては面白きものならん

刺繍の內職

輸出向の刺繍類　刺繍は繪畫彫刻と同じく美術品に屬し其の淵源は遠く吉備大臣入唐の昔時にあれども其外國へ輸出し始めたるは萬延年間横濱開港の時にて當時同地に樫木屋佐兵衛と云へる人ありて白糸縫の服紗を製し外國人に賣付けたるが忽ち好評を博し其後三井家も同地に開店し此服紗を取扱ひ居たるが大關左次郎と云へる人亦た起りて三井の後を繼ぎて同じく此服紗を製造したりき此大關氏は今も尚は横濱に在て專ら上等物の刺繍類を取扱ひ居れりと此と同時に東京麹町の呉服屋伊勢八と云るが横濱に刺繍類の賣込店を開きたるが其後故ありて廢業し同店の番頭たりし椎野庄兵衛と云へる人其後を襲ひて開店し今日に至る迄盛んに營業し居れりと此外尚ほ十餘軒の刺繍商あれども何れも下等輸出物を取扱ひ上等物は椎野、大關の兩店に限れりと偖て輸出刺繍類にて上等品と稱するものは屏風、衝立、額、懸掛類にて下等品は金縫のストウフ懸、椅子懸等を始めスカラハンケチ（小さきハンケチに花鳥等を刺繍したるもの）を指すものなるが最初白糸縫の服紗に次きて製造せられしものは所謂上等品の屏風額類にて之れは明治七八年の頃より始まり一時はあか〳〵盛んに賣行きたれども何樣製品の高價なるとその割合に利益の薄きより問屋に於て自分製造を扣ゆることゝなりて今日にては甚だ不振の景況とおれりスカラハンケチ類の流行したるは明治十九年の頃より二十年二十一年の兩年度に渉りたるが其の後は賣行惡しくなりて今日にては其の製造高も僅々となり且つ東京にては之れを製造するもの至つて尠なく名古屋岐阜の如き賃錢の廉價なる所に行きて其の餘息を保ち居れりと近年に至りて最も賣行の好しきもの

は金糸縫のストップ懸、椅子懸等にて横濱の問屋等にては專ら此等の品を取扱ひ居れりと總て刺繍類は不景氣の方にて一時は輸出品の第三位を占め年々の輸出高五百万圓に上りたれども昨年來は又た斯る盛況を見ずといふ刺繍類は重に米國に向ひ輸出さるゝ者にて上等物は佛蘭西に輸出することあり近來は彼國にて我國古代の刺繍類を愛玩するの風行はれ古風の摸樣ある物はなか〳〵高價に賣行くよし尤も之れは骨董品として取扱ふものなれば刺繍類には別に影響を與へずと云ふ

●●●●●●●　刺繍類には別に內地向と稱するものあらねど外國向に對して云ふ時は先づ半襟類、總摸樣、地細工（紋類）衣裝縫、金銀モール縫等なるが右の中にて最も盛んなるものは半襟類にて地細工之れに繼ぎ總摸樣に至りては甚だ寥々たりと金銀モール縫は明治となりて出來たるものにて專ら大禮服軍服等を刺繍るものなるが之れは限られたる仕事なれば左して盛衰を見ず衣裝縫は遊女の補襠俳優の衣裝等を刺繍るものなるが之れ又た昔の如き上等物は出來ざるも相應の仕事なきにあらず只だ最も哀びべきものは彼の總摸樣にて封建時代には縫箔といへば總摸樣に限られたる如き勢ありて千代田の大奥より各大名の女中に至るまで何れも縫摸樣の入りたる衣裝を着し居たるが維新後は次第に廢れ行きて今日にては儀式の席を除きては裾摸樣の入たる衣裝さへ着くるものなきに至りぬ左れども貴顯大家等の婚禮等には今も尙ほ昔の風を用る由にて昨年山縣大將の令孃が船越家に嫁したる時又岩崎彌太郎氏の令孃が松方家に嫁したる時抔は淺草の縫箔屋長谷川に命じて立派な總摸樣入りの衣裝を作らしめたりと又た古代には今日の如く糸を用ひず絹地の上に箔を置きてさせ〳〵の摸樣を作りたるものあり此箔摸樣の衣裝は德川時代に存し嬰兒が宮詣での初衣に用ゆる蓬萊の龜鶴あをは此種類のものなりしと云ふ左れども今日の職人中には是等の事抔さへ知らざるもの多く東京には三百餘人の縫箔屋あれども箔細工の出來るものは一人もなしとぞ又た紋類の縫箔は地細工と呼はるゝ程にて昔時はなか〳〵盛なりしも近來は多く染紋を用ゆる故に縫紋は次第に退歩し德川時代の如き上等の細工をなすものなし紋類は縫箔の仕事中にて尤も困難なるものにて專門の職人は紋さへ見れば直ちに其伎倆の巨否を知りたる位なりしが近來は之れを重んずるものなく粗造千萬のものを作りてお茶を濁し居れりとの總ての刺繍類は斯くの如く退歩し居れる間に在りて半襟類のみは駸々として進歩し日一日と上等物を出だし今日にては刺繍賃のみにても一枚一圓以上のものありと云ふ輸出向にても亦た內地向にても何れも專門の仕事となりて地細工は地細工、衣裝縫は衣裝縫に分れ居れるが其仕事は又た土地に依りて區別ありて衣裝縫は淺草區に多く金銀モール縫は芝區に多しと云ふ

●●●●●●　刺繍類　刺繍の技は昔時に比すれば大ひに衰へたれども尚は京都邊にては高尚典雅なる美術物を製造し大ひに此技の面目を保ち居れり就中同地の西村惣右衛門氏の如きは良工名手を撰び古代の刺繍類にも劣らざる良品を製造せしめ海外の博覽會等に出品し日本の美術を發揮せんことを勉む彼のシカゴ博覽會には精巧無比と稱せられたる刺繍の屏風（半隻の代價一万二千圓）を出品したるに非常の賞賛を博したりと左れば長き邊にても其の技の絶妙あるとを聞召され先頃黄海大海戰の闘を綵繍したる御屏風の調製方を命せられたるが畫は村田丹陵氏の筆にて繍工は京都の小林政次郎と云へる人なるが其の代價は一隻二万五千圓にて此御屏風の成工せば近代の絶品として仰がるるあらんと云ふ此外京都には此技に熟心なる刺繍商ありて繍工をして十分に其技倆を盡はしめ居れるが今其の一例を記るせば或る刺繍商は外國人より狆の寫生を注文せられたるに日本の狆にては面白からざる所ありとて代價三十五圓を擲ちて態々外國種のを取寄せ摸型として繍工に渡したるか此狆は不幸にも刺繍の中途にて倒れしかば又々同樣の狆を購ひて其技を終らしめたるとありと此狆は成工の後注文主に見せたるに其の姿といひ其勢ひといひ宛なから生るが如くなりしかば注文主も大ひに感服し最初の豫定額よりも高く之を求め微々たる一匹の狆に三百五十圓を出して携へ歸りたりと此狆を刺繍したるものは黄海大海戰の御屏風を綵繍せる小林政次郎なりとか京都にては斯る熱心なる刺繍商ありやも東京横濱等の問屋は數でこなす主義を採りて精良なる美術品を製造するもの尠なく偶々之れあるも一般の風潮に壓せられ已ことを得ず疎惡なる物品を作るに至るなり又た問屋の繍工に對する關係も京都の如く厚からず問屋は繍工を窘めて只管賃錢の安からんことを望み今日にては殆んど入札の如き惡例を作りて成るべく安き賃錢の所へ受合はしむる樣になりたれば繍工の方も十分の伎倆を奮うに由なく問屋の門さへ通ればよろしとの考にて疎製濫造を厭はず其が爲めに大ひに外人の信用を失し遂に聲價を墮すに至りたりと彼のスカラハンケチの如きも一時は非常に盛んなりしも問屋が段々と賃錢を落し來りて遂には絲代にも足らざる賃錢となりたれば是迄從事しつゝありし人も其業を見捨る樣にありて今日の不振を見るに至りたるありと

●●●●●●　輸出向の仕事　刺繍類の仕事は男女混用にて女子に屬するものと男女相半ばするものと全く女子のみに屬するものとあり其第一にあるものは高尚なる美術品にて第二にあるものは下等輸出品及び半襟類第三にあるものはスカラハンケチ類なりとす因て先づ第二にある輸出向の仕事より記さんに此仕事の本場とも稱すべきものは横濱にして刺繍業者として門戸を張れるもの九十六軒あり尚は內職として之れを營むもの及び刺繍業者の

宅に養成しつゝある徒弟を合すれば三千人を越えて同地工業者の第一位を占め其の問屋より受くる所の賃錢一ヶ年二十五万圓に上ると云ふ又た近頃英四十番館は内地人の名義を以て同地翁町三丁目に刺繍の工場を開設し五六十名の職工を集めて盛んに製造し居れるが尚ほ事情に依りては他にも工場を開く様子なりと云へり其の盛んなること推して知るべし東京にては刺繍業者の數は二百八十四軒あれども其間屋とも稱すべきものは彼の堀越商會を除き横山町汐留町邊に二三軒あるに過ぎざれば其の八分迄は横濱の品を受負ひ居れりと偖て此輸出向の仕事は先きに記したる如く窓掛、椅子掛、額面、屏風、布團、寢巻、肩掛等なるが此中にて伎倆の精巧を要すべき上等物は未た女子の手にては出來得ず只だ價安き金縫の椅子掛、ストウブ掛、肩掛、布團、寢巻類は女子の職業として營み居れる者尠なからず中にも肩掛の両面縫は横濱にて發明せしものにて其賣行き頗るよろしければ婦女にして之れを刺繍するもの亦た多しと云ふ元來刺繍の仕事は男子の職業として營み女子は只だ其の補助をあすに過ぎざりしかば女子の名人を出さゞりしも今後若し精勤の功を積めば女子と雖も高尚なる美術品を作るに至りて今日まで女子の手に成りたる刺繍は只だ美くしと云ふ迄にて氣韻に乏しく又た其の意匠の點に於ても男子に及ばざる所ありて女子の作りたる上等物と男子の作りたる中等物と匹敵する位ありと横濱にては一時は女子の刺繍を爲もの多かりしも其技の困難なると俄かに賃金を得がたき所より近來は大ひに其數を減じ金刺繍業者（徒弟をも含む）の四分の一位となりたりと又た最近の調査に依れば東京にて女子の門戸を張りて刺繍業を營み居れるものは十六人あり尚ほ之れを細別すれば

芝區	五人	日本橋區	二人	下谷區	一人
本郷區	一人	麻布區	一人		
赤坂區	一人	本所區	一人		

あり又た女子にして刺繍業者に就きて其技を學びつゝあるものは定かならねども一軒の宅に五人を數ゆるとするも總計二百八十四軒にして一千三百二十人となるべし尚ほ之れに女子職業學校に於ける刺繍課の卒業生徒を加ふれば一千五百人以上の人員なるべし

●●●●●●　内地向の仕事　内地向の刺繍類中にて女子の職業となり居れるものは半襟類にて之れとて上等の細工は男子の手に屬し居れども下等は七分迄女子の手になると云ふも不可なし袖も縫摸様の半襟類は二三年以來流行し冬物は大抵縫摸様を用ひ夏物は縫模様七分染出模様三分の有様なるが染出模様は古代の風を模擬するもの多く光琳風の書模様、鳳凰、亂菊等を染出したもの流行し縫模様には眞面目のもの多く菊、楓、牡丹、蔦等を刺繍したるもの流行す總て東京の人は色も模様もアッサリとしたるものを愛し上方の如くコッテリとしたるものは望人なし故に白地若くば黒縮緬

に金縫をなしたる半襟などは東京の人には向かず只だ田舎より出でたる人の東京土産として求むるのみなりと半襟の地は冬は縮緬を用ひ夏は紹縮緬を用ひけるが其地質の代價は冬物上等八十錢夏物同六十錢なれども之れを縫ひ上げたるものは上等にて十二三圓のものあり左れども斯る品は所謂無類飛切にて一年に十掛と賣れるものにあらず普通上等と稱するものは五六圓内外なりと又た半襟は小供にても大人にても必要なるものなれども其年齢に依りて嗜好を異にし十歳以下は重に染出模様十二三才より五十才位迄は縫模様五十才以上は無地を用ゆと云ふ總て半襟類は半襟間屋にて製造し之れを半襟專門の小賣商若くば呉服屋へ卸すものにて白木屋三井大丸等の大呉服屋にても半襟類のみは專門の問屋より仕入れるものなりと目下東京に於ける半襟問屋は七軒ありて其中最も盛大なるものは横山町の根本重兵衛（赤石屋）濱町の細田傳兵衛なるが此等の問屋は一掛二掛の小賣をなさず幾百掛を一括として其向きの商店へ卸すものなるが獨り彼の「襟善」のみは自店にて製造したるものを自店にて小賣をなし居れりと半襟問屋中にて最も上等の品を製造するものは「襟善」にて一掛十二三圓の品をも造くることありと是れ同店は他の問屋と異なりて一掛づゝの小賣をなせば時好に投し如何なる新意匠をも考へ出すを得べく從つて他店に先立て流行を制する故なりと半襟類の賣行は一年幾許に上るやは精密ならざれども今假りに之れを計算せば東京の人口百二十万人中其の三分即ち四十万人は半襟を用ゆるものとし其平均の使用額を一年三掛となせば百二十万掛となるべく而して其七分は縫模様なれば此數八十四万掛となるべし而して其の一掛の代價を平均七十錢とすれば其總代價五十八万八千圓となるべし此縫賃は即ち刺繍業者の手に落つるものと知るべしこは獨り東京の例なれども尚ほ刺繍地として知られたる京都、大坂、神戸、長崎等を合すれば餘程の多額に上るべし尤も縫模様と稱するも悉く縫箔家の手にて出來るものにあらず即ち縫摸様の半襟中には七分染出して三分刺繍したるものあれば三分染出して七分刺繍したるものあり此等の品は染工と縫工と相待ちて作るものなりと上等の染摸様は一掛幾許にて計算せず摸様一個に就き五十錢位のものありと

刺繍の賃錢　刺繍類は其地合に依り又た其摸様に依り或は其大小に依りて價を異にすれば其賃錢も千種万別にして一定の標準なし左れども其大概を語れば輸出向の最下等は一枚三十錢内外にて上等には際限なく半襟類の最下等は一枚十二三錢にて上等は同七八圓迄なり而して上等の仕事は男子の手に屬し居る故今日普通女子の得らるゝ賃錢は一ケ月三圓位より六圓位に過ぎずと云ふ刺繍の仕事は卷煙草ハンケチ刺繍と異なりて種々の工風を要し且つ衞心も入れば一週間や二週間

にては覺へがたく一ケ年位修業せざれば其の初歩にだも入りがたし左れば刺繍業者にて男女の徒弟を養成するにも七ケ年を以て期限となし此期限を經ざれば獨立の營業を許さざる制規とあしゝれも昔時は十年を以て期限となし尚は其上に二年の禮奉公をなす制規にて都合十二ケ年を費やせしが近年は各地とも前記の如く七年に改めたりと刺繍業者の徒弟には住込と通勤の二種ありて住込とは親方の家に起臥し一身を親方に任したるものを指し通勤とは自分の宅より辨當持にて親方の宅へ通ふものを云ふ此辨當持は女子に限りたるものにて男子の通勤者は親方の宅にて食事をあすの習慣なりと通勤の徒弟は三ケ年を以て修業期限となし六ケ月目より相當の賃錢を與ふるの制規なれども今日にては多少の加減を加へ一ケ月もすれば賃錢を與ふることになしたりと右は一般の刺繍業者が男女徒弟を養成する方法なれども單に輸出向のみの刺繍類を製造する工場なにては簡便なる方法を用ひて職工を養成する由目下東京にて此刺繍類を教ゆるの學校は一ツ橋通の共立女子職業學校にて年長者は二ケ年年少者は三ケ年を以て一通の刺繍類を卒業せしむ其他別に學校と云ふべき所なけれども刺繍業者は大抵二人や三人の徒弟を養成し居らざるものなければ其宅に就て修業し其の指支なき時に至りて自宅にて營めば別に困難を感ずる如きことはなからん刺繍業を學ぶには刺繍臺、糸枠等を要すれども之れは七八十錢あれば購ふを得べく又た刺繍者の宅に行く人は先方に器械も備はり居れば別段購求するの必要なし以上記し來りたる所を以て見れば刺繍業は女子に最適のものなりと云ふを得ざれども又た一種の趣味ある職業なることを知るべしスカラハンケチは今日殆んど廢りて東京にては之を營むものさへなければ殊更に記さず

造花

●●●●●造花の嗜好　天然の花は四季折々に開きて吾人の眼を娯しめれども時に凋落の憂ありて不斷の色を愛る能ず人爲の花は纖巧に過ぎて天眞を失ふことあれども時に天然の足らざる所を補ふの利なきにしもあらず左れば東西何れの國にても造花を愛翫するの風行はれて或は之れを以て室内の裝飾となし或は頭挿、帽子飾等となして婦女の用に供したりき而して此造花の技は日を追て進歩し最初は紙を以て製造せしものも後には巾地を用ひ今日にてはゴムをも利用するに至りぬ我國にては紙花は古來より吉凶の儀式等に用ひられ多少の需要ありたれども美術的の造花に至りては使用甚だ狹く花簪として製造するの外他に之れを應用するの途なかりしか近年西洋の文物輸入されたるにつれて室内の裝飾も其面目を一新し造花は花簪の外に需用の途を見出して今日の盛況を見るに至れり而して其技は昔時に比すれば非常に發達し花卉の天眞を寫すことを務めければ

其高妙なるものに至りては微に入り細を極めて殆んど天然を凌がんとし一見其の眞僞を分ちがたきものあり此等の造花は之れを生花と稱し重に室内の裝飾に用ゆるものにて花瓣頬に應用したるものは其需用却つて少なしと云ふ

●●●●●●●●

西洋的造花の開祖　本邦に於て西洋的造花即ち天然の花卉を摸擬したるものを造り始めたるは大坂の英三郎兵衞と云へる人にて元は染屋を營み居りしが不圖一種の染色を發見し之れを巾地に染めて花卉を造りたるに殆んど生花の如く出來上りたれは夫れより造花の業に移りて種々工夫を費やしたる末改良に改良を加へ今日の如き良品を出すことになりたりと東京市中の勸工場小間物屋等に在上等の花瓣にて生花を模擬したるものは多く英の店より出てたるものなりと東京にて此造花を作る場所は一ツ橋通り女子職業學校のみにて同校の製品は時々宮内省より御買上となり又た華族貴顯等よりの注文もあり頗る精巧なる品を製造する由同校の造花は偏に花卉の天眞を失はざらんことを力め一蕊一葩に至る迄生花を標本となして之れを摸寫するものなれば其製品は色澤と云ひ花形と云ひ天然を欺くばかりにて只だ其の香のなきを恨むのみなり記者は同校に行きて近頃生徒の作りたる花籠を見たるに菊あり、薔薇あり、蘭あり、椿あり、龍膽あり、柘榴あり、櫻草あり、野菊あり其他名も知れぬ野花を數限りなく挿込み蔦を以て籠の手を飾りたるが其

の花の色は言はずもがな其の葉の光澤眞に遍り殊に椿の葉に斑點の入りたるは生物を見るの思ひありき事務員の談にこは此花籠は未だ精良なるものにあらず是れよりも上等の品ありとの事なれば其造花の技の如何に進歩し居るやを知るに足らん

●●●●●

西洋的造花　は其需用頗る廣くして先づ室内の裝飾には花籠、挿花、立花（鉢植）等あり婦人用には花瓣、帽子飾等あり其他宴會用徽章用等數へ來れば多々あるべし偖て此西洋的造花を我國にて製造するに至りたるは明治二十年前後にて女子職業學校の如きも明治十九年の頃に設立されれども二十一年迄は今の造花科の代りに押繪科の設けありて二十一年に至り大坂より造花の教師を聘し初めて其の試造をなしたりき左れども當時の造花は單純なる花瓣位にて今日の如く生花を摸擬したるものは出來ざりしかば教師は如何にもして西洋風の造花をおさんと苦心し彼地より種々の造花を取寄せ一々之れを解剖して其の造り方を研究し又た色澤の如きは其道の化學者に頼みて分析せしめ藥品の調合をも研究したるが其効果誤たず技藝次第に上進し今日にては花卉一切出來ざるものなく苔、蔦、岩檜葉の如きものさへ造るに至りぬ此岩檜葉は今回初めて試造したるものなれども其葉と云ひ其莖と云ひ實物を見る如く又た苔は毛糸にて造りたるが其の淺き所は翠色を呈し其深き所は黛色となりて淡濃能く適合したれは作り物とは思はれず尚ほ近年は蘇鐵、萬

年青、蘭の如き葉を專らとするものをも造ると云ふ凡て西洋的の造花をおすには眼前に實物を置きて葉は葉、花は花にて取り外し其の組織の樣子を見て一々之れを模擬しけるが其の巧なるものに至りては側らに置きたる生花を造り上げたる造花と見誤るほどのものあり現に記者の參觀したる際或る生徒は實物を模擬して藤蔓を作り居りしが色合の鮮かにして殆んど眞物と思ほしきものあり之れを尋ねたる後其の造花なることを知りたりき其他蔦、楓の紅葉などにてなか〳〵美しきものあり此等の造花は何れも諸方よりの注文に依て作るものにて生徒の工風になりたるものなりと又花簪にも生花を模擬したるものあり夏菊、黄薔薇、拓榴等の際物を造りありしが此等の品は一年生の作なれどもなか〳〵巧に出來上り居たりき以上は單に職業學校の一例なれども之に依りて察すれば略造花の如何を知るを得べし

●日本的造花　とは重に在來の花簪或は意匠細工の簪等を指せし者にて少女の玩用に供せらるゝものを云なり花簪類は重に京坂地方にて製造せられ全國へ輸送さるゝ者にて東京に於ける花簪の七分迄は京坂地方の製品なりと云ふ京坂地方の花簪は際物多く夏あれば牽牛花、冬なれば梅の花、正月には羽子手毬、納涼時には團扇といふ如く時候を逐ひ季節に從ひて造りけるが元より一時物の事なれば上等なる品はあく東京に於て製造さるゝ上等物は重に意匠細工の簪にて金銀モールを用ひ或は縮緬を束ねて藥玉又は花籠あどを造りけるが其の纖巧なるものは一本一圓五十錢位のものなりと云ふ此の意匠細工は東京に限り製造せられ時々京坂地方へ向け輸送しけるが其東京にて流行し始めたるは四五年前にて中にも金銀モールを用ひたるは戰爭以來屢々軍服の灼爛なるを見て思ひ付きたるなりとか尙は花簪中には西洋的造花あれども此れは前に記したる通り望人甚た少なく上等物は意匠細工に壓せられ下等物は上方の安簪に壓はれ居る有樣なりと又た束髮用の花簪の如きは今日にては之れを用ゆるものおく需用皆無と云ふも不可なし東京にて上等の意匠細工をなすものは五六名に過ぎず又た上方風の花簪を製造する所は神田、淺草日本橋等に多し一時は本所押上に花簪の工場を設けて上方風の花簪を製造せしものありきも價値の高きために上方の品に壓せられ遂に廢業するに至れり

●造花の道具　造花は手の先の働にて一に工風に依るものなれども又た多少の道具を要せざるにあらず造花の道具には剪刀、ピンセット、鏝、打貫等あり剪刀は切斷の用に供するものにて刃の長くして先の細きものを宜しとす鏝は花瓣の窪を付け或は葉の筋を作るに用ゆ鏝には筋鏝、瓣鏝、丸鏝、菊鏝、櫻鏝などありて其種類頗る多しピンセットとは活版に用ゆる道具にて活字を摘むものなるが造花にも又た之れを應用し花瓣葉等を差抜きするの用に供するなり總て造花は纖巧

なるものなれば手指にては取扱ひ惡き所なり故にピンセットを以て指の代用をなすものなりと云ふ打貫は薄き金屬にて造りたるものにて花瓣又は葉を打貫くの道具なり造花の花瓣又は葉は剪刀にて作るものなれど其小さきものは一々切り放すに面倒なれば此道具を用ひて造るなりと打貫の道具は或る一物に限り造られたるものにて櫻の花には櫻の花の打貫あり楓の葉には楓の打貫あれば種々の花と葉とを打拔んには天然にあるたけの型を備へざる可からず左れども斯る時は打拔道具の類は莫大に至るべければ先つ梅櫻位の所にて我慢すべし尤も此道具は金物屋にて賣捌き居れば强て嶮たる形を求めんには其金物屋に注文するを宜とす打貫道具のなき造花は模型に依て造るものにて模型とは花瓣葉などの形を紙片に印したるものなるが實花なき時は想像に依りて畫きたるものを用ゆと云ふ又薔薇の葉を造くるには打貫の道具の外に筋形鏝盞なるものを用ゆるなり之れは鉛にて作りたるものにて打貫たる葉を此盞に入れて壓迫し其の條を付くるものなりと云ふ市中にて造花の道具を專賣し居れる店は柳原東立閑町八番地上原彌惣吉（桐屋）にて其道具の代價は大要左の如し

剪刀	二十四五錢	ピンセット	十二三錢
筋鏝	五六錢	瓣鏝大小二本	十錢

菊鏝大小二本	十一錢	櫻鏝	十錢
丸鏝六分	十錢	丸鏝七分	十一錢
丸鏝一寸	十八錢	梅瓣打貫大小二本	五十錢
櫻瓣打貫大小二本	七十五錢	櫻葉打貫大小二本	八十五錢
薔薇葉打貫筋形鏝盞共一組	大一圓	同中	八十五錢
同小	七十五錢		

右の代價は唯だ其の大要を示せしものにて時に依りて多少の高下ありと知るべし尚は此外造花の道具には打貫臺、木槌、摺鉢、繪具皿、簽刺等あり打貫臺及び木槌は打貫道具を用ゆる時に使ひ摺鉢は姫糊を解き又は巾地を染むる時に用ゆ繪具皿は花瓣、蘂、蓼等の着色をなす時に用ひ簽刺は葉あるを造る時巾地に糊をなす際に用ゆるなり此等の道具を悉く揃へんには五六圓を要すべく職業學校の如きは高價なる道具は一切生徒に貸與ふれども生徒は尚は入學の際道具料として二圓五十錢を要すると云ふ

●造花の職業●　は女子に適したるものなれども今日にては未だ十分の需用あらざる故之れに依りて自活の資を求むる如きは隨分困難なるべし又た日本的造花即ち花簪類に至りては上等の細工は本職の男子の手に歸し女子は只だ廉價なる粗品を造くるに過ぎざれば從つて高直なる賃錢を

得る能はず今日花簪を製造する宅に通ひつゝある女子は一日七八錢より十二三錢位を得るに過ぎずと云ふ又た女子職業學校の卒業生等にて市中の花簪屋と約束を結びて製品を受負ふものあれども兎角其の賃錢の安きために精巧の品を作る能はず折角學び得たる技藝を空しく滅めて實の持腐となり居るもの尠なからずと云ふ左れども之れは目下の談にて造花の前途は頗る多望なれば今日之れを修め居れば必ず利する所あるべし米國の如きは既に造花を以て立派なる女子の職業となし居れば我國にても文化の度の進歩するに伴ひて造花の嗜好一變し西洋的造花の盛況を見るに至らん現に今日にても西洋風の家室には造花の盆栽挿花等を飾りあるを見ても知るべし造花の價は一本二錢の花簪あれば一個三十圓もする花籠ありて一定し居らざれども其代價は殆んど手間賃に依りて成立ちたるものなれば需用さへあれば隨分高價なる賃錢を得べく女子の職業としては面白きものなるべし偖て造花は職業として之れを學ぶに利益あるのみならず娯樂として之をなすも趣味深きものにて令嬢貴婦人達が消閑の具には適當なるべし又た造花の技は學び易きものにて自用の花簪の如きは譯もなく造らるゝと云へば婦女の嗜みとして覺へ居るも無益にあらざるべし

●●●●●造花の傳習所　普通の花簪を學ぶには花簪製造人の徒弟となりて一定の期間修業し花の作り方、葉の染方等を覺ゆるなり日本的の造花は獨り花卉のみならず禽蟲魚介の形をも模すること あれば其材料も多く西洋的造花に比すれば大ひに複雜なりと云ふ西洋的造花を學ばんには彼の女子職業學校に入學するの外なし職業學校は女子に必適する職業を修めしむる趣意にて設立せしものにて諸種の實業を教ゆるの旁ら學科をも修めしむ現今生徒の數は四百餘名にて中造花科には四十餘名あり今此學校にて授くる所の職業を掲ぐれば左の如し

●裁縫　各種の和服裁縫及び子供婦人用洋服等の裁方縫方を授く倘ほ和服を學ぶものにも「ミシン」の使用法洋服下着の如き簡易なる裁縫法を兼修せしめ特志者に限り洋服のみを教授す

●編物　毛糸絹糸綿糸を以て靴下、帽子、帽子に裝飾を施す業をも修めしむ

●刺繍　半襟、服紗、窓掛、額面其他諸種の布帛に草木花鳥等を採繡する技を授け且つ下畫を描くの便を得さしめんため圖畫を兼修せしむ

●圖畫　模樣畫、水墨畫、彩色畫、寫生畫、陶器畫等を授け兼て織物、更紗、浴衣等の模樣を工夫せしむ

●造花　婦人の帽裝、室内裝飾等に用ゆるの外一般の挿頭に供するものを授く此科には圖畫を

兼修せしめ傍ら植物學の大意を授けて花卉の天眞を失はざらんことを勉む

右の外家政科割烹科の設けあり職業學校の事は此記事に直接の關係なけれども之れを世間に紹介する事は頗る有益なりと信ずるを以て之より話頭を轉じて同校の情況を說かん

●●●●●●●　職業學校の經費は生徒の授業料と製作品の純益金とに依りて成立するものにして生徒の製作品中需用の多きものは造花を以て第一に數へければ學校にても之れを奬勵し造花科に限りて校費生なるものを設けぬ校費生は束脩月謝を要せざるのみあらず造花に關する一切の器具材料を貸與し尙ほ二學年を終ゆる時は製作品純益の幾分を給與するなり校費生の年齡は十四歲以上三十歲以下にて卒業の期限は三ケ年あり目下造花科の校費生は十四名あり何も專心に勉強し居り又た何科の生徒に限らず技術の嫻練するに至れば注文品を製作せしめて其の純益金の半額以下を生徒に分與し其者の名義にて遞信省へ預け置きて卒業の時或は要用ある時本人の申出に依りて下け渡すなり而して今日迄積立てたる貯金の額は二百餘圓あり既に下げ渡したる金額は此貯金額に倍せりと云ふ又た生徒が日用使用する材料も最初は自辨あれども技術進歩すれば注文品を以て實習に供せしむることあるが造花科の如きは諸方よりの注文多きために生徒は優に實習の材料を得べしと云ふ

●●●●●●●　職業學校の生徒　更は甲乙兩科の區別ありて甲科生とは一課を選修するものを云ふなり甲科生は年齡十二才以上乙科生は十五才以上にて普通讀み書きを爲し得るものとし其の修業年限は甲科三年乙科二年とす（圖畫科のみは甲科四年乙科三年とあす）

授業時間は毎日七時間にて中二時間は學科を修めしめ他の五時間は實業をなさしむ學科は平易あるものにて高等女學校の初級の程度に同じ尙ほ小學教員志望者のために家政科なるものを設けたるが其程度は前者に比すれば稍々高尙なりき生徒の束修及び授業料は

甲科（束修　一圓
（授業料　一圓三十錢

乙科（束修　五十錢
（授業料　八十錢

にて尙ほ最初は材料を自辨するために毎月左の如き費額を要す

裁縫科　三十錢乃至五十錢
圖畫科　四十錢乃至五十錢
刺繡科　三十錢乃至五十錢
編物科　三十錢乃至五十錢
造花科　三十錢乃至五十錢

外に造花科は入學の當時器械調製のため二圓五十錢を要し刺繡科も同樣八十五錢を要すべし又た學科を修むるには毎月罫紙筆紙墨代として十五錢乃至四十錢を要すと云ふ

●●●●●●●　職業學校の寄宿舍　職業學校の生徒は假令遠國より來るものにても親族の外は下宿又は旅人宿

より通學するを許さゞるの制規なれば此れ等の人の便利を謀りて校内に寄宿舍を設けあり寄宿舍は近年新築したるものにて室内頗る清潔なり寄宿舍の規則はなか〳〵嚴重にて其の一例を掲ぐれば書狀を差出し又は來翰を受取る時に必ず監督者の手を經又た近親の人にても保證人の對面證書を持參せされば面接を許さゞる如き規則なり寄宿舍の炊事は生徒をして交番になさしめけるが之は割烹の實習ともなりて他日家政を營む時の利益となるべし目下の寄宿舍は四十餘名あり寄宿料は一ケ月四圓にして内食料には三圓二十錢を要し洗濯、炭、油費等に八十錢を要する勘定なりと云ふ

●●●

一ケ月間調査所に保存したる後之れを通信局に廻はし同局にて一ケ年間保存し置きて之れを反古となし紙屑商に賣渡す制規なりと全國にて最も多數の電報を取扱ふものは東京江戸橋の郵便電信局にて是れ又た十日間に一万以上の發信數あり之れに次ぐものは大坂高麗橋の郵便電信局にては十日間に二三千通の電信を取扱ふと云ふ左れば十日目毎に全國の各電信局より送り來る原紙は何万を以て計ふべく調査所の机上には小山を築はざなれども熟練なる職員は迅速に之れか調査をなし十日間の電報原紙を一週間位にて調べ上ぐると云ふ

●●●

因て又た其の中繼局より出したる發着表を檢し其の紛失の原因を確かむるありと先頃調査所にて諸種の電報を取調中四國の某電信局より出したる發着表の發信件數と其他の局にて某局より受けたる着信件數の符合せざることを發見し大阪の中繼局をも調査せしに遂に某局の一吏員が原紙の切手を盜用し居たることを見出したりと此吏員は自己の罪惡を蔽はんとて殊更に發着表の發信を胡魔化しありたれやも他の局より差出せし發着表に依りて其着信を檢べられ遂に發覺するに至りたるなりと云ふ電報調査の精密なることは之れにても知るへし

電報調査所の職員　は男女共ありて何れも通信局の傭ひなるが現今在勤の女子は十六七より二十二三迄のものなりと尤も夫あるものは採用せられざる規則なれば獨身者なりと知るべし給料は日給の制にて最初は十五錢より始まりて十六錢十七錢となり今日にては二十二錢を得るもの最高に位し居れりと云ふ就業時間は冬季は午前九時より午後四時までにて夏季は午前八時より午後二時までなり日曜日、大祭祝日、歳暮、年始の休暇は他の諸官衙に同じ就業中の休憩時間は夏季は十時に於て十五分十二時に於て三十分冬季は十時には休暇なく十二時に三十分あり午後二時に於て二十分の休暇あり休暇時間の外は談話をなし又は新聞雜誌等を閲覽することを許さず十分二時に十五分の休暇あり休暇時間の外は談話をなし又は新聞雜誌等を閲覽することを許さず又就業中猥りに座席を離るゝことを許さず又外來人に面會するときは電報調査所長の許可を經ざるべからず尚は其他調査所員に特有なる心得方ありて其は電報の秘密を守ること、電報書類を大切に取扱ふことにて調査所員は自己の取扱ひたる電報の文意姓名發着等を他人に語り示すは勿論尚は他人をして其秘密を伺ひ知らしめざる樣注意せざるべからず又電報書類及び貼用の切手は大切に取扱ひて破損汚穢等なき樣に心掛けざるべからず若し職員にして此の必得方に背く時は相當の懲罰に處せらるべし女子にして調査所員とあらんと欲する人は調査所に向け願書を差出し置くときは欠員を待つて呼出さるべく其際簡易なる試驗を受け及第の上職員を命せらるゝなり試驗の課目は電信取扱規則作文(普通消息文)珠算(加減乘除)等にて高等小學校を卒業し居れば差支へなからん調査所に入る際は身元保證人を要するが是は遞信部内に關係ある人に賴む方萬事の都合善かるべし女子の風儀については官省のことゝて頗る嚴重なれば別段に說明するの必要あし尚電報調査の事は交通の發達するに從ひ益々盛大となるべきを以て將來多望なる女子の職業となるべし

マッチ女工

マッチ事業の發達　本邦に於て外國の製品を摸造し夙に其好結果を收めたるものはマッチ事業

なり此事業は明治初年神戸に起りたるものを嚆矢となし爾來各所に及びて今日にては二三地方を除くの外は殆んど製造所の存せざる所なく此事業に依りて衣食する職工の數は二万八千餘人に達し尚ほ間接に此事業に依りて生活するものを合すれば無慮六万餘人に餘りぬ而してマッチの仕事たるや七分迄は女子に屬するものにて殊に内職者の如きは全部女子の占むる所とおれり今此事業の發達を證する爲め其の産出の重なる地方及び其女工數を示さんに

製造所	女工
兵庫	四六　九五五七
愛知	二三　一九八三
静岡	一二　六二三

にして内職者の數は悉く詳にするを得ざれども兵庫に二万一千五百人大坂に五千四百九十三人東京に八千餘人あれは之れのみにて既に三万餘人に超過すへく自餘各地に於ける内職者を合する時は殆んど四万人に達するを得ん其の事業の隆盛なるは言ふを待たす其人數の多きこと眞に女子職業の魁と稱すへし

製造所	女工
大坂	三一　一九〇七
東京	二一　一三八〇
廣島	六　三三二

●●●

ラングーン	一、六三八
マドレッド	一二五
メルボルン	一四九
オークランド	二七
パタビヤ	三〇
ナン	二、四二三
合計	一五四、九七四

右の表中一箱と稱するものは五十哥入を指せしものにて一哥は一打を自乘したるものに相當し之れを小箱數に直せば百四十四箇となるなり左れども實際に於て取扱ふ數は六打を以て一哥と見做すか故に之れを小箱數に直す時は七十二箇となるべし今此計算を以て輸出マッチの總金に當つる時は十五万四千九百七十四箱は七百七十四万八千七百哥に相當し之れを打數となせば四千六百七十九万二千二百打となり更らに之れを小箱數に改ぴれは五億五千七百九十万六千四百箇となるへし之は單に神戸税關にて取扱ひたる數量にして尚ほ横濱其他の税關にて取扱ひたるものを合するの時は七億万に下らざるへし以て輸出マッチの盛況を知るに足らん

●●●●●●●●

東京のマッチ事業　マッチ事分は兵庫地方に起り東京の如きは遲くより始まりたるものなれば其製造の高と云ひ其製造場の數と云ひ全國にては僅かに第四位にあり東京にて此事業を始めたるは築地新築町五丁目の築盛社（現今は北辰社と改む）にて其の創立は遠く明治八九年の交にありき築盛社の起りたる後他に又た製造所を起すもののありたれども年々變更を免れず左れども事業は年々進歩の方にて昨年一社を増し今年一社を起し今日にては市中を通し二十四ケ所の製造所を見るに至れり而して其の製造所の所在地は本所、深川、淺草、下谷、京橋等にて其過半は本所に存せり是れマッチの事業は火藥を取扱ふ故人家の稠密せざる所を撰びしに由るならん又た築地の築盛社の如きは今日こそ人家も稠密となりたれ創立の際には一面の茅原にて人家も何にもなく毫も危險の憂ひなかりし故此處に設立するを得たるなりと今東京に於けるマッチ製造所と其女工數を細別せんに

製造場	所在地	女工數
北辰舍第一工場	淺草區神谷町	百五十人
廣業社	下谷區竹町	百人
盛業社	同區小島町	八十人
新燧社	深川猿江町	五十人
廣進社	同區同町	二十八人

稻生工場	深川區鶴歩町	二十九人
明治社	芝區白金町	三十五人
北辰社第三工場	同區濱松町	六十人
北辰社第二工場	京橋區築地新榮町	百二十人
精工舍	本所區表町	百六十人
木本工場	同區清水町	百十人
東洋舍	同區横川町	四十七人
燧明舍	同區大平町	三十五人
岡崎工場	同區柳島町	三十二人
公業舍	同區柳島梅表町	四十人
公益舍第一工場	同區德右衞門町	五十人
公益舍第二工場	同區同町	五十人
前橋工場	同區菊川町	五十五人
井上燐寸工場	南豐島郡千駄谷町	六十人

なりとす尙ほ他に四箇所の製造所あれども二十人以下の女工を使用するに過ぎざれば之れを略す

●●●

りたる軸木は之れを薬場に送りて薬品を塗りたるマッチを箱場に送れば箱場にては並べ板より取外して一々小箱に詰むるなり此にて軸木を小箱に納るゝ迄の順序を終へたれども尚ほ箱の両側若くは下底に摩擦薬を塗らざる可からず之れには又た専門の女工あり偖て塗りたる箱は日光にて乾かし之れを仕上場に送り此處にてダース包となし商標を貼りて仕上となすなり箱場より仕上に至る迄は女工の手のみにて毫も男子の手を假らず只だ並べ器械を運轉し頭薬を塗り若くは乾かすの仕事に男子を用ゆるのみなりき

●●●

スの賃錢は一錢五厘にて熟練なる人は一日に千グロース以上を成工すると云ふ此仕事は前者と異なりて倘麗あれば之れに從事する女工にも小藤張りとしたるもの多きが如し箱詰にても又た仕上にても其道に熟練なる人は殆んど無心にて仕事をなし其の迅速なること驚くばかりなりき府下に於て最も熟練なる女工を有する所は北辰社にして即ち同社には十年以上勤續し居れる女工ありて其最も高賃を得るものは一日三十二三錢を拂ひ渡すと云ふ

箱張の內職　或は銀燭を照らし或は紅燈を輝かすの基となるべきマッチは其夜の燈火さへ得灯さぬ人々に依りて作られたるもの多く物言ふ口を持たしめば嘸や哀れなる運命を物語らん中にも箱張の內職は貧しき人の專業となりて蚊遣いぶせき夏の夕油も凍る冬の夜に淚と共に作りたれば小さき箱の一つだに世に捨てられし人々が千萬無量の情や籠らん偖ても此箱張の業を營む所は東京市中にて七八十軒ありて芝、京橋、深川、下谷あたりに多く日々作り上ぐる箱の數は殆んど百萬に近しと云ふ箱張の仕事は百ダース即ち千二百個を一束とあし箱屋より內職者に分配するものにて內職者は一束宛成品となして之れを箱屋に渡し其の賃錢を受取るなり而して一束の賃錢は十錢內外にて熟練の人にあらざれは一日一束を仕上ぐること能はず普通は一日七八錢位なりと左れは女子の職業として先づ卷煙草の內職と伯仲の間にあらん此仕事は久しき以前より婦女の內職と

して下等社會に行はれたれども近頃は他に利益多き內職の出來たるため之れに轉ずるものありて大ひに其數を減じたりと云ふ

器械と女工　マッチの仕事は多く手先を用ひて器械を要すること尠なけれとも這は女工の賃錢の廉なるに製造高の尠なきより起りたることにて製造高の增加し若くは賃錢の騰貴したる時は器械を用ゆるに至るべし現に阪神地方の如きは東京に比すれば器械を使用するの箇所多く東京にて人工を用ゆるの仕事を彼地にては器械にて製造し居れりと云ふ左れば此器械の遍く行渡りたる時は女工の數を減少すべきかと言ふにマッチの仕事中には是非共人工に依らざる可からざるものあれば製造高の增加するにつれて職工を要することますゝ多かるべしと而してマッチの捌口は獨り海內に留まらず寧ろ海外に輸出するもの多き情況にて現に北辰社にて製造するマッチの八分迄は海外に向けて輸出する由あれば今後日を追ふて製造高の增加を來すべく從つて女工の需用も高むるに至らん凡てマッチの女工は製造高の增減に從ひて消長あり製造高の增加せし時には女工も增加し製造高の減少せる時には女工も減少するものなるが現今東京に於て製造するマッチの總量は一日百二三十噸（一噸は六百ダース）にして北辰社の如きは三工場にて一日に三十噸內外を製造せり而して一噸に就て大抵十人位の女工を要する由にて現に今日にては一千三百餘名の女工な

れば今後も此割合を以て増加すべしと云ふマッチ女工の前途亦た多望なりと稱すべし

製紐女工

●●●●紐糸の需用　紐糸は實用上必要あるのみならず裝飾上又た缺く可らざるものにて冠婚葬祭等の儀式は勿論日用の瑣事に至る迄紐の用を假らざるなく或は勳章の綬となりて貴顯の胸に飾られ或は雛用の襷となりてお炊の肩に掛らるゝ等其の使用の廣き事あか〳〵に數へがたし紐には其用法に依り或は其の組方に依りて其名を異にすれども詮ずる所は丸打と平打の二種に過ぎず之れを羽織の紐に作り又た帶留に製し或は襷ともなすなり紐糸は何の時代に始められしやは一群ならざれども既に衣服の制の定りたる以上は紐糸の必要あれば其の上古より來れることを知るべく又た其の沿革變遷等を考査すれば一種の紐糸考とも稱すべきものを得ん製紐の事業は日を追ふて進歩し曾て輸入を仰ぎたるコム紐、括紐等も今は內地にて製造するに至れり而して和製の紐は其精巧の點に於て舶來品を壓するものありてズボン釣の如きは何れが舶來何れが和製なるを辨ずるに苦しむるほどなりと

●●●●紐糸の製造　紐糸は組糸問屋にて製造するものなるが其中にて蒸氣力を使用し此製造を營むものは日本製紐會社の第一工場あるのみ此工場は新宿北裏町にあり明治二十二年頃に設立し專らゴム紐括紐等を製造す目下の女工は百餘名あり製紐の器械は一寸メリヤス器械に類したるものにて女工の伎倆もメリヤスの工女と匹敵せん製造會社の第二工場は入谷にありて此處には二百餘名の女工を使役し舊來の器械に依りて羽織の紐帶留の如き貴重なる紐類を製造し居れども其他組糸問屋にて少數の女工を集め舊來の器械を用ひて製紐をなすものあれども規模狹小にして工場とし見るほどのものなし紐糸は亦た女子の內職となりて組糸問屋と約束を結ひ自宅にて製造するものあり而して製紐の七分迄は此內職者の手に懸りたるものなりと組糸問屋は横山町邊に多く勤工場其他の小資店に飾りたる紐糸は大抵は問屋より出でたるものにて尙ほ問屋中には京坂地方に向け輸出するもの尠からずと云ふ

●●●●製紐の賃錢　紐糸の種類は千種萬別なるを以て其の賃錢も區々に分れ一々之れを詳記せんには日も尙ほ足らざれども其大躰は賃取と日給の二つありて蒸氣器械を用ゆる所には其の製品の數量を積算しがたき故日給として其他は悉く賃取法を用ゆるなり而して賃取にても又た日給にても一日平均十六錢にして內職者も大抵同樣の賃錢を得ると云ふ又た製紐會社にて拂ひ出す所の目下の賃錢は最低七八錢より最高二十五錢迄にて最低の日給を得るものは何れも小供にて遊び半分の

仕事をあすものなりと製紐會社の第一工場には寄宿舍の設けありて遠來女工の便利を謀れり紐糸の需用は年々增加し製紐會社の如きは殆んど其の需用に應じ兼ねるの情況なれば製紐女工の前途はます〳〵面白く成行かん

帽子製造

●●●●●●●　日本に於ける工業は日一日に發達し舶來の雜貨は大抵日本人の手に依りて作られざるものなく中には殆んど輸入品を杜絕せんとするものあるに至れり帽子の如きも亦其一にして年々歲々其輸入高を減少するのみならず或種の帽子は海外に向て盛んに輸出をなせり即ち明治二十四年には輸出帽子の高僅々一千百三十八ダース（元價三千六十三圓）に過ぎざりしが同廿七年に至りて三万四千八百六十一ダース（元價四萬九千八百十九圓）に增加し又た輸入帽子は明治廿三年には六萬一千九百八十三ダース（元價三十四萬八千八百十一圓）なりしが同廿七年に至りては一萬三百二十一ダース（元價六萬四千七百七十六圓）に減少したり又た最近の貿易月表に依りて去る八月中に於ける帽子の輸出入高を見るに輸出帽子の總量は三千九百十三ダース（元價五千八百二十八圓）にして輸入帽子の總高は一千七百八十四ダース（元價二萬四千三百〇四圓）なり輸

出帽子の盛況を見るべし左れども此輸出帽子は多く麥藁製なるを以て其の價格をして輸入帽子の如くならしむる能はざるは遺憾なり

●●●●●●●　和製帽子の製造所　日本に於て帽子製造の盛んなるは大阪にして東京は之れに次げり輸出帽子の仕向先は米國、東洋諸港、濠洲、南洋諸島なり日本に於て製造さる帽子の種類は鳥打、高帽、中折麥藁等にて其製造高は年々二十萬ダースに下らず帽子の原料は絹、羅紗、ラッコ等を用るが日本に於て製造するものは重に麥藁縫紗（スコッチ其他洋服切地る含む）等にて其他は外國の輸入を仰げり又た同じ羅紗製にても外國より毛織を取寄せて製造するものと原料の毛より織立て製造するものとあり而して前者に屬するものは諸所にあれども後者に至りては只だ東京に於ける同製帽會社の一あるのみ而して上等の羅紗帽を製造するには男子を用ひ女子は只だ之れを粧飾するに過ぎず左れども麥藁鳥打の如きものに至りては女子の手を假ること多し因て之れより製帽に關する女子の仕業を觀察せん

●●●●●●●　製帽會社の女工　東京製帽會社は小石川區氷川下町にありて明治二十二年の創立に係り斬新ある器械を使用して羅紗製の上等品を製造し一年の產額一萬四五千個に上れり此會社に於て使用する女工は七十餘名にて其の重なる仕事は帽子の緣を綴り又た顚巻を付け或は帽子の裏地を縫ふ

なぞの事にて帽子其物を製造するは何れも男子なり女工の賃錢は十錢より始まりて漸次二錢宛遞增し三十錢に及べり而して帽子の縁を綴り又た其の裏地を縫ふにはミシンを用ゐればミシンの技に長たる人は良き賃銀を得るの都合にならん又た製帽會社には女子の內職あり這は帽子の裏地を裁縫するの仕事にて官吏の細君なぞが留守仕事には適當のものあり賃錢は其種類に依りて差異あれども下等一ダース三四錢より始まりて上等十五六錢迄ありと云ふ

●●●

て鑑札を得るの資格あるものは僅かに其の百分の三位に過ぎすと云ふ

軍用帽子の製造　軍用帽子の製造者は常に規則的帽子を製造するを以て仲間中には之れを規則屋と呼べり此規則屋にて製造さるゝ帽子は獨り陸海軍將校兵士用のみならす華族及び高等文官用裁判官及び辯護士用、學校教官生徒用、巡査看守用、電信鐵道工夫用、官私設鐵道役員用、諸工場役員職工用等あり右の中にて陸海軍將校の軍帽、華族及び高等文官の禮帽、裁判官辯護士用の制帽を製造するものは上等の部分に屬し其他は普通の雜帽子屋に異なることあし上等品を製造するには特別の伎倆を要するを以て女工を交ゑざれとも下等の品に至りては多少の女工を使用し居れりと此規則屋の仕事は前途望ありて單に陸軍用の軍帽にても軍備擴張の上は其の需用を增加すべく又た一般の會社工場等にても規律的職業に便なるため一定の制服を着せしむるの傾きあれは此種の制帽も大ひに增加するに至るべし

麥藁帽子の製造　麥藁帽子は海外輸出の第一に數へられ其の製造は日一日と盛大にあれり此帽子は市中よりは寧ろ大森川崎等に於て製造さるもの多く市中には僅かに六十餘軒の製造者あるに過ぎす此帽子の製造には男子を使用すれとも其の原料たる麥藁眞田を作るの仕事は女子の專業となり居れり尙は詳しくは麥藁眞田の項に於て記さん

製造職工の修業　製帽の仕事は多少の熟練を要するを以て一定の修業期を終ゑざれば製帽者として獨立の生活を營みがたし製帽職工の修業期は七年を以て一期となし首尾よく勤め上げたるものには主人より卒業證書兼保證狀とも稱すべき鑑札を附與するなり此鑑札を有するものは自身にて製帽業を始むるとも又た他に雇はるゝとも相當の收得あるべしと製帽職工の賃錢は二三十錢より四五十錢迄ありて修業中にても尙は相當の賃錢を與へらるゝなり製帽の職工となるものは男女を問はず十三才以上なれとも最初は遊び半分にて十五六才以上とならでは物の役に立ず昔時は製帽には工女を使用せざりしも近來は之れに反し何れの工場にても女工を見ざることなし左れとも女工には婚嫁の期限もあれば男子の如く一定の修業期を卒る能はず從つて女工中には熟練のもの少なく其の賃錢も廉にして最高二十錢位ありと製帽の事業は其の期節に從つて繁閑あり冬帽子は夏の末より始りて十一十二の兩月を盛となし淺草上平衛門町の中田製造所の如きは此頃にて一日に二十ダース以上を製造し居れりと又た輸出の夏帽子は一年中間斷なく製造せらるれとも其の最も盛んなるは六七月の交ありと云ふ製造の繁忙なる時賃錢の騰貴し製造の閑暇なる時賃錢の低落することは言ふを待たず左れば其の二十錢と云ひ三十錢と云ふは只だ平時に於ける賃錢を示したるものにて尙は多少の增減ありと知るべし

製紙女工

和紙の製造　紙類には種々の名稱あれども之れを大別すれば和紙、洋紙、壁紙の三種となる此中にて多數の女工を要すべきものは和紙にて壁紙之れに次ぎ洋紙に至りては器械を用ゆるを以て人工を要すること少なし東京に於て製造さる和紙は美濃紙、半紙、雁皮紙、半切、地正紙、淺草紙等にて其專ら製造するものは地正紙、下等半紙、同半切、淺草紙等にて美濃雁皮の如き上等品に至りては其の金額甚だ少なしと云ふ府下に於ける和紙の製造者は八百餘軒あれども多くは自家を以て工場となし家内總掛にて仕事をあすものにて別に規則的の工場を營むものを見ず而して市中に於て抄紙屋の多き所は小石川、牛込、淺草等にて市外にては品川、千住邊に多し彼の淺草紙の如きは其名は淺草なれども實は千住にて製造さるゝものなりと又た地正紙、安半切等は小石川音羽邊にて製造され音羽町の如きは五丁目より一丁目に至るの兩側は屑屋、紙屋、抄紙屑等にて埋るほどなりき和紙の抄造は女子に相應しき仕事にして軟弱なる女子の手は軟弱なる紙類を取扱ふに適すれば何れの製紙所にても多少の女工を用ひざるなし而して其の最も多く女工を使用する所を江戸川製紙會社となす固て之れより此會社の情況を說かん

江戸川製紙會社　は牛込五軒町にありて江戸川に瀕せり此會社は明治十一年二月に設立し專ら證券界紙を製造し傍ら諸官署の用紙を供給し居たるが事業次第に盛大に赴きたるを以て規模を擴張し大ひに民間に向つて賣弘めたるより遂に今日の聲望を博し江戸川製紙の名は海外に迄知らるゝに至れり目下同會社にて製造する紙類は美濃、半紙、株券用紙、骨皮洋紙、程村紙、江戸川半切、雁皮紙、インキ應用紙、圖畫用紙、紙製ハンケチ等にて骨皮洋紙、程村紙、紙製ハンケチ等は多く海外に向つて輸出すと云ふ和紙の原料は三極、楮、雁皮等にて之れを抄造すには固有の器具を用ひ眞に手先の仕事にて誠に日本獨特の伎倆と稱するも不可なし而して此獨特の伎倆を有するものは女子にして製紙會社の上等品は女子の手に懸らざるものなし目下此會社にて使用する女子の數は百二十名にして十四五才より四五十才迄なるが何樣其の創立の久しきを以て熟練なるもの多く此等の女工にかゝれば如何なる紙類にても抄造せられざるものなしと女工の賃錢は日給と賃取の別ありて手數のかゝるべき上等品は日給にて其他は賃取の方法を用ひるが其の何れにするとも一ケ月三圓内外より七八圓内外迄を得らると云ふ

製紙事業の發達　日本に於ける製紙事業の淵源は漠として考ふべからざれども記錄の傳ふる所に依れば三韓交通の當初曇長と云へるもの彼地より來りて其の業を傳へたりと云へり此際製造さ

れたる紙は唐紙の如き性質のものにて木の炭を煮て之れを作り其の紙となる迄には半年もかゝりたるが其後聖徳太子の時に至りて之れが改良を施し初めてアルカリー分を以て製造するに至れりと而して中古我國に行はれたる紙類は皺紙(檀紙)和紙(奉書)カタヽ紙(鳥子)俗紙(半紙)にして皺紙及び和紙は貴縉の間に行はれ俗紙は一般の庶民に用ひられカタヽ紙は經文を寫すの用に供せられたりと云ふ以上四種の和紙は時代の變遷を經て多少の改良を加へられ世間に傳はりたれども此四種の外に異に日本人の伎倆を示すべき一種良好なる和紙を發明するものなかりしに明治年間に至りて故印刷局長得能氏等卒先して和紙の改良に着手し遂に今日の如く紙質光澤字内に冠たるの和紙を抄造するを得日本製紙家の伎倆は海外に迄知らるゝに至りぬ今日海外に輸出する重なる和紙は雁皮紙にして去る二十七年に輸出せし總額は十二萬七千七百四十五斤其元價七萬七千八百七圓其他の和紙類は區々に渉りて數量を詳かにする能はざれども其の輸出元價十七萬二千百七十一圓に上りたりき而して此等の和紙類は多く女工の手に依りて製造せられたるものありと云へば製紙女工が國家に與ふるの利益亦た侮るべからざるべし

●●●●和紙の抄造　今日輸出品として知られたるものの中には泰西の器械を利用して盛んに製造するものあれども和紙の如きは舊來の器具を用ひ一に人工と自然とに依りて製造せり是れ我國の紙は

洋紙に比すれば其の質の薄きため器械に懸らざると又た厚き紙にても抄込の如きは特別の伎倆を要する故器械にては成工しがたきに依れり今其の一例を記るせば彼の和紙を乾かすの一段にても洋紙の如く鐵板を用ゆる時は紙は忽ち其板に固着して之れを剝ぐこと能はず左れば和紙を乾かすには迂遠あがらも木版を使用せり此木版も木地の如何に依りて良き紙ともなり又た悪しき紙ともなる由にて製紙家の説にては銀杏の板を以て最良となすと云ふ又た洋紙は火力を以て乾燥せしむるを以て晴雨を論せず製造するを得れども和紙は日光を以て乾燥せしむる故雨天にては之れを行ふ能はず近來製紙者間には火力を以て和紙を乾燥せしむるものあれども其成績の點に於ては日光に及ぶべくもあらず又た同し日光にても春の日に曝らしたるものと秋の日に曝らしたるものとは自ら其の出來榮を異にし即ち秋の日に曝らしたるものは紙質光澤共に良好なりと云ふ和紙を製造するには斯の如く微細ある關係あるを以て到底器械にては製造しがたく其の製品の良否は一に職工の伎倆と天然の風土とに依るものなりと而して女子が纖密ある思想と軟弱なる手先とは自ら和紙の抄造に適するを以て公私の製紙所には盛んに女子を使用し又た空氣の乾燥最も適順の氣候と恰良の日を撰びて製造し居ると云ふ

●●●●製紙女工の賃錢　江戸川製紙會社に於ける女工の賃錢は既に記したれども之れを以て一般製紙

女工の標準となしがたし其の仔細如何と云ふに抑々製紙事業には專業と兼業者は一年中間斷なく此業を營めども兼業者は他の業務の暇を計りて從事するものにて例へば農家が耕作の閑なる時に抄紙屋となる如きものあれば其の使用する女女にも自ら區別ありて其の賃錢に於ても亦た多少の差違あるべし而して專業者の女工は日給七八錢より始りて十七八錢迄あり兼業者の女工は尙ほ其れよりも廉にして一日得る所平均十二三錢に過ずと云ふ尤も江戸川製紙會社を除きては他に精良の和紙を製造するものなく何れも抄返しの粗品なるを以て其の賃錢も從つて廉なるものなりと

●●●

●●●●●壁紙發明の由來　壁紙は金革より轉じ來りたる一種の形紙にして西洋室の壁、天井、窓縁等を張るに用ゆるものあり左れは其販路は內地よりも海外に多くして昨今の輸出高は八九萬圓の間にあり此の壁紙は東京にのみ製造せらるゝものにて其他には之れを製造するものなし今此紙の發明せられたる由來を尋ぬるに古來我國には金革と稱するものありて武具或は馬具等の裝飾に用ひたるが後には紙にて之れを摸造するものありて或は煙草入を作り或は手文庫を製したるに其の價廉にして好く金革に擬ひたるより大いに世間に行はるゝに至れり而して古代本金革の小切は横濱開港の當時外國人の間に賣れ行きたるが明治五年の頃鐵道局の御雇技師オールドリッチと云へる人日本橋區四日市の袋物商竹屋方に來りて金革の小切を出し此見本通りにて幅の廣く又た丈の長きものを作り呉れずやと注文せしかば竹屋にては乘て同家の金革を製造し居たる山田某と云へる職人と謀り同年の三月深川に工場を設けて紙製金革を應用し始めて幅三尺、長さ三丈六尺の大物を作りたるが是れぞ日本に於ける壁紙製造の濫觴なりける尚は翌明治六年には澳太利に大博覽會あり竹屋より壁紙製の大テーブル掛を出品したるに大に洋人の嗜好に適ひ夫れより海外輸出の途を開きて遂に今日の盛況を見るに至りしなりと

●●●●●壁紙製造所の變遷　斯くて竹屋の工場は深川より飯田町四丁目に移り夫れより又た小石川柳町に轉じたるが中途にして其主人を更へ今の伊藤壁紙製造所となれり竹屋に次ぎて壁紙の製造を始めたるは印刷局にして同局にては明治十一年の頃より餘業として壁紙の製造を企て明治十二年に至りて稍〻壁紙らしきものを作り出せしかば之れを木挽町の工商會社に托して販賣せしめしかども賣行兎角乏しかりしにぞ同會社は其の約束を辭し印刷局にては更らに横濱二十五番館へメルド商會同二十番館ロットマン、ストロング商會等と特約し明治二十三年に至る迄其事業を繼續し居たり然るに同年の暮事業の都合に依りて之れを廢し其の器械一切を曾て同局員なりし山路良三氏に拂下げ山路氏は印刷局の事業を其儘に繼續し今日に至る迄盛りに製造し居れり今の牛込區五軒町にある山路壁紙製造所即ち是れなり尚は其他の製造所を尋ぬれば明治十三年の頃彼の山田某は竹屋と分離して獨立の工場を淺草神吉町に起し其後ストロング商會の通辯たりし飯田某は同區小島町に同製造所の設けたり又た印刷局の局員にして其職を辭し此業を創めたるもの或は山路製造所より分離して單獨の工場を設けたるものあり今日にては市中を通じ九ケ所の多きを見るに至りぬ又た今日此事業に從事する男女職工の數は六百餘人ありて中女工は三百餘人あり尚は壁紙の原紙を製造するものは小石川、牛込邊に多く其の職工數は二百五六十名ありと云ふ

●●●●●壁紙の種類　壁紙は其用途に從ひて種々の種類あれぞも之れを大別すれば金革仕上と象牙仕上

の二種となる金革仕上とは其地の金革の如き色をなし象牙仕上とは其地の象牙の如き色をなしたるを稱す尚ほ其の摸様を區別すれば左の如し

高彫地入彩色　金地彩色　地入彩色　象牙彩色　透明彩色　二枚打地入

高彫地入彩色は壁紙中の最上等に位するものにて其巧みなるものに至りては浮彫を見る如く彩色亦た緻密にして全躰に古色を帶びたり之れに次ぐものは金地彩色にして光彩の燦然たる金革を欺くべし象牙彩色は近來發明せられたるものにて地合の古雅なるを特色となす透明彩色は象牙彩色より出でたるものにて其の模様に透明なる艶を加へたるものを稱す二枚打地入は普通の壁紙にして之れぞと云ふ特色なし又た以上壁紙の代價は一本（幅三尺、長三丈六尺）九圓より始りて三圓五十錢位までありと

●●●　壁紙の模様　壁紙は西洋各國に於て製造せられけるが就中佛蘭西を以て第一とし其の模様の巧妙なること他邦の及ぶ所にあらす英吉利の壁紙は多く更紗形にて佛蘭西の如く華美なるもの少なし英國の壁紙中にて珍しきは羅紗の屑粉を以て箔に更へたるものにて其の巧みたるものに至りては櫛子地の浮織を見る如く紙製なりとは思はれず此等の壁紙は彼地にても意匠の登錄を受けて專賣特許となり居れりと亞米利加の壁紙も英國と大同小異あり日本の壁紙は其の紙質に於て又た其の摸様に於て世界第二に位し佛蘭西を除きては他に其の類を見すと日本壁紙の摸様には純然たる和風のものと和洋折衷のものとありて其色合は派手なるものにても亦た地味なるものにても出來ざるものなし摸様を作るには寫生と想像の二者ありて當業者は古代の模様を案して一種想像的のものを作り出し或は實物に就て寫生的のものを製する等專ら意匠の點に苦心し居れりと云ふ近頃伊藤壁紙製造所にて意匠登錄を受けたる壁紙模様は菊、牽牛花、菖蒲等にて就中菖蒲の模様は地を藍となして之れを水に擬へ菖蒲の花は實物通にして翡翠及び鳴を以て之れに配し意匠頗る巧妙にして日本壁紙中稀れに見るものあり壁紙の模様は其使用の途に從に地合を異にし例は婦人の居間を張るには優しき模様を用ひ食堂或は廊下等を張るには地味なるものを用ゆる如し又た模様の寸法に至りても天井に用ゆるものと壁張に用ゆるものとは自ら差違ありて其最も大なるものは一模様にて六尺四方を滿たすものありと

●●●　壁紙の應用　壁紙は壁、天井、窓縁等の裝飾に用ひらるゝのみならず瀧車の客室等を張るの用に供し又た扉風、衝立等を作くるに用ゆと云ふ現に九州鐵道會社の如きは客車用のにめに米國製の壁紙を見本となし其製造方を伊藤壁紙製造所に注文し來りたりと又た内地にては家屋の構造を異にするため壁紙使用の途甚だ狹く曾て印制局にて大隈伯の聲邸を張りたると竹屋製造所にて山

田伯の邸を張りたるの外は別に聞く所あかりしに近年に至りては各官衙、銀行會社、倩は貴顯紳商の邸等にて此壁紙を使用する向ありて伊藤壁紙製造所の如きは本年一月より今日迄に七百餘圓の品を製造したりと内地雑居も既に近づきたれば之れより洋風家屋の建造を増すべく壁紙の製造は益々盛況を見るに至らん

●●●●●壁紙製造の順序　壁紙を製造するには先づ原紙を水に浸し之れを軸木狀の形に懸けて其上より たゝきつけたる後、順次之れを他の一方にある軸木に巻きつけ行くものにて其模様を凸起せしむべき所には餡と稱し原紙の切を幾枚となくたゝき付くるなり斯くすれば模様の凸起したる所は自ら堅くなりて決して窪むが如き憂ひなし西洋にては器械を用ゆる故斯る方法を施す能はず凸起したる模様を作るには原紙を蒸して膨脹せしめたる後器械にかけて推め付くるなりと云へり斯くして出來上りたる壁紙は之れを乾陰となし乾き上りたる後之れに薬品を塗りて更らに銀箔を加へ其上に漆を塗るなり右にて普通の壁紙は出來下れども上等のものは尚ほ之れに地入若くは彩色を施さざる可からず地入とは壁紙の地合に種々の色を入れる謂にて最初に作られたる壁紙は摸様も地合も一色なれば少しく上等のものを作らんには必ず地入をなすの要あり地入をなすには先づ壁紙を丈成りの臺に延ばし置きて油紙にて作りたる小さき模様の形を當て其上より油繪具を付けたる刷毛にてたゝき付くれば模様の所は以前の儘にて殘り其地合の所は望み通りの色となるなり偖て地入の出來たる壁紙は更らに之れを彩色場に送りて花は花、葉は葉にて彩色せしむ彩色をなすには矢張り地入をなす如く壁紙を丈成りの臺に延ばし置きて一方より少しつゝ彩色をなし行くものにて其の繪具には西洋の油繪具を用ひ筆樣の刷毛にて一々彩色をなすなり又た古雅なる品を作るには更らに薬品を塗りて寂味を付けるものなりと

●●●●●壁紙女工の仕事　壁紙の製造中にて女工の關係せるものは地入と彩色の兩仕事にて就中彩色の如きは女子が緻密なる思想に適し誠に恰好の職業なり壁紙女工は最初に地入の仕事をなし其伎の熟練するに從ひて彩色に移るものにて久しく此仕事をなし居れる女工は自ら畫心を得て花鳥等を差支なく寫すものありと彩色中にて一番六ケ敷きものは葉或は葩の筋を付ける仕事にて其節の際立ちて眞に實物の如く見するには熟練なる技倆を要すと云へり又た彩色をなすには一莖一葩の末に至る迄緻密なる注意を要するを以て心力を費やすこと尠なからずとぞ壁紙女工の年齢は大抵十二三才より三十前後のものにて其賃錢は仕事の性質に依りて差違あれども普通は日給七八錢より二十二錢迄にて特別の伎倆あるものは二十五錢位を得らるゝなりと左れども斯る高賃は四五年間其道に入りて苦心せしものにあらねば得がたく普通のものは一日十五六錢に過ぎずとぞ壁紙事

業の前途は頗る多望なるを以て此際より此伎に從事すれば隨分面白きことあるべし

●洋紙の製造　我國に於て洋紙製造の業を起したるは明治七年の頃時の大藏大輔たりし澁澤榮一氏が政府の用達たりし島田組小野組等と謀りて日本橋區蠣殻町に有恒舍なる製紙工場を創めたるを嚆矢となし其後澁澤氏の官を辭するや更らに王子村に製紙場を起したるが是れぞ今の王子製紙會社の起原にて引續きて大阪中之島、京都梅津等に製紙事業を創むるものあり今日にては全國を通し九ヶ所の製紙所を見るに至りぬ今其の社名及び女工數を示せば左の如し

社名	女工數	社名	女工數
王子	一二九	富士	七六
千壽	六〇	四日市	二三
磯野	二三	下郷	一八
王子	一四七	神戸	七四
有恒	二三	阿部	一八

右の製紙場中にて其の製造高の多きは富士製紙會社にして最近一ヶ年の出來高は九百七十三萬五千九百六十五磅之れに次ぐものは王子製紙會社にして同一年の出來高八百六十九萬一千九百五十七磅其の最も少額なるは有恒舍にして同一ヶ年の出來高は六十萬三千〇九十七磅なりと云ふ

●洋紙の女工　洋紙は抄上より斷截に至る迄悉く器械を用ゆるを以て女工を要すること少く殊に近來は種々新規ある製紙器械の發明せられ時間と人工を省くこと尠なからず近頃米國エルセンサニスと云へる所にて立木を切倒し紙を製し之れを新聞紙に印刷したるに其間僅かに三時間に過ぎざりしと云ふ左れば我國にても其の產出高の多き割合に職工を使用すること尠なく其の全數を合するも一紡績會社に及ばず而して製紙器械を運轉するには蒸氣力を用ゆるものと水力を用ゆるものとありて富士磯野の兩製紙所は水力を用ひ其他は蒸氣力を使用せり洋紙の原料は稻藁と襤褸の二種なるが洋紙女工の關係せるものは此原料を精撰するの仕事なり而りて王子及び有恒兩社に於ける最近一ヶ年の原料消費高を聞くに王子は襤褸八十一萬三千八百二十一貫、稻藁百十五萬〇五百九十四貫、有恒は襤褸六萬九千〇八十一貫、稻藁二百三十萬七千七百六十五貫を消費せりと女工の賃錢は賃取の方法を用ひ一貫毎に計算しけるが其の最下なるものは十錢其の最高なるものは二十錢を得らると云ふ王子抄紙部に於ける製紙の狀況は尙ほ詳記したれば茲に復記せず

女敎師及び保姆

●女敎師の位置　上は高等師範學校の敎授より下は私立學校の准敎員に至る迄其の地位にこそ高下の別あれ其の責任に至りては輕重の差なく何れも未來の良妻賢母を薰陶し若くは女子に必要の技藝を指南するにあれば女子の採るべき職業中にありては最も高尙にして名譽なるものなり殊に

小學校の兒童を敎訓する如きは柔婉なる女子の心性に適合し其し成績頗る見るべきものあるを以て歐米諸國にては夙に小學校に女子を採用し米國の小學敎師は七分通迄女子を以て占め居れりと云ふ我國にて女子を小學敎員に採用したるは明治十三四年の頃にて當時は其數も僅少にして二三都會の地に限られたるが爾來女敎師養成の機關完備すると共に年々多數の女敎師を出し今日にては小學敎員のみにて四千人を越ゑ尙は各種學校の敎員を合する時は五千人を超ゆるに至れり之れを以て女子の無勢力なりし當年に比すれば其進歩誠に驚くの外なし而して今日の女子の關係せゐ學校及び其の人數を擧ぶるに左の如きものあり

校名	敎員數
高等女子師範學校	一〇
尋常師範學校	四八
尋常及高等小學校	四、六七八
幼稚園	三九九

右の外華族女學校あれど之は宮內省の管轄に屬し普通學校と性質を異にするを以て記さず技藝學校は音樂學校の一個所にて雜種學校とは慈善學校、日曜學校、小守學校の如きものを指すなり之より人員の多き小學敎員の事を紹介せん

校名	敎員數
高等女學校	八三
技藝學校	二
雜種學校	六九〇

女子の職業

●●●●●●●日本に於ける尋常小學校の數は百二十一個所にして高等小學校の數は官立二個所、公立千九百九十三個所、私立三十個所なりと云ふ官立の小學校は高等師範學校及び同女子師範學校の附屬校なり而して官立の小學校を除き其他の小學校に從事する女敎師の數を尋ぬるに先づ●●●●●●小學本科敎員は二千七百二十一人にして尙は之れを細別すれば左の如し

尋常科正敎員

公立	一二三五
私立	七五

尋常科准敎員

公立	七九〇
私立	五九

又た各府縣中にて百人以上の女敎師を使用する所を揚ぐれば

東京	二七五	新潟	一二〇
廣島	一〇九	富山	一一五五
		京都	一〇〇

にして十人以下を使用する所は三重（八人）岩手（七人）埼玉（五人）なりとす又た小學專科敎員の數

は一千九百五十七人にして尚はこれを細別すれは左の如し

尋常科正教員		
公立	九四	
私立	二	
尋常科准教員		
公立	九二四	
私立	二四	

又た各府縣中にて百人以上の專科教員を使用する個所は

東京	一三六	富山　一〇八
島根	一一六	石川　一四五

にして三人以下を使用するものは千葉(三人)秋田(一人)山梨は一人もなし此專科教員なるものは重に裁縫若くは唱歌等の教員にて近年各小學校に裁縫課を補充せしより此種の教員を增加したり尙ほ此に掲載したる統計は總て文部省第廿二年報に依りたるものなれは現今は多少の變更を免れず左れども教育界の現狀に考ふれば女教師の數は增すことあるも減ずることなし

小學教員の區別　小學教員には正教員と准教員の二種あり正教員は其名の如く小學校の生徒を

高等科正教員		
公立	二〇五	
私立	一三	
高等科准教員		
公立	六八二	
私立	一二	

教授するの資格を備へたるものを指し准教員は完全に教員の資格を備へざれども便宜上正教員の補助として採用するものを稱するなり故に其の俸給待遇等にも差異ありて正教員には年功加俸退隱扶助等の特典あれども准教員は之れを受くる能はざるが如き其の一例なりとす而して此兩教員の資格を定むる所の標準をば先づ高等科正教員は尋常師範學校本科卒業生若しくは同教員檢定試驗の及第者高等科准教員は同教員檢定試驗の及第者を以てし又た尋常科正教員は尋常師範學校簡易科卒業生若くは同教員檢定試驗の及第者尋常科准教員は同教員檢定試驗の及第者を以てせり又た右の中にて准教員の試驗は高等尋常共直ちに之れを受くるを得れども高等科正教員の試驗は先づ尋常科正教員の資格あるものにあらねば受くる能はず左れども尋常科准教員を一ケ年間勤務したるものは之れを同科の正教員に陞し又た高等科准教員を一ケ年間勤務したるものは之れを同科の正教員に陞すの特例ありとす又た小學教員には本科と專科の別ありて本科とは普通の教員を指し專科とは或る一學藝を教授するものを稱す而して小學校に定めたる專科は躰操、唱歌、圖畫、英語、農業、工業、手工、裁縫等なるが右の中にて女教員の關係せるものは唱歌裁縫等なれども往々は英語圖畫の如きもの亦女教員の手に歸するに至らん專科にも正准教員の別あり其待遇方は本科に於ると同樣なりとす此專科に適應する課目は尋常師範學校にて隨意科として課たる